学位論文

日本語心理述語文のアスペクト

―話者による事態の捉え方の観点から―

広島大学大学院　教育学研究科

文化教育開発専攻　日本語教育学分野

小竹　直子

2011 年

目次

第 1 章　序論 2
1.1　研究の目的と意義 2
1.2　研究の対象 7
1.3　論文の構成 9

第 2 章　先行研究の検討と問題提起 12
2.1.　語彙的アスペクトの理論的背景 12
2.2.　心理動詞のアスペクトに関する先行研究 17
2.2.1.　〈状態〉であるとする立場 17
2.2.2.　〈動き〉であるとする立場 19
2.2.3.　〈状態〉と〈動き〉の中間であるとする立場 22
2.2.4.　まとめと問題提起 26
2.3.　心理形容詞に関する先行研究 27
2.3.1.　主観的性質 28
2.3.2.　時間的限定を受ける性質 31
2.3.3.　心理形容詞が変化を表す現象 36
2.3.4.　まとめと問題提起 40
2.4.　第 2 章のまとめ 41

第 3 章 心理動詞と心理形容詞の使い分けと事態の捉え方 45
3.1.　問題となる現象 46
3.2.　心理述語のモダリティによる使い分け 48
3.3.　心理述語のアスペクトの相違と使い分け 52
3.3.1.　心理形容詞と心理動詞の語彙的アスペクト 52
3.3.2.　心理動詞テイル形のアスペクト 55
3.3.3.　時の従属節における使い分け 56
3.4.　アスペクトによる使い分けの検証 60
3.4.1.　調査の目的 60

3.4.2.　調査方法 61
3.4.3.　調査結果 62
3.4.3.1.　調査 1 の結果 62
3.4.3.2.　調査 2 の結果 63
3.4.4.　結果の考察 64
3.4.4.1.　調査 1 の考察 64
3.4.4.2.　調査 2 の考察 64
3.5.　話者による事態の捉え方と述語の使い分け 65
3.6.　第 3 章のまとめ 67

第 4 章　心理動詞が状態を表す文 70
4.1.　問題となる現象 70
4.2.　心理動詞のル形の解釈と経験者の非明示化 74
4.2.1　経験者を明示する属性文 75
4.2.2　明示されない経験者の解釈 77
4.3.　事象が属性化する現象 80
4.4.　事象の属性化に関わる要因 81
4.5.　心理動詞による属性文の成立条件 86
4.5.1　成立条件①：経験者の被動性 87
4.5.2　成立条件②：主題の原因性 90
4.5.3　成立条件③：事象の恒常性 92
4.6.　形容詞が表す状態との違い 94
4.7.　第 4 章のまとめ 96

第 5 章　心理形容詞が変化を表す文 99
5.1.　問題となる現象 99
5.2.　形容詞の意味と形容詞＋ナルとの交替 102
5.2.1.　形容詞の主観性 103
5.2.2.　形容詞の時間的限定性 106

5.3.　条件文における状態と変化の近接性の要因 110
5.3.1　状態が変化に近付く 110
5.3.2　変化が状態に近付く 114
5.4.　心理形容詞の意味と条件文の 2 つの解釈 120
5.5.　変化動詞が表す変化との違い 122
5.6.　第 5 章のまとめ 123

第 6 章　結論と今後の展望 128
6.1.　本研究のまとめと結論 128
6.2.　本研究の意義 131
6.3.　日本語教育への示唆 133
6.4.　今後の展望 135

参考文献 138
資料 142

【表 1】心理形容詞と心理動詞の対応関係と語例 8
【表 2】動詞と形容詞の対応関係を持たない心理述語の例 8
【表 3】Vendler（1967）の四分類 15
【表 4】金田一（1950）の四分類 15
【表 5】調査 1（一人称主語）の結果 63
【表 6】調査 2（三人称主語）の結果 63
【図 1】状態と変化の近接性と交替現象 125

第１章

序論

第１章　序論

1.1　研究の目的と意義

感情・感覚・知覚など人の心理を表す日本語の表現には，「嬉しい，安心だ[1]，痛い」などの形容詞によるものと，「困る，疲れる，心配する」などの動詞によるものがある。本研究では，前者を心理形容詞，後者を心理動詞と呼び，両者を併せて心理述語と呼ぶことにする。心理形容詞と心理動詞は，文の中で使用される際，非常に近い意味を表す場合がある。たとえば，次の(1)(2)(3)の例では，形容詞と動詞が意味的に接近しており，互いに置き換えても文が伝えようとする意味に影響を与えない[2]。なぜこれらの文で形容詞と動詞が近い意味を表すことができるのだろうか。

(1)　日本の現状を知って，とても｛悲しい／悲しんでいる｝。
(2)　変化のない人生は，｛退屈だ／退屈する｝。
(3)　家の中を綺麗にすると，とても｛気持ちがいい／気持ちがよくなる｝。

これらの形容詞と動詞が表す意味を考えてみると，次のような共通点があることに気が付く。それは，それぞれ述語が表す事態が時間の流れの中にどのように存在するか，また時間の中に位置しないかという点で意味の共通性を持っているということである。(1)では形容詞と動詞がどちらも心理の継続という時間局面を表しており，(2)では，時間的変化を含まない状態を表している。そして(3)では，形容詞も動詞も心理変化が開始する局面を表しているように思われる。このように形容詞と動詞が同じ時間局面を表せるのはなぜだろうか。また，

---

[1] 「安心だ，退屈だ，心配だ」などは，いわゆる学校文法の品詞分類では「形容動詞」と呼ばれているが，本研究では形容詞に含めるものとする。

[2] 本論文で用いる例文は，特に断りがない場合は筆者の作例である。文法性判断も基本的に筆者の判断によるが，判断が微妙であるものは，複数の日本語母語話者の判断を補助的に用いた。文法性判断を示す記号として，非文法的な文は「*」，非文法的とまでは言えないが，かなり不自然さを伴う文は「??」，不自然さが伴う文は「?」，文法的には正しいが，意図した意味と異なる場合は「＃」で示す。

このような場合に，形容詞か動詞かの違いによってどのような意味の違いが生じるだろうか。本研究の関心は，事態の時間的展開をどのように表すかにおいて，心理形容詞と心理動詞が相違を持つのかどうか，そして相違があるとすれば，なぜ互いに近接する場合があるのかという問題である。この事態の時間的展開の捉え方を本研究ではアスペクトと呼ぶ。本研究は，心理形容詞と心理動詞の間のアスペクトの相違と近接性を解明することを目的とする。

本研究が具体的に取り組む課題は，次の三つである。第一に，(1)に示した「悲しい」と「悲しんでいる」，「楽しい」と「楽しんでいる」のような形態的に対応する心理形容詞と心理動詞テイル形の使い分けである。この二つの述語形式は同じ時間局面を表すことができるが，アスペクトの相違を要因として使い分けられる場合もある。たとえば，(1)ではどちらの述語形式も心理の継続を表しているように思われるが，(4)のような時の従属節の中に埋め込むと，違いが感じられる。

(4) 日本の現状を知って，{??悲しい／悲しんでいる} とき，さらに悲惨なニュースが入ってきた。

すなわち，(4)のような時間節内の述語の場合，動詞テイル形が好まれ，形容詞の使用は不自然に感じられる。この違いは，動詞が本来時間の流れの中で展開する事態を表すものであるのに対して，形容詞が一様な事態を表すものであるという相違に起因するのではないだろうか。つまり，語彙的意味に時間展開を含むか否かという語彙的アスペクトの相違が要因となって，(4)のような使い分けが生じるのではないかと考えられる。本研究は，(4)のような例を手がかりに，心理述語の間のアスペクトの相違を明らかにしたい。

二つ目に扱う問題は，(2)のような場合に，心理動詞が時間の流れの中で変化しない状態を表すのはなぜかという問題である。上で述べたように，(4)のような例では心理動詞が時間の流れに沿って展開する事態を表していると捉えられる。一方で，(2)のような場合は，心理動詞「退屈する」が形容詞「退屈だ」と同様に，時間の中で変動しない一様な事態，すなわち「変化のない人生は退屈なものだ」という状態を表しているように思われる。では，なぜ(2)のような場

合に心理動詞が状態を表すことができるのだろうか。心理動詞のル形が常に状態を表すとは限らない。たとえば，(5)のように表現しても，「変化のない人生は嫌なものだ」という状態を表すことにならず，日本語として不自然な文になってしまう。

(5)　??変化のない人生は，嫌がる。

したがって，(2)のような場合に心理動詞が状態を表すのは，心理動詞がもともと語彙的に状態性を持っているためではなく，何らかの要因によって状態化しているためではないかと考えられる。そこで本研究では，どのような心理動詞で，なぜ(2)のような文が成立するのかを考察することで，心理動詞が状態化する要因を明らかにしたい。また，それに加えて(2)のような場合に，動詞が表現する意味と形容詞が表現する意味に，どのような違いがあるのかを考察したい。

三つ目に扱う問題は，本来時間の中で変動しない状態を表す心理形容詞が，(3)のような場合に変化を表すのはなぜかという問題である。(3)では，形容詞の言い切りの形と，形容詞と変化動詞が複合した「形容詞＋ナル」という形がともに条件文の帰結部分に現れ，それらは文意に影響を与えず交替可能となる。したがって，このような場合には形容詞が単独で変化を表しているように思われる。しかし，心理的意味を表さない一般の形容詞ではこのような現象は成立しない。(6)のような文では，主節の述語に形容詞の言い切りが用いられず，変化動詞との複合が必須となる。

(6)　テレビを近くで見ると，目が｛*悪い／悪くなる｝。

形容詞の言い切りと形容詞＋ナルとは，本来状態と変化という事態の異なる局面を表すものである。それがなぜ(3)のような文では意味的に近接しているのだろうか。本研究では，(3)のような場合に二つの述語形式が交替可能になる要因を考察することによって，状態を表す形容詞と変化を表す動詞がアスペクト的近接性を持つ要因を明らかにしたい。そして，この現象と心理形容詞の意味

特性との関わりを明らかにし，心理表現に固有の要因によって状態と変化が近付く可能性があることを示したい。

以上の議論を通して本研究は全体として，人が心理変化を経験するという事態をどう捉え，どう言語化するかという問題に述語の品詞を手がかりに迫ろうとするものであると言える。心理という目に見えない事態を言語化する際，その事態の時間的展開のあり方は話者の捉え方に影響を受けると考えられる。すなわち，話者の解釈によって時間の中で展開する事態としても展開しない一様な事態としても捉えられる可能性があるということである。そのような心理的事態の特性によって，形容詞による表現と動詞による表現が，ある時は近接性を持ち，ある時は使い分けられるのではないだろうか。本研究は，冒頭の例文(1)(2)(3)のように，心理形容詞と心理動詞が接近する現象を話者による事態の捉え方の観点から考察することを通して，心理述語のアスペクト特性を明らかにしたい。

本研究が明らかにしようとしている問題を整理すると，以下の 4 点にまとめられる。

① 心理動詞がテイル形を取る場合，心理形容詞とどのような意味の相違を持つのか，なぜ相違が生じるのか。
② 心理動詞のル形が状態化するのはどのような場合で，心理形容詞が表す状態性とどのような違いがあるのか。
③ 心理形容詞が条件文の帰結部分で変化を表せるのはなぜか。心理動詞が表す変化とどのような違いがあるのか。
④ ①から③で観察されたことは，話者による心理的事態の捉え方をどのように反映しているか。

①については第 3 章で，②は第 4 章で，③は第 5 章でそれぞれ議論を展開する。④の事態把握の観点は全ての議論をつなぐ概念であるため，各章で考察を行う。そして，第 6 章でそれをまとめることで本研究の総括としたい。

心理形容詞と心理動詞のアスペクト的相違と近接性を考察することを通して，本研究は次のような点で理論的発展に貢献できると期待される。まず，心理動

詞の語彙的アスペクトをどう位置付けるかは先行研究で見解の一致を見ていない問題である。本研究はこの問題に心理形容詞との比較という新たな角度からアプローチする。心理形容詞と比べることで，心理動詞が時間展開を含む動的な事態を表すものか，時間展開を含まない静的な状態を表すものかを明確に捉えることができると期待される。

また，心理表現は目に見えない事態を捉えて言語化するという性質上，言語間で差が生じやすいと考えられる。そのため，日本語の心理述語のアスペクト特性を記述することは言語学的意義が認められるとともに，非母語話者に対する日本語教育にも必要な情報を提供することにつながると期待される。たとえば，日本語では形態的に対応する心理形容詞と心理動詞のペアが数多く存在するが，このような心理述語のペアを持たない言語もある。(7)に示すように，日本語では心理形容詞と心理動詞テイル形が任意に使用可能である場合も，英語や中国語では形容詞か動詞のどちらか一方で表されるのが一般的である。したがって，これらの言語を母語とする日本語学習者にとって，日本語の心理形容詞と心理動詞の使い分けは理解しにくいことが予測される。

(7) a. 日本の現状を知って，私は｛悲しい／悲しんでいる｝。
b. I am sad to know the current Japanese situation.
c. 了解日本的现状,我感到悲哀。

実際に日本語学習者の作文には，心理述語の品詞の選択において不自然な使用が見られる。たとえば(8)(9)は筆者が収集した日本語学習者による作例だが，日本語母語話者にとっては違和感のある文である。＜＞は学習者の国籍である。これらの文では，それぞれ括弧内に示したように，形容詞を用いたほうが自然に感じられる。

(8) 私はこのアニメを<u>楽しむ</u>ので，何度も見ました。＜マレーシア＞（→このアニメは楽しい（おもしろい）ので）

(9) 私は心の中に秩序やルールに縛られることを本当に<u>嫌いました</u>。＜中国＞（→縛られることが本当に嫌いです）

日本語母語話者は直感的に形容詞と動詞を使い分けることができるが，日本語学習者にとってそれらを自然に区別することは非常に困難であることが予測される。そこで心理述語の相違と近接性を追究する本研究の考察は，これらの語彙の使い方を学習しようとする日本語学習者にとって有益な情報となると考えられる。

1.2　研究の対象

本研究が考察の対象とする心理述語の定義は次のとおりである。すなわち，心理述語とは，感情・感覚・知覚など人の心理状態・精神作用を表す形容詞と動詞を指す[3]。一般に心理動詞と呼ばれるものには，「思う，信じる，覚える」など認識・思考を表す動詞も含まれるが，これらの動詞は意志性を持つ点で感情・感覚を表す心理動詞と区別されると指摘されている（吉永 2008：92）。形容詞は意志性を持たないため，認識・思考動詞に意味的に対応する形容詞はほとんど見られない[4]。したがって，認識・思考動詞は対応する形容詞との相違と近接性が問題とならない。そこで，本研究では意志性を持たず，経験者を主語にとる心理動詞のみを対象とする[5]。

本研究が考察対象とする心理形容詞と心理動詞の例を【表 1】と【表 2】に挙げる。なお本研究は，述語の意味と統語的特性の関係を捉えることに主眼を置いているため，心理動詞・心理形容詞の範囲がどこまでかという語彙分類の問題には立ち入らない。【表 1】と【表 2】に示した典型的な語を中心に考察を進める。

---

[3] 名詞述語もあり得るが，心理述語全体の中では数が少ない。また名詞述語は，たとえば「彼の成功は驚きだ」のように原因を主題とする文を形成することが多く，「?私は彼の成功が驚きだ」のように経験者を主語とする文は形成しにくい。このことからも，形容詞や動詞とは基本とする構文が異なると考えられるため，本研究の対象には含めないこととした。

[4] 「望む」に対して「望ましい」があるが，その他には見られない。

[5] なお，「腹が立つ」「気になる」のような慣用表現も，単純に動詞ないし形容詞として扱うことが難しいため，考察の対象に含めないこととした。

【表 1】心理形容詞と心理動詞の対応関係と語例

動詞を形成する接辞[6]	心理形容詞	心理動詞
-む，-る，-う	痛い，憎い，惜しい，悲しい，楽しい，苦しい，悔しい，懐かしい，羨ましい，恐ろしい，恥ずかしい，悩ましい，嫌いだ，哀れだ	痛む，憎む，惜しむ，悲しむ，楽しむ，苦しむ，悔やむ，懐かしむ，羨む，恐れる，恥じる，悩む，嫌う，哀れむ
-する	退屈だ，安心だ，満足だ，心配だ	退屈する，安心する，満足する，心配する
-がる	寂しい，嬉しい，欲しい，こわい，かわいい，痛い，悔しい，懐かしい，恥ずかしい，苦しい，惜しい，残念だ，嫌だ，迷惑だ	寂しがる，嬉しがる，欲しがる，こわがる，かわいがる，痛がる，悔しがる，懐かしがる，恥ずかしがる，苦しがる，惜しがる，残念がる，嫌がる，迷惑がる

【表 2】動詞と形容詞の対応関係を持たない心理述語の例

対応動詞なし[7]	辛い，むなしい，眠い，だるい，かゆい，腹立たしい，気持ちがいい，苦痛だ，など
対応形容詞なし	怒る，迷う，憧れる，呆れる，ためらう，怯える，飽きる，白ける，惚れる，戸惑う，困る，弱る，疲れる，激怒する，落胆する，失望する，イライラする，ハラハラする，ワクワクする，など

本研究はこれらの語の意味的・統語的振る舞いを検討しながら，冒頭で述べ

[6] ここでは形容詞と動詞に共通する語幹を語基とし，その語幹と結合して動詞を形成するものを接辞とする。これらの動詞を形容詞派生動詞として捉える杉岡(2009)の捉え方に倣っている。

[7] 「対応動詞なし」とした形容詞は「～がる」によって動詞化されにくいものを挙げたが，文脈によってはそのような動詞化があり得る。

た 3 つの研究課題に取り組む。また，心理述語の特性を知るために，心理的意味を表さない一般の述語と適宜比較しながら議論を展開する。

1.3　論文の構成

本論文は，次のような流れで議論を進める。まず第 2 章で，本研究が取り組む問題を明確にする。その主な内容は，心理動詞の語彙的アスペクトの問題と心理形容詞のアスペクト特性の問題である。まず 2.1 節で，本研究の理論的枠組みとしての語彙的アスペクトの理論を概観し，〈動き〉と〈状態〉という本研究で用いるアスペクトの対立概念を定義する。2.2 節で，心理動詞の語彙的アスペクトに関する先行研究の指摘を検討し，心理動詞は〈動き〉か〈状態〉かという議論の争点となる問題点を整理する。また 2.3 節では，心理形容詞が〈動き〉を表すように見える現象を指摘する先行研究を概観した上で，その現象と心理形容詞の意味特性との関わりについて明らかにされていない点を指摘する。

続く第 3 章から第 5 章までは，本研究の中心的議論である心理形容詞と心理動詞のアスペクト的相違と近接性について議論を展開する。第 3 章は，主にアスペクトの相違を論じ，第 4 章と第 5 章は，近接性を主に扱う。それぞれの具体的内容は以下のとおりである。

第 3 章では, 1.1 節で示した(1)のような例における心理形容詞と心理動詞テイル形のアスペクトの相違を考察し，両者がアスペクトの相違を要因として使い分けられることを理論的に説明する。その上で，母語話者の述語選択の傾向を調査した結果を報告し，心理形容詞と心理動詞テイル形のアスペクトによる使い分けを実証する。

第 4 章では，(2)のように心理動詞が状態を表す現象について，どのような心理動詞がなぜ状態を表せるのかを考察する。そして，それによって心理動詞が本来的には〈動き〉を表すものであるが，文や談話のレベルで〈状態〉を表す場合があることを明らかにする。また，心理動詞によって表される状態性が，形容詞が表す状態性と本質的に異なる点を明らかにする。

第 5 章では，心理形容詞が(3)のような条件文の帰結部分で変化を表す現象を考察する。すなわち，本来〈状態〉を表す形容詞がなぜ変化を表すことができ

るのか，その要因を考察し，心理形容詞の意味特性とどのような関わりがあるかを明らかにする。またそれとともに，心理形容詞が表す変化と変化動詞が表す変化との間にはどのような相違があるかを明らかにする。

最後に第 6 章で，全体の議論をまとめ，本研究の結論を述べる。そして，本研究の結論がどのような理論的意義を持つかを述べる。また，本研究から日本語教育へ示唆されることを述べる。最後に，今後の発展的課題について触れる。

第 2 章

先行研究の検討と問題提起

第 2 章　先行研究の検討と問題提起

本章では，心理述語のアスペクトに関する先行研究の指摘を検討し，本研究の問題提起を述べる。まず，述語の語彙的アスペクトとは何かに関して，一般的な概念と代表的な類型を示す。そして，特に心理動詞の語彙的アスペクトの位置付けを明らかにする上で問題となる〈動き〉と〈状態〉というアスペクトの対立概念を定義する。その上で，心理動詞の語彙的アスペクトが〈動き〉に属するのか,〈状態〉に属するのかという問題をめぐる議論を概観する。すなわち，心理動詞を，〈状態〉を表す動詞であるとする立場と，〈動き〉を表す動詞であるとする立場，そして，その中間的存在であるとする立場があり，先行研究の見解は一致していない。そこでそれぞれの先行研究の指摘を検討しつつ，議論の争点となる心理動詞のアスペクト的特殊性について整理する。そして，先行研究で解明されていない問題点を指摘する。次に，心理形容詞の意味特性について，先行研究の指摘を概観し，その意味特性が心理動詞とのアスペクト的近接性にどのように関わっているかを検討する。そして，心理動詞と心理形容詞の近接性をもたらす形容詞の側の要因について，先行研究では明らかにされていない点を指摘する。

2.1.　語彙的アスペクトの理論的背景

語彙的アスペクトとは,語がそのものの意味の中に持っている時間感覚であると言われている（影山 2009:17）。どのような時間感覚が語に備わっているかについて，Vendler(1967)や Dowty(1979)では,「継続性」「完結性」「動的性」といった時間的意味を挙げている。それぞれについて以下で説明する。

たとえば,「歩く」という動詞は，時間の流れの中に一定の幅を持って存在する事態を表すが,「(駅に）着く」という動詞は，一瞬の事態を表す。このように動詞によって継続的な事態を表すか，瞬間的な事態を表すかという時間感覚の違いが見られる。この違いは,「継続性（durativity)」の有無による対立として捉えられる。

また，「歩く」が表す事態には，いつになれば終わるかという終点が含まれていないが，たとえば「家を建てる」という動詞句が表す事態は，家が完成した瞬間に終了を迎えるため終点を含んでいる。このように事態がある時点で完結するか否かという違いは，「完結性(telicity)」による対立として捉えられる。

「歩く」，「駅に着く」，「家を建てる」などの動詞が表す事態は，時間の流れの中で開始したり終了したりする時間展開を含んでいる。たとえば，「家を建てる」は，家を建て始めてから，一定期間「建てる」活動が継続して，家が完成すれば「建てる」活動が終わるというように，時間に沿って展開する過程を含んでいる。それに対して，「本棚に国語辞典がある」の「ある」のように存在を表す動詞や，「空が青い」などの形容詞は，その状態が継続する限り，展開したり，変動したりしない一様な事態を表す。このように時間によって展開するか，変動しない一様な事態であるかという時間感覚の違いは「動的性（dynamicity）」の有無による対立として捉えられる。

以上のように，「継続性」「完結性」「動的性」という観点から動詞（または動詞句）が持つ時間感覚の相違が捉えられることが指摘されている。また，それらの相違は次のような言語テストによって判断できることが知られている。すなわち，継続性の有無は，「1 時間，30 分ほど」のような継続期間を表す期間副詞との共起性によって，完結性の有無は，「1 時間で，30 分ほどで」のような事態の展開までの期限を表す期限副詞との共起性によってそれぞれ診断できるとされている（Vendler 1967）。そして，動的性の有無は，進行形（テイル形）を形成できるかどうか（Vendler 1967，金田一 1950）や，日本語ではル形の解釈が未来時を無標とするか否か（鈴木 1957）によって診断されている。

具体的な例は次のとおりである。継続性を持つ動詞「歩く」は，（10a）のように「1 時間」などの期間副詞と共起するのに対して，継続性を持たない「着く」は（10b）のように共起しない。

(10) a. <u>1 時間</u>公園を歩いた。
b. ??<u>1 時間</u>広島駅に着いた。

また，「歩く」は完結性を持たないため，(11a)のように「1 時間で」などの期

限副詞と共起しないが,「着く」は完結性を持つため,(11b)のように共起できる。

(11) a. ??1 時間で公園を歩いた。
b. 1 時間で広島駅に着いた。

動的性の有無は，次のようにテイル形を形成できるかどうかによって測られる。時間展開を含む動詞はテイル形を形成できるが，時間展開を含まない状態動詞は，テイル形を形成しない。(12b)のように言えないことから,「ある」は時間展開を含まない状態動詞であることがわかる。

(12) a. 今家を建てている。
b. *今本棚に国語辞典があっている。

また，ル形で未来時を表すか，現在時を表すかによっても動的性の有無を判断できる。すなわち，(13a)のように時間展開を含む動詞は，ル形で通常未来の事態を表すが，(13b)の「ある」のような状態動詞は，ル形で現在実現している状態を表す。

(13) a. （これから）{歩く／駅に着く／家を建てる}。
b. （??これから）本棚に国語辞典がある。

以上のような語彙的アスペクトの相違によって，Vendler(1967)は動詞（句）を 4 つに分類している。その後も語彙的アスペクトの分類に関しては様々な学説が提唱されているが，Vendler(1967)はその礎となる研究である。

Vendler(1967)の分類と動詞（句）の例を【表 3】に示す。

【表 3】Vendler(1967)の四分類

分類	動詞句の例	継続性	完結性	動的性
状態 (state)	know, love, belong, be asleep	○	×	×
活動 (activity)	run, swim, walk, push a cart	○	×	○
達成 (accomplishment)	paint a picture, make a chair	○	○	○
到達 (achievement)	recognize, find, win a race	×	○	○

日本語動詞の語彙的アスペクトに関しては, 金田一(1950)の四分類が代表的である。金田一(1950)は，テイル形が付くかどうかを基準として，【表 4】のように分類している。

【表 4】金田一(1950)の四分類

分類	分類基準	動詞（句）の例
状態動詞	テイルを付けることができない	机がある，猫がいる，英語ができる
継続動詞	テイルを付けて, 動作が進行中であることを表す	本を読む，字を書く，雨が降る，風が吹く
瞬間動詞	テイルを付けて，動作・作用の結果が残存していることを表す	死ぬ，電気がつく，結婚する，卒業する
第四種動詞	いつもテイルを付けて, 状態を表す	山がそびえている，高い鼻をしている

金田一(1950)の四分類は, その後のアスペクト研究に影響を与える学説となったが，その分類が完全なものではないことも後の研究で指摘されている。すなわち，金田一(1950)の分類では，テイル形を形成し且つル形とテイル形がアスペ

クトの対立を成さない場合に分類が曖昧となることが,藤井(1966)で指摘されている。たとえば「属する」と「属している」のような場合に，前者は状態動詞，後者は第四種動詞に分類されることになる。すなわち，同一の動詞が異なるアスペクト類型に分けられることになってしまう。したがって，形態的にテイル形を形成するかどうかによってアスペクト分類を行うことには限界があると言える。これに対して奥田(1977)では，ル形とテイル形が「完成相」と「継続相」というアスペクト対立を成すかどうかで語彙的アスペクトを分類することを提案している。たとえば,「属する」と「属している」は，ル形が「完成相」，テイル形が「継続相」というアスペクト対立を成しているわけではない。このような動詞を奥田(1977)は状態動詞に分類している。そして，アスペクト対立を成す動詞を動作性動詞とし，動詞をアスペクト対立によって二分している。動作性動詞はさらに，テイル形が表す意味によって継続動詞と瞬間動詞に下位分類される。

本研究が関心を持つ心理形容詞と心理動詞の語彙的アスペクトの相違を捉える上では，時間展開の有無，すなわち Vendler 分類の基準では動的性が問題となる。時間展開とは，時間の流れの中で開始したり，終了したりする過程のことである。時間展開の有無による区別は，述語のアスペクト類型を大きく二つに分ける基準として，多くの先行研究で採用されている。すなわち，動詞分類としては，奥田(1977)の「動作性動詞」と「状態動詞」の区別の他に，鈴木(1957)の「動作性動詞」と「状態性動詞」の区別がある。また，命題の意味的類型としては，仁田(2001)の「動き」と「状態」の区別，文の叙述類型としては，眞野・影山(2009)の「出来事文」と「状態文」という区別がこの基準に基づいている。本研究では,仁田(2001)の名称に倣い,時間の流れの中で展開する事態を〈動き〉,そのような時間展開が含まれない事態を〈状態〉と呼ぶこととする。〈動き〉を表す動詞は,「完結性」や「継続性」によってさらに下位分類できる。 すなわち，Vendler 分類の「活動動詞」「達成動詞」「到達動詞」，金田一分類の「継続動詞」と「瞬間動詞」のような類型に分けられる。しかし，本研究ではそれらの区別は問題にせず，それらを総称したものとして〈動き〉と呼ぶこととする。

2.2. 心理動詞のアスペクトに関する先行研究

心理動詞の語彙的アスペクトに関して，〈状態〉であるとする立場，〈動き〉であるとする立場，またその中間的な存在であるとする立場があり，先行研究の見解は一致していない。ここではそれぞれの立場の先行研究の指摘を検討しつつ，心理動詞の語彙的アスペクトを解明する上で問題となる現象について整理する。

2.2.1. 〈状態〉であるとする立場

奥田(1988:8)では，「疲れる」「イライラする」「退屈する」などの心理動詞を挙げ，このような心理的な事態を表す動詞は，「動作も変化も表してない，ただの「状態」を差し出している」と述べている。すなわち，心理動詞は動的時間展開を含まない〈状態〉であると主張されていることになる。これらの動詞はテイル形を形成するが，ル形とテイル形が意味的にアスペクトの対立を作らないと奥田氏は捉えている。奥田氏がいう「状態」は，恒常的なものではなく時間の中に一定の幅を持って存在する出来事であるが，動的時間展開は含まれていないとされている。

奥田氏の語彙的アスペクトの分類は，まずル形とテイル形のアスペクト対立が成り立つか否かで，本研究で言う〈動き〉を表す動詞である「動作性動詞」と，〈状態〉を表す動詞である「状態動詞」に二分する。心理動詞はル形とテイル形がアスペクト対立を成さないと看做されているため，「状態動詞」と同じ分類に入れられることになる。しかし，状態動詞との違いも一方で指摘されている。それは，ル形とテイル形が自由に交替可能であるわけではない点である。たとえば，(14)のような例で，もうひとつの動作が進行しているときに，与えられた状態がそれと同時に存在している場合，動詞のテイル形が使われなければならず，ル形と交替できないというものである。(14)では「街へ出た」という動作との同時性を「疲れていた」が表していると考えられる。

(14) 映画の主題も製作者の意図もわかっていなかった。彼女はただ刺激的な場面を見にゆき，それを見てきただけだった。そして，それだけ

で十分満足し，終わって街へ出たときには，ぐったりと疲れていた。

（奥田 1988:9，下線は原文の通り）

しかしながら，奥田(1988)では(14)のような現象によって，心理動詞のテイル形が〈動き〉の時間展開の一部を表しているとは認めていない。むしろ心理動詞が表す事態は，過程が仕切られていないと述べている。奥田氏はその根拠として(15)のように心理動詞のル形が話し手の現在の心理状態を表すことを指摘している。

(15) 「あら，それじゃ，あなたは私をこの家の中に閉じ込めておくおつもりなの？ふん，あきれるわ。」

（奥田 1988:10，下線は原文の通り）

ある動詞が表す事態が開始局面や継続局面といった過程の区別を持つなら，その動詞のル形は未来時を表し，現在時を表す場合はテイル形が用いられる。したがって，(15)の「あきれる」が，現在の心理状態を表すことができるのは，心理動詞が表す事態が，開始局面や継続局面といった過程の分化を持たないためだと奥田(1988)では説明されている。ここで言う過程の分化を持つ動詞とは，本研究で言う〈動き〉を表す動詞で，反対に過程が仕切られていない動詞とは，〈状態〉を表す動詞である。〈動き〉の動詞と〈状態〉の動詞がル形の解釈によって区別できることは，鈴木(1957)でも指摘されている。すなわち，(16a)は普通未来の事態を表すため，〈動き〉の動詞であるが，(16b)は現在の事態を表しているため，〈状態〉の動詞であると判断できるという。以上のことから，(15)のような場合に心理動詞のル形が現在の心理状態を表すのは，確かに〈状態〉を表す動詞としての特徴を示しているように思われる。

(16) a. 本を読む。
b. 池に鯉がいる。

しかし，心理動詞のル形の解釈は語彙的アスペクトのみによって決まるもの

ではなく，次のような要因によっても影響を受ける。第一に，表出のモダリティによるものである可能性がある。表出とは，「話者の瞬間的現在の感情・感覚を直接に言語化するもの」と山岡(2000:86)で定義されている。心理動詞のル形がこのモダリティを帯びる場合に，「発話時の感情＝現在時の感情」という解釈が生じると考えられる。すなわち，瞬間的現在を表すことが表出のモダリティの要件である（中右 1994:44，山岡 2000:183）ため，(15)の「あきれる」が表出を表していると解釈される限り，現在時を指していると看做されるということである。

第二に，属性化している可能性がある。(17)のような一般の〈動き〉を表す動詞のル形の場合も，未来時の解釈とともに，喫煙者であるという属性の解釈があり得る。したがって，心理動詞が〈動き〉を表す動詞であったとしても，属性の解釈を受ける可能性があると言える。

(17)　太郎はたばこを吸う。

以上のような可能性を考慮すれば，(15)のようなル形の解釈によって，直ちに心理動詞の語彙的アスペクトが〈状態〉であるとは認められない。また，(15)のようなル形の解釈が全ての心理動詞に見られるものではないことからも，心理動詞の語彙的アスペクトを示す現象とは考えにくい。たとえば，(18)のように言えば，現在の心理状態ではなく，未来における心理変化の予告として解釈されるだろう。

(18)　怒るわよ。

したがって，奥田(1977)の主張は，心理動詞のアスペクト特性を示唆しているものの，アスペクト分類上の位置付けを決める上で十分な根拠を提示するものではないと言える。

2.2.2.　〈動き〉であるとする立場

三原(2000，2004)と吉永(2008)では，心理動詞が〈状態〉ではなく，〈動き〉

を表すものであると主張している[8]。その根拠はまず，心理動詞は(19)のように生産的にテイル形を形成するという点である。(20)に示すように「ある，いる」などの状態動詞はテイル形を形成しないため，心理動詞がテイル形を形成することは状態動詞との大きな相違点である[9]。

(19)　私は今｛悲しんでいる／苦しんでいる／楽しんでいる／怖がっている／心配している，…｝。

(20) a.　犬が｛いる／*いている｝。

b.　冷蔵庫が｛ある／*あっている｝。

また，三原(2000，2004)と吉永(2008)では心理動詞のル形の解釈は未来時制であると主張されている。〈動き〉を表す動詞は既に述べたように，通常ル形で未来の事態を表す。三原(2000)では，(21)のような例を示して，心理動詞はル形で普通未来の事態を表し，現在の事態を表すためにはテイル形を用いなければならないと述べている。これは，〈動き〉を表す動詞に共通する特徴である。

(21) a.　親が悲しむぞ。（悲しんでいる）

b.　心配するよ，おじいちゃんが。（心配している）

c.　この味では客が飽きる。（飽きている）

（三原 2000：57）

またさらに，心理動詞が開始点を意味に含んでいることが指摘されている。〈状態〉を表す動詞はそのような動的時間展開を含まないため，開始点を含むことは〈動き〉を表す動詞である根拠となる。

心理動詞が開始点を含む動詞であることは，(22)のように開始点を表す時間副詞と共起することや，(23)のように開始を表す複合動詞を形成することから示さ

[8] 吉永(2008)は，「持続性」の観点から心理動詞を下位分類している点で，三原(2000，2004)とは異なるが，心理動詞の語彙的アスペクトを動作動詞と同様の分類に位置付ける点は共通している。

[9] ただし，既に述べたように，形態的にテイル形をとるからといって，〈動き〉の動詞であるとは限らない。「属する」と「属している」，「意味する」と「意味している」などはテイル形を形成するが，奥田(1977)で状態動詞に分類されている。

れる。

(22) a.　進は問題を見て 1 分で諦めた。
　　b.　田中は 10 分程度で講師の話にうんざりした。
　　c.　僕はここに来たことを 10 秒で後悔した。
（三原 2000 :67）

(23) a.　アルバイトをやめて，一週間で，もうお金に困り始めた。
　　b.　嫌いな曲の演奏が始まってすぐに，頭がガンガンし始めた。
（吉永 2008 :112）

一方で，〈状態〉を表す動詞は，(24)や(25)のようにこれらの要素と共起せず，開始局面を表すことができない[10]。

(24) a.　*田中くんは後 10 分程で家にいる。
　　b.　*注文して一週間で本棚に辞書がある。
(25) a.　*9 時から学生が教室にい始める。
　　b.　*冷蔵庫にビールがあり出した。

以上のことを根拠として，三原(2000，2004)，吉永(2008)では心理動詞は〈状態〉とは明らかに異なるアスペクト性を持つと結論付けている。

しかし，〈状態〉である可能性を完全に否定するには問題も残されている。三原(2000，2004)や吉永(2008)でも，(26)のように心理動詞のル形が現在の事態を表す例が存在することは認められている。そこで，この(26)のような心理動詞のル形の解釈をどう説明するかが問題となる。

(26)　a.　そんなこと，困るよ。
　　b.　あいつの喋り方はイライラする。

[10] ただし，事象全体の開始を表す解釈なら容認される可能性がある。たとえば，(25a)の例も，複数の学生が教室に集まり始めるという解釈なら容認されやすい。その場合，[[学生がいる]始める]という構造をとり，「学生がいる」という事象の開始を表していると考えられる。すなわち，「いる」という事態の内部の変化を表しているわけではないため，「いる」に開始点は含まれていないという三原(2000)，吉永(2008)の主張に反しない。

c.　この喫茶店は落ち着く。　（三原 2000:58）

三原(2000)では，(26)のような心理動詞は，対応する状態表現が欠如しているために，ル形でその代用をしていると説明している。確かに日本語の心理動詞には「苦しむ」に対して「苦しい」，「退屈する」に対して「退屈だ」といったように対応する状態表現を持つものが多い。

しかし，(26)の現象と対応する状態表現の有無は必ずしも関係していない。対応する状態表現を持つ心理動詞が(26)のような文を形成することもあるし，それを持たない心理動詞が必ず(26)のような文を形成するわけでもない。(27)のような例を参照されたい。(27a)では対応する名詞述語とともに動詞ル形が用いられるし，(27b)では対応する状態表現を持たないが，動詞ル形が代用をするとは言えない。

(27)　a.　海外での生活は，{憧れる／憧れだ}。
　　b.　敵の威嚇は，{??ひるむ／*ひるみだ}。

したがって，状態表現の代用であるとする三原(2000)の説明では，完全にこの現象を説明することはできない。そこで，心理動詞が語彙レベルで〈動き〉を表す動詞であるとすれば，なぜ(26)のような場合に〈状態〉的になり得るのかを説明する必要がある。奥田(1988)が指摘する例は，表出のモダリティの関与によって状態化している可能性が考えられた。しかし，三原(2000)で挙げられている(26)のような文は，話者の瞬間的現在の感情というよりも，「誰にとってもそうだ」といった一般的な意味に解釈される。したがって，表出のモダリティによって現在時の解釈が生じているという説明も必ずしも適用できない。では，なぜ(26)ような例で，心理動詞のル形が現在時を示すことができるのだろうか。これは，先行研究で十分に解明されていない問題であると言える。

2.2.3.　〈状態〉と〈動き〉の中間であるとする立場

ここでは，心理動詞が〈動き〉とも〈状態〉とも同一の分類に位置付けられないとする立場の研究を取り上げる。

まず，鈴木(1957)の「動作状態性動詞」という位置付けが挙げられる。既に述べたように鈴木(1957)では，動詞をル形の解釈によって「動作性動詞」と「状態性動詞」に分けている。ル形で未来を表すものが「動作性動詞」で，現在の事実を表すものが「状態性動詞」であるが，その両方の場合が認められる心理動詞はどちらか一方に決められない。そこで，その両方の性質を持った「動作状態性動詞」という曖昧な位置付けが与えられることになる。ただし，鈴木氏は均等に両方の性質を備えていると考えているわけではなく，基本的には動作性動詞であると考えているようである。鈴木氏は(28a)のように心理動詞のル形が話し手の態度や主張を表す用法を挙げ，動作性動詞が未来における話し手の行為を表すことから派生した特殊な用法であると述べている。また，(28b)のように持続性を表す点では心理動詞は動作性動詞と何ら変わりはないとしている。

(28) a. 用がすんだらさっさと帰って来てくれないと困るよ。
b. お父さん仕事が出来ないで困っているの。

（鈴木 1957:78-79）

鈴木(1957)は，同じ心理動詞にも〈動き〉としての面と〈状態〉としての面があることを指摘している点で，本研究にとって重要な示唆を与えるものである。しかし，動作性と状態性の二重の性質を持つという位置付けに終わっており，どのような場合に状態的になるのかという問題には踏み込んでいない。また，(29)に示すように，心理動詞の中には，ル形で現在時を表しやすいものと表しにくいものがあるように思われる。すなわち，(29a)の「困る」のル形は現在の事態を表しているように感じられるが，(29b)の「怒る」のル形で同じような文を形成しようとすると不自然に感じられる。そこで，どのような心理動詞のル形がなぜ状態性を帯びるのかを明らかにする必要がある。

(29) a. そんなことは困る。
b. ??そんなことは怒る。

国立国語研究所(1985)は，開始や継続といった時間局面の境目が，心理動詞の

場合目に見えず，はっきり区別できないという理由で，心理動詞はアスペクトから解放されているとしている。つまり，国立国語研究所(1985)では，心理動詞が開始局面，継続局面などの過程を持つ動詞であることは認めているものの，局面と局面の境目がはっきりしないため，基準時との関係がわからなくなると述べている[11]。開始局面と継続局面がはっきり分かれている場合は，基準時から見て，開始前であるか，開始後の継続局面であるかが捉えやすいが，心理動詞の場合，そもそも開始や継続という事態の展開が見えにくいので，基準時における時間局面が捉えにくいということである。

国立国語研究所(1985)は，(30)のような例を挙げて，心理動詞が通常のアスペクトから解放されていることを次のように説明している。

(30) a. ああ，お腹がすいた！
b. 驚いたな。これが当年の園田だと思うと。
（国立国語研究所 1985:68-69，下線部原文通り）

すなわち，(30)における「お腹がすいた」「驚いた」は，本来現在以前に開始の局面が成立したことを表しているが，その後に続く局面と分けられないために，結局，開始と継続を同時に表してしまうという。

つまり，心理動詞は語彙的には〈動き〉を表すものだが，文の意味にそれが現れない場合があるという指摘に受け取られる。これは，直感的にはうなづけるものである。しかし，心理動詞が表す時間局面の区別は常につけにくいのか，どのような場合に区別がつけにくくなるのかという点は明確ではない。また，(30)のような例で，タ形が過去の変化と現在の状態を同時に表しているという解釈は，心理動詞に限られる現象ではないと考えられる。寺村(1984:120）に次のような指摘がある。すなわち，子供に「大きくなったね」と言うとき，現在「大きい」という状態であることを，過去から現在に至る変化の終点にあるものとして述べているという。(30)の「お腹がすいた」などのタ形の解釈も同様に，過

[11] 国立国語研究所(1985)では，動作動詞だけではなく変化動詞の心理動詞もあるとされていることに注意されたい。客観的なテストは特に示されていないが，心理が持続的で継続局面が認められるものは動作動詞，心理が瞬間的で継続局面が認められないものは変化動詞と判断されているようである。

去における変化の完了と現在の心理状態を話者が結び付けて述べているのではないだろうか。単に現在の心理状態を述べるつもりであれば,「私は今お腹がすいています」のようにテイル形が用いられるはずである。過去における変化が意識されているために，タ形が選ばれているのではないかと考えられる。したがって,(30)で心理動詞のタ形が現在の心理状態として解釈されるからと言って,心理動詞が語彙的に〈状態〉を表すものだとは言えないと考えられる。

以上の先行研究は，心理動詞が〈状態〉を表す動詞とも〈動き〉を表す動詞とも共通性を持つことを指摘するものであった。これに対して工藤(1995)では,心理動詞のル形とテイル形が主語の人称によって使い分けられる点で〈動き〉とも〈状態〉とも区別されるとしている。

すなわち，三人称主語の心理を表す場合，(31b)や(32b)のようにル形は不適切となり，テイル形が用いられる。

(31) a. わたし，あの時は，驚きました。
　　 b. あの時は，先生も，{*驚きました／驚いていました}。
(32) a. わたし，父は死ぬと思うわ。
　　 b. 父は，死ぬと｛*思う／思っている｝わ。

（工藤 1995:70）

工藤(1995)では，ル形とテイル形が完全なアスペクト対立を持つ動詞を「外的運動動詞」，アスペクト対立を持たない動詞を「静態動詞」と呼んでいるが，心理動詞はそのどちらでもない「内的情態動詞」という第三の類型に入れられている。それは，(31)(32)で示したように，心理動詞のル形とテイル形が主語の人称によって使い分けられる点で，外的運動動詞のような完全なアスペクト対立を成さないと看做されているためである。

工藤(1995)は,部分的には心理動詞がアスペクト対立を持つことを認めているが，心理動詞が(31)(32)のような独自の振る舞いを持つことを根拠に〈動き〉の動詞と区別している。しかし，(31)(32)は本当にアスペクト的特異性を示すものなのだろうか。(31b)(32b)の心理動詞テイル形はやはり継続局面というアスペクトを表すものではないだろうか。他者の心理を述べる場合にル形が用いられに

くく，テイル形が用いられやすいのは，事態を捉える視点の問題であるとも考えられる。他者の心理は開始から終了までを見渡す捉え方，すなわち，「完成相」の捉え方で捉えられにくく，事態の部分的な捉え方である「継続相」の捉え方で捉えられやすいというものである[12]。だとすれば，心理動詞のル形とテイル形はあくまでアスペクトの対立を成しているのであって，アスペクト的特異性を認める必要はないと考えられる。

また，心理動詞が〈状態〉を表すのであれば，対応する心理形容詞と語彙的アスペクトの上で相違がないはずであるが，アスペクトを要因として両者が使い分けられていると見られる場合がある。たとえば(33)のような場合は，心理形容詞と心理動詞のテイル形がどちらも適切に用いられる。しかし，(34)のような事態の継続を表す従属節に埋め込まれると，心理形容詞は用いられにくい。これは，心理動詞テイル形があくまで〈動き〉の時間展開の一局面を表しているのに対して，心理形容詞がそのような時間展開を含まない〈状態〉を表しているという違いがあるためではないかと考えられる。

(33) 私は昨日風邪で高熱が出て，{苦しかった／苦しんでいた}。

(34) 私が風邪で｛??苦しかった／苦しんでいた｝あいだに，妻は友だちと旅行に出かけた。

このように，心理形容詞との使い分けを考察することで，心理動詞の〈動き〉としての性質が見えてくるのではないかと考えられる。そこで本研究では，工藤(1995)が指摘する現象が本当にアスペクト対立の不完全性を示すものであると言えるのかどうか，心理形容詞との比較の観点から検討し直したい。

2.2.4. まとめと問題提起

心理動詞の語彙的アスペクトについて，〈状態〉であるとする立場と〈動き〉であるとする立場，そして，その中間的存在であるか，あるいはそのどちらとも異なるとする立場があることを見た。以上の先行研究から，心理動詞が〈動

[12] 「完成相」と「継続相」という区別が，事態の全体を見渡す視点か，事態を部分的に捉える視点かという違いによることは，Smith(1991)で指摘されている。「完成相」「継続相」という名称は，奥田(1977)，工藤(1995)に倣う。

き〉を表す動詞としても〈状態〉を表す動詞としても捉えられる側面を持ちながら，そのどちらとも区別される特殊な振る舞いを持つことが示唆された。具体的には，心理動詞のル形が現在の事態を表すことと，心理動詞のル形とテイル形が主語の人称によって使い分けられることが観察されている。そして，この振る舞いをどう解釈するかによって，先行研究では心理動詞の語彙的アスペクトの位置付け方が分かれていた。そこで本研究は，このような心理動詞に固有の現象を，心理形容詞との比較の観点から再検討したい。

ここまでの先行研究の検討から得られた示唆に基づいて，本研究の問題提起をまとめると，以下のようになる。

【問題提起①】

心理動詞のル形が未来の事態を表す場合と現在の事態を表す場合があるのはなぜか。ル形が現在の事態として解釈される文はどのような要因によって成立するのか。

【問題提起②】

心理動詞テイル形とそれに対応する心理形容詞は，アスペクトとは無関係に主語の人称によってのみ使い分けられるのか。心理動詞のテイル形が確かに動的展開を表しているなら，対応する心理形容詞とアスペクトの相違によって使い分けられるのではないか。

【問題提起①】は第 4 章で，【問題提起②】は第 3 章で詳しく考察する。特に，第 3 章では対応する心理形容詞との使い分けを実証的に示すことで，心理動詞テイル形が表すアスペクトが，形容詞が表す状態性と明確に区別されることを明らかにしたい。

2.3. 心理形容詞に関する先行研究

本節では，心理動詞と心理形容詞が意味的近接性を持つことについて，心理形容詞の側から検討したい。本研究で心理形容詞と呼ぶものは，1.2 節で示した

とおりだが，これらの形容詞は，従来「感情形容詞（西尾 1972)」と呼ばれているものと，「状態形容詞（樋口 1996，八亀 2008)」と呼ばれているものを典型とする。前者は，話者の感情や感覚など，主観的な意味を持つ点に着目した名称で，後者は，時間的限定を受けるという時間性の観点からの名称である。この「主観性」と「時間的限定性」という二つの意味特性は心理形容詞の中核を成すものであると考えられる。そこで，本節ではこの二つの意味特性を持つ形容詞の統語的特徴について先行研究で指摘されていることを概観する。その上で，心理形容詞が持つ二つの意味特性が，対応する心理動詞との相違と近接性にどのように関与しているかを検討する。特に，心理形容詞の主観性が対応する心理動詞との近接性をもたらしている可能性は先行研究では十分に検討されていない。その可能性を示す現象として，本研究は心理形容詞が条件文の帰結部分で変化を表す現象に注目する。

2.3.1. 主観的性質

形容詞を，客観的な性質・状態を表すものと主観的な感覚・感情を表すものに区別する分類は広く形容詞研究に用いられている（西尾 1972，荒 1989，樋口 1996，八亀 2008 など)。西尾(1972)では前者を「属性形容詞」，後者を「感情形容詞」と呼び，それぞれ次のようなものを挙げている。

(35) 大きい，白い，固い，速い，若い，親切な・・・ 【属性形容詞】
(36) まぶしい，痛い，嬉しい，懐かしい，嫌な・・・ 【感情形容詞】
（西尾 1972：21）

しかし，形容詞の意味が客観的であるか主観的であるかは相対的・程度的な違いで，明確な区分は難しい。また，テンスや副詞などの共起要素によって用法のレベルでタイプ間の移行が起こることが，樋口(1996)や八亀(2008)で指摘されている。そこで，本研究では，形容詞を「属性形容詞」と「感情形容詞」という二つの対立した形容詞群に分けるのではなく，形容詞をより客観的な意味を持つものからより主観的な意味を持つものへ連続体を成しているとして捉えることとする。その上で，より主観的な性質を持つ形容詞ほど，次のような形

態統語的特徴を持つことに注目したい。すなわち，主観的な性質を持つ形容詞は，形態的・統語的に対応する動詞を持ち，その動詞と主語の人称によって使い分けられるという特徴である。

心理的意味を表す形容詞が言い切りで用いられる場合，一人称の主語に限られ，三人称の心理を表す場合は，接辞「がる」を付けて動詞化することが古くから指摘されてきた（小山 1966，西尾 1972，寺村 1982，益岡 1997）。「がる」以外にも，【表 1】で示したように，「悲しむ，惜しむ」などの接辞「む」によって形成される動詞や，軽動詞「する」によって形成される動詞と対応を持つものもある。これらの対応する心理形容詞と心理動詞は主語の人称によって使い分けられる。すなわち，(37a)(38a)のように心理形容詞が文末に言い切りの形で用いられるとき，主語の人称が一人称に限られる。これを(37b)(38b)のように三人称主語にすると，不自然に感じられる。

(37) a.　私は犬が怖い。
　　b.　?あの子は犬が怖い。
(38) a.　私はあなたと知り合えて嬉しいです。
　　b.　?母はあなたと知り合えて嬉しいです。

（寺村 1982:147）

三人称の心理を表す場合には，(37')(38')のように対応する心理動詞が用いられる[13]。

(37')　あの子は犬を怖がる。
(38')　母はあなたと知り合えて喜んでいます。

このことを根拠に，寺村(1982:143)では，対応する心理形容詞と心理動詞の違

[13] 「あなたは嬉しい」のように二人称主語の場合も不自然だが，その場合は「あなたは嬉しがっている」と動詞を用いて表してもやはり不自然になる。これは，仁田(1989:41)で，述べ立て文の人称制限として説明されている。すなわち，述べ立て内容が聞き手の内的状態である場合，情報位置が「話し手＞聞き手」になることはないため，述べ立てが実効性を持たなくなるというものである。心理形容詞と心理動詞の主語の人称による使い分けは，述べ立てが可能な内容である一人称と三人称の心理の表現で問題となる。

いについて，形容詞は表出的，動詞は客観的・物語的であると述べている。すなわち，寺村(1982)では，心理形容詞の主観性を，対応する心理動詞との相違として捉えていると言える。

しかし，心理形容詞と対応する心理動詞は一方で意味的にも統語的にも共通性を持っている。杉岡(2007，2009)では，接辞「がる」によって形成される動詞が，「～と感じる」という認識動詞に相当する意味を持つと指摘している。一方で，元の形容詞も話者が感じ取ったことを述べるものである。たとえば，「光がまぶしい」と言う場合と，「光がまぶしいと感じる」と言う場合とで意味の差はほとんど感じられないように，主観的な形容詞は認識的意味を持つと考えられる。本来形容詞は話者が何らかの基準との比較において評価したことを述べるものである（樋口 1996，八亀 2008)。「まぶしい」「寒い」のような感覚を表す形容詞や，「嬉しい」「悲しい」のような感情を表す形容詞では特にこの評価性が強い。したがって，主観的意味を持つ形容詞は，認識的意味を持つ点で対応する動詞と意味の共通性を持っていると言える。

また，感情・感覚の主体を主語にとるという点も，主観的な意味を持つ形容詞の特徴であり，対応する心理動詞との共通点である。西尾(1972)で，主観的な意味を持つ形容詞が，感情の主体と対象を補語にとり得ることが指摘されている。たとえば，(39a)で述語の形容詞「寒い」は，認知・知覚の主体である「わたし」と，知覚の対象である「この部屋」を補語にとる。(39b)に示すように対応する動詞「寒がる」も認知・知覚の主体と対象を補語にとるため，元の形容詞から項が受け継がれる。一方，(40a)の「細長い」のように客観的な状態を表す形容詞は，知覚の主体を主語にとることはできない。(40b)のように認識動詞を加えることで，認識の主体である人を主語にとることができる。以上のことから，心理形容詞と心理動詞が共通して認識的意味を持つことが，人を主語にとるという統語的共通性を持つことに関わっていると考えられる。

(39) a.　わたしはこの部屋が寒い。
　　 b.　彼女はこの部屋を寒がる。
(40) a. *わたしはこの部屋が細長い。
　　 b.　わたしはこの部屋を細長く感じる。

以上のように，主観的意味を持つ形容詞と，それに対応する動詞は意味的・統語的に共通性を持つことがわかる。

2.3.2. 時間的限定を受ける性質

主観性とともに心理形容詞の意味を特徴付ける意味特性に，時間的限定を受ける性質がある。次に，時間的性質の観点から心理形容詞が対応する心理動詞と近接性を持つことを述べる。

形容詞を時間の限定を受けるか否かという観点から分類すれば，「属性形容詞」と「状態形容詞」に分けられる（樋口 1996，2001，八亀 2008）[14]。前者は特定の時間に限定されない恒常的属性を表す形容詞で，後者は特定の時間に存在する一時的状態を表す形容詞である。しかし，この二分類は固定的なものではなく，副詞や項などの共起要素や時制によって互いに移行し得ることが指摘されている（樋口 1996，八亀 2008）。また，中間的な性質の形容詞が存在することも指摘されている（八亀 2008）。このことから，主観性と同様に，時間的限定性においても形容詞はより程度性の高いものから低いものへ連続体を成していると捉えられる。八亀(2008)で，時間的限定の程度的な違いを捉える際の尺度とされている概念は，Givón(1979 ， 2001）の「時間的限定性(temporal stability)」である。「時間的限定性」とは，Givón(2001 :50)で，「述語が表す事態の時間による変化の度合い(rate of chage over time)」 と定義されているものである。工藤(2002)では，述語のテンス・アスペクトの有無やその解釈が時間的限定性の程度によって決まるとし，述語分類の尺度としている。ここではまず時間的限定性による述語の分類を概観し，その上で本研究で扱う心理形容詞が一般の形容詞に比べて，時間的限定を受ける性質を持つことを確認したい。

Givón(1979 :320，2001 :51-54)では，類型論的観点から時間的限定性と述語の品詞の関連性について次のように述べている。すなわち，時間の中で最も変化しにくい事態を名詞述語が，最も変化しやすい事態を動詞が，その中間的な

---

[14] 「属性形容詞」を樋口(1996，2001)は「質形容詞」，八亀(2008)は「特性形容詞」という名称で呼んでいるが，ここでは 2.3.1 節と統一的に「属性形容詞」と呼ぶこととした。2.3.1 節では「属性」を客観的状態として捉えたが，2.3.2 では，恒常的状態として時間的観点から捉える。

時間幅を持った事態を形容詞が表すというものである。(41)は Givón(2001 :54)で「時間的限定性」と品詞の関係のまとめとして示されているものである。

(41)　the scale of temporal stability

most stable ----------				least stable
tree,	green	sad, know	work	shoot
noun,	adjective	adjective ,verb	verb	verb

（Givón2001 :54）

(41)で green が sad よりも stable に位置付けられているように，形容詞の中でも時間的限定性がより低いものと，より高いものがあることが認められている。

工藤(2002)は，述語を 6 つの意味類型に分類した上で，それらの意味類型が時間的限定性の尺度にどのように位置付けられるかを, (42)のように示している。

(42)

most stable ――――――――――――――――――――――					least stable
〔質〕	〔関係〕	〔特性〕	〔存在〕	〔状態〕	〔運動〕

（工藤 2002:49）

上の 6 つの類型を品詞ごとに整理した分類表（p.51 図表 2）によると，上の意味類型のうち，〔質〕と〔運動〕には形容詞は該当がなく，その他の類型には(43)のように形容詞が分類されている。その中で心理形容詞は，〔状態〕に位置付けられ，形容詞の中で最も時間的限定性を受けやすい類型に入れられている。

(43)　a.　悲しい，安心だ，嬉しい，忙しい，暇だ，好調だ…〔状態〕
　　b.　ない，多い，乏しい，僅かだ，豊富だ，稀だ…〔存在〕
　　c.　優秀だ，堅実だ，詳しい，複雑だ，青い，広い…〔特性〕
　　d.　等しい，同じだ，ぴったりだ，そっくりだ，親しい…〔関係〕

では，実際に心理形容詞が時間的限定性を持つことはどのように確かめられるだろうか。述語の時間的限定性の程度を判定する方法は，仁田(2001)，影山(2008)，眞野・影山(2009)などの先行研究で，時間を限定する副詞句との共起性による方法が採られている[15]。すなわち，「何月何日に」「何時何分に」のように明確に時間を特定する副詞句，「今だけ」「しばらくの間」のような明示的ではないが時間幅を表す副詞句，「何度も，何回か，幾度も」などの度数の副詞などとの共起性によって判断する方法である。これらの副詞句と共起しやすいほど時間的限定性が高く，全く共起しないものは時間的限定性を持たないと考えられる。

心理形容詞は，明示的な時間限定と共起しにくい性質を持っている。(44a)で「病気だ」という名詞述語が時間を特定する副詞と共起するのに対して，(44b)に示すように「寂しい」などの心理形容詞は特定の時間限定と共起しにくいことがわかる。

(44) a.　去年の 11 月 30 日に彼女は病気だった。　（影山 2008:25）
　　b. ??去年の 11 月 30 日に彼女は寂しかった。

しかし，「今だけ」「しばらくの間」などの幅のある時間限定であれば，(45)に示すように問題なく共起する。一方，「女性だ」「中国製だ」のような属性を表す述語は，(46)に示すようにこれらの副詞と共起しない。

(45) a.　薄着をする今だけ太い体型が恥ずかしい。
　　b.　新しい学校に転校して，しばらくの間寂しかった。
(46) a. *山田さんは今だけ女性です。
　　b. *この商品は朝からずっと中国製です。　（眞野・影山 2009:64）

[15] 時間の限定を表す副詞句との共起可能性は，益岡(1987，他)の「事象叙述」と「属性叙述」，及びに Carlson(1980)の「場面レベル述語」と「個体レベル述語」を分ける基準でもある。「場面レベル」とは，時間の推移の中で特定の場面で成立し，その後は変化する可能性があることを指し，「個体レベル」とは主題となる名詞が個体として本来的に備えている性質を持つことを意味する。

また，心理形容詞は(47)に見るように度数の副詞と共起する可能性があるが，(48)のような恒常的属性を表す述語は共起できない。

(47) a.　あの通りは街灯が少ないので，夜通るとき何度か怖かった。
　　b.　昨日の夜発作が起きて，何度も苦しかった。
(48) a. *彼女は何回か正直者だった。
　　b. *人間は幾度も哺乳類だ。　（仁田 2001:22）

ここまで心理形容詞が時間の限定を受けやすい性質があることを見てきたが，このことは，対応する心理動詞とのアスペクト的近接性をもたらす要因となっている。すなわち，心理形容詞も心理動詞も時間軸上に位置する事態を表すことができるため，同じ時間局面を表す可能性があるということである。そのため，対応する心理形容詞と心理動詞の間でアスペクトの相違が見えにくいことが仁田(2001)で指摘されている。仁田(2001:20)は，心理形容詞と心理動詞を〈動き〉と〈状態〉のどちらに所属させるかは難しい問題だと述べている。仁田(2001)は，(49)のような形容詞と動詞の対が極めて近い意味を表すとしながらも，基本的に動詞が表す事態は〈動き〉で，形容詞が表す事態は〈状態〉であると述べている。

(49)　足がずきずき｛痛い／痛む｝。　（仁田 2001:20）

仁田(2001)ではその根拠を，動詞が開始局面を持つことに求めているが，2.2.3 で述べたように心理動詞が表す時間局面は境界が明確でないと指摘されている（国立国語研究所 1985）。そのことからもこの種の対応する形容詞と動詞が意味的に非常に近接していることは間違いなく，しかも，その要因は動詞の側だけでなく，形容詞の意味特性にも求められると言える。

ここで疑問となるのは，形容詞と対応する動詞とのアスペクト的近接性は，心理的意味を表す形容詞に限られるのか，時間的限定を受ける形容詞に共通して見られるのかという問題である。形容詞が対応する動詞とアスペクト的に近接する要因が時間的限定性に求められるなら，時間の限定を受ける一般の形容

詞にも見られるのではないだろうか。たとえば，「忙しい」や「顔色が青い」のような通常の状態から逸脱した状態を表す形容詞は，時間的限定性を持つことが八亀(2008)や仁田(2001)で指摘されている[16]。これらの述語は，(50)に示すように，時間副詞との共起性において，心理形容詞と変りはない。

(50) a. 仕事が増えて，しばらくの間忙しかった。
b. 彼は先週何回か顔色が青かった。

では，対応する動詞とのアスペクト的近接性は時間的限定を受ける形容詞の中で特に心理形容詞に見られる特性だと言えるのか，時間的限定を受ける形容詞に共通して見られるのかが疑問となる。この疑問に対する答えは，形容詞の時間的限定性だけを見ていても得られるものではない。形容詞と対応する動詞がアスペクト的に近接する現象に注目し，その現象の成立と形容詞の意味特性との関わりを考察する必要がある。

たとえば，(51)のように条件節の事態の成立を契機に，状態変化が起こることを述べる文で，(51a)の「忙しい」と(51b)の「辛い」には違いが見られる。すなわち，このような文で「忙しい」は単独で用いられにくいが，「辛い」は単独で用いられ，変化動詞ナルと複合した形とともに変化を表しているように解釈される。これは，「辛い」のような主観的意味を表す形容詞が，対応する動詞表現とアスペクト的に近接する可能性があることを示すものである。そして，一時的状態を表す形容詞で常にこの現象が成立するわけではないことは興味深い。

(51) a. 年度初めだから，春になったら，仕事が{ ?忙しい／忙しくなる}。
b. 花粉症だから，春になったら，仕事が {辛い／辛くなる}。

そこで次節では，このような条件文の帰結部分で形容詞が単独で現れる現象を指摘する先行研究を取り上げ，この現象の成立に，心理形容詞の主観性が関

[16] 語彙的に逸脱状態を表す形容詞以外にも，「妙にやさしい」の「妙に」のように逸脱状態であることを示す副詞と共起する場合には，形容詞が表す状態が一時的なものとして解釈され，時間的限定を受けることが指摘されている（八亀 2008：98)。すなわち，通常の状態から逸脱して生じた状態を表す文は，時間的限定性を持つと一般化できる。

わっている可能性を検討する。そのことを通して，従来の形容詞研究では未解決であった対応する動詞とのアスペクト的近接性の問題に迫りたい。

2.3.3. 心理形容詞が変化を表す現象

本節では，心理形容詞が条件文の帰結部分で変化を表す現象について検討し，その現象と心理形容詞の主観的性質との関わりを指摘したい。まず当該現象について，先行研究の指摘を見ておく。すなわち，豊田(1983)と定延(2002，2008)で，心理的意味を表す形容詞が条件文の帰結部分に言い切りで用いられることが指摘されている。豊田(1983)の指摘は次のようなものである。すなわち，接続助詞「と」による条件文の帰結部分に状態表現が生起する場合，その状態述語は「現在の気持ち」を述べるものに限られるという[17]。豊田(1983)は，(52a)と(52b)のような文の対比によってそのことを示している。豊田(1983)によると，(52a)の「楽しい」は自然な表現として受け入れられるが，(52b)の「にぎやかだ」はやや座りの悪い文になるという。

(52) a. パーティーは花子さんが来ると，楽しい。
　　 b. ?パーティーは花子さんが来ると，にぎやかだ。

また，定延(2002)で挙げられている例は次のようなものである。

(53) [マッサージ機の「特強」のボタンを指して]
　　 a. これ押したら，気持ちよくなるよ～。
　　 b. これ押したら，気持ちいいよ～。
(54) [新型テレビの「ワイド」のボタンを指して]
　　 a. これ押したら，画面が横に長くなるよ～。
　　 b. ??これ押したら，画面が横に長いよ～。　（定延 2002：174）

[17] 正確には，前件が動作性の述語の場合にこの意味制約があると述べている。前件が状態述語の場合には，たとえば，「このメロンは冷たいと，甘い」のように「現在の気持ち」に限られず状態述語が生起し得ると述べている。しかし，この場合，「?このメロンは冷たいと，甘くなる」と言えないように，主節の形容詞が変化を表しているわけではないと考えられる。本研究は，本来〈状態〉を表す形容詞が，〈動き〉である変化を表すのはなぜかという問題に関心があるため，前件が動作性の述語に限って議論を進めるものとする。

(53)は，マッサージ機を前に話している場面で「この「特強」のボタンを押せば，マッサージの強さが特別に強くなり，大変気持ちがよくなる」ということ言おうとする発話である。「これ押したら」という条件節に続いて，(53a)のように，形容詞と変化動詞「ナル」が複合した形（以下，「形容詞＋ナル」）が用いられる文は全く自然であり，(53b)のように形容詞が単独で用いられる場合（以下，「形容詞終止形」）も自然に感じられる。一方，(54)では「この「ワイド」ボタンを押せば，画面が横に拡張され，画面が横に長くなる」ことを表すのに，(54a)の形容詞＋ナルは自然だが(54b)の形容詞終止形は不自然になる。

本来，形容詞は時間による変化を含まない〈状態〉を表す品詞であると言われている（影山 2009）。その形容詞が，(53)のような場合に，変化動詞と同様の時間局面を表せるのはなぜだろうか。また，(54)では形容詞は単独で変化を表すことはできないが，この違いは何を示しているのだろうか。

(53)のように形容詞終止形と形容詞＋ナルが交替可能になる現象は，話者の感情・感覚など主観的な意味を表す形容詞で典型的に成立すると考えられる。定延(2002，2008)では，「体感を表す言語表現」にこの現象が見られると指摘している。また豊田(1983)でも，既に述べたように条件文の帰結節の述語になり得る形容詞は「現在の気持ちを述べる」ものに限られると指摘されている。なぜそのような主観的意味を表す形容詞に特にこの現象が見られるのだろうか。その理由について，豊田(1983)では何も述べられていないが，定延(2002，2008)に，次のような説明がある。すなわち，「気持ちがいい」のように，認知者が環境から刺激として体感を受け取ることを表す表現は，認知体験の表現であり，認知体験は特定の時空間に実現する「デキゴト」であるという。条件文の帰結部分は本来デキゴトの表現が生起する環境であるから，本来デキゴトの表現である形容詞＋ナルは常に条件文の帰結部分に現れ得る。一方，形容詞終止形は体感というデキゴトを表す場合にのみ生起可能であるということになる。

ここで「デキゴト化」とは何であろうか。体感を表す状態述語がデキゴト化するのは，時間的限定を受ける述語であるからだろうか。さらに定延（2002，2008）の指摘を検討しつつ，その問題を探りたい。定延(2002，2008)では，同様に体感を表す述語が「デキゴト化」する現象として，次のような「度数表現」

「回数表現」を挙げている。「度数表現」とは，「ときどき」のような頻度を表す副詞と結び付いて，「ときどきカラオケに行く」のように事象の発生の時間的分布度数を表すものである。「度数表現」は，一般に事象を表す動詞と結び付き，形容詞や名詞が表す状態表現とは結び付きにくいものである。ところが「痛い」のような体感を表す形容詞となら結び付くことがあると，定延(2002，2008)は指摘している。すなわち，(55a)のように「ときどき痛い」は自然に感じられるが，(55b)のように「赤い」と「ときどき」は結び付きにくい。

(55) a. このシートさっきからときどき痛いんだけど，なんか突き出てない？

b. ??このテレビさっきからときどき赤いんだけど，なんかこわれてない？ （定延 2002：173）

「回数表現」も同様に事象を表す述語と結び付くものであるが，「痛い」のような体感の表現と共起することがあると指摘されている。すなわち，定延(2002:173)で，(56)のような文が提示されている。

(56) 私は 3 回ぐらい痛かったよ。 （定延 2002：173）

これは，「皮膚感覚の実験で，痛いと感じた回数について被験者同士が話し合う」というような文脈を与えれば，自然な文として十分成り立つという。それに対して，「色彩感覚の実験で，赤いと感じた回数について被験者同士が話し合う」というような文脈を与えても，(57)の文は受け入れにくいとされている。

(57) ?私は 3 回ぐらい赤かったよ。 （定延 2002:173）

以上のように，定延(2002，2008)では，「痛い」など，刺激を得る体験の表現はデキゴト化するため，本来デキゴトの表現が生起する文環境に現れ得ると説明している。また，定延(2002，2008)は，「痛い」のような述語が一瞬の認知体験を表しているとも述べている。すなわち，認知者が環境とのインタラクショ

ンの中で情報を得るという体験を表せば，一瞬であっても特定の時空間に存在する「デキゴト」であると定延(2002，2008)は述べている。この説明によれば，心理形容詞が条件文の帰結部分で変化を表せるのは，この種の形容詞が一瞬の時間に存在する状態を表すためだということになる。しかし，形容詞が表す体験が一瞬であることが重要であるのか，時間的限定を受けることがこの現象の要因となっているのかは明確ではない。すなわち，一時的状態を表す状態述語は全てデキゴト化するのか，それとも，感情や感覚など主観的意味を表す形容詞に固有の現象なのかという点は疑問が残る。定延氏はデキゴト化する状態述語の意味特性について，踏み込んだ議論を行っていないが，定延氏がデキゴト化と看做している現象には，時間的限定性を持つ述語に広く見られるものと，主観性を持つ述語に限られるものがあるように思われる。

「度数表現」や「回数表現」との共起について言えば，主観的意味を持つ形容詞に限らず，時間的限定性を持つ述語であれば成立すると考えられる。2.3.2 で述べた仁田(2001)の指摘にあるように，時間的限定を受ける命題を表す状態述語は，これらの表現と共起する。たとえば(58)の「目が赤い」は，「認知者が環境から刺激を得る」体験を表しているとは考えられないが，度数の表現と問題なく共起する。

(58)　彼は先週ときどき目が赤かった。きっと徹夜していたんだろう。

すなわち「目が赤い」は，寝不足などの原因によってある特定の時間幅に存在するデキゴトを表すことができる。もし，時間的限定を受けるデキゴトを叙述し得ることが重要な要因なのであれば，このような述語が条件文の帰結部分に現れてもいいはずである。しかし，(59b)に示すように，「目が赤い」のような形容詞は条件文の帰結部分に単独で現れにくい。(59a)の「目が痛い」という感覚を表す形容詞と比べて，明らかに(59b)の「目が赤い」は容認度が落ちる。

(59) a.　ずっとパソコン画面を見ると，{目が痛い／目が痛くなる}。
　　 b.　ずっとパソコン画面を見ると，{*目が赤い／目が赤くなる}。

したがって，主節の述語となる形容詞が時間的限定を受ける性質を持つというだけではなく，主観性を持つことがこの現象の成立にとって重要な要因となっているのではないかと思われる。では，なぜ主観的意味がこの現象をもたらす要因となるのかという疑問が生じるが，その疑問に答えるには，デキゴト化という以上の説明が必要である。その意味で，条件文の帰結部分で形容詞が変化を表す現象と形容詞の主観性の関係は，先行研究では十分に解明されていないと言える。

また，心理形容詞と心理動詞のアスペクト的近接性という観点からこの現象は重要な意味を持つ。当該の現象は，本来時間による変化を含まない〈状態〉を表す形容詞が変化動詞に接近する現象である。この現象の成立に形容詞の主観性が関わっている可能性を検討することは，心理形容詞のアスペクト特性を探ることにつながる。本研究ではそのような観点から，この現象に注目したい。次節では，心理形容詞と心理動詞の相違と近接性に関して，形容詞の側から検討すべき問題点をまとめる。

2.3.4. まとめと問題提起

本節では心理形容詞に関する先行研究の指摘を検討しつつ，心理形容詞の意味特性が対応する心理動詞との相違と近接性にどのように関わっているかを述べた。先行研究の検討を通してわかったことは，次の二点である。すなわち，第一に，心理形容詞は主観的性質を持ち，対応する心理動詞と主語の人称によって使い分けられることである。第二に，心理形容詞は時間的限定性を持ち，対応する心理動詞と同じ時間局面を叙述できることである。これらのことから，心理形容詞の意味特性が要因となって，対応する心理動詞との使い分けが生じる場合と，また反対に近接性を生み出す場合があることが確認された。しかし，心理形容詞と対応する心理動詞とのアスペクト的近接性に関して，先行研究で十分に明らかになっていない点もある。それは，心理形容詞が主観的性質を持つことと，動的時間展開を表し得ることとの関係である。すなわち，心理形容詞は条件文の帰結部分に終止形で用いられ，変化動詞が表す変化に近い意味を表すことがあるが，この現象に心理形容詞の主観性がどのように関わっているかは明らかではない。時間的限定を受けるという以上に，変化という動的アス

ペクトに接近する要因が心理形容詞の意味特性に備わっているという指摘は，先行研究には見られない新たな知見となる。そこで，本研究は条件文の帰結部分で形容詞終止形と形容詞＋ナルが交替可能となる現象の成立要因を考察することを通して，この問題に取り組みたい。したがって，心理形容詞に関する本研究の問題提起は，【問題提起③】の通りである。

【問題提起③】

心理形容詞が条件文の帰結部分で，変化を表す動詞と交替可能となるのはなぜか。心理形容詞が主観的意味を持つことと関わりがあるのではないか。

この問題について，第 5 章で考察し，なぜ心理形容詞が心理動詞と同一の時間局面を表すことができるのかという冒頭の疑問に答えたい。

2.4. 第 2 章のまとめ

本章では，心理動詞の語彙的アスペクトに関する議論と，心理形容詞の意味特性に関する先行研究の指摘を検討した。先行研究の検討から大きく二つのことが示唆された。すなわち，心理動詞のアスペクトが〈状態〉とも〈動き〉とも捉えられることと，心理形容詞の意味特性が対応する心理動詞とのアスペクト的近接性をもたらす要因となっているということである。このことは，心理述語の語彙的アスペクトを捉える上で障壁となる問題でもあり，心理述語と他の一般の述語を隔てる特性でもある。つまり，〈状態〉と〈動き〉という異なるアスペクト類型が互いに近接性を持つということが，心理述語の特性とも言える。では，なぜ心理述語において〈状態〉と〈動き〉が互いに近接するのだろうか。本研究は次のような捉え方でこの問題を捉え直したい。すなわち，心理という目に見えない事態を言語化する際の話者の事態把握のあり方を反映しているのではないかというものである。人の心理は，目に見えないため〈状態〉としても〈動き〉としても捉えられる柔軟性を持っているのではないだろうか。そのために，それを表す言語表現においても〈状態〉と〈動き〉の表現が近い意味

を表すことになるのではないかと考えられるのである。本研究はこのような観点から心理述語文のアスペクトを捉え直すことで，先行研究では明らかにされていない問題を解明したい。

最後に具体的に本研究が扱う言語現象を示し，本研究の研究課題をまとめたい。以下に挙げる言語現象はいずれも心理形容詞と心理動詞がアスペクト的に近接する現象であり，それらの現象を考察することで，先行研究で未解決となっている問題にアプローチできると期待される。それぞれの現象について，どのような問題があり，本研究がその問題にどのように取り組むかをまとめる。

① 「わたしは｛悲しい／悲しんでいる｝」「先生は｛*悲しい／悲しんでいる｝」

対応する心理形容詞と心理動詞テイル形は，主語の人称によって使い分けられることが指摘されているが，本研究はこの現象をアスペクトの観点から再考したい。すなわち，心理動詞が動的時間展開を含む〈動き〉を表す述語であれば，時間展開を含まない心理動詞と語彙的アスペクトの相違によって使い分けられるはずである。したがって，心理形容詞と心理動詞テイル形のアスペクトによる使い分けを理論的・実証的に明らかにすることで，心理動詞の〈動き〉を表す述語としての性質が確認できる。

② 「そんなこと，困るよ」「あいつの喋り方はイライラする」

ある種の心理動詞は，ル形で状態動詞のように現在の事態を表すことができる。心理動詞が動的時間展開を含む語彙的アスペクトを持つ動詞であれば，なぜル形で現在の事態を表す場合があるのかが問題となる。本研究は，上のような文で心理動詞のル形が状態化する要因を，心理動詞の語彙的意味だけでなく，文や談話のレベルで表される状態性を含めて考察したい。そして，心理動詞が語彙的に〈状態〉を表すのではなく，本来的には〈動き〉を表す動詞であるが，何らかの条件の下で状態化し得ることを明らかにする。その上で，本来的に〈状態〉を表す形容詞との相違を考察する。

③ 「これ押したら，気持ち｛いい／よくなる｝よ」

条件文の帰結部分で心理形容詞が単独で変化を表していると解釈される場合

がある。本来時間の中で変動しない〈状態〉を表す形容詞がなぜ動的時間展開を表すことができるのだろうか。この疑問に心理形容詞の主観性と当該の現象との関わりを検討することで答えたい。そして，心理形容詞の主観性が，対応する心理動詞とのアスペクト的近接性をもたらす要因となっていることを論じる。これまで形容詞の主観性が対応する動詞との使い分けの要因となることは指摘されているが，主観性が対応する動詞との近接性を生じさせることは新たな知見となる。また，変化動詞が表す変化と，心理形容詞が表す変化にはどのような違いがあるかを考察したい。

以上が本研究で取り組む具体的な課題である。課題①を第 3 章で，課題②を第 4 章で，課題③を第 5 章で，それぞれ考察する。それらの考察を総合して，先行研究で未解決であった心理述語のアスペクトの問題に答えたい。

第 3 章

心理動詞と心理形容詞の使い分けと事態の捉え方

第 3 章

心理動詞と心理形容詞の使い分けと事態の捉え方

本章では，形態的に対応する心理形容詞と心理動詞テイル形の使い分けを考察する。第 2 章で，心理動詞のル形とテイル形が主語の人称によって使い分けられることから，心理動詞がアスペクト的に特殊であると看做されていることを述べた。また，心理動詞は目に見えない事態を表すものであるため，心理動詞が表す時間局面は境目がはっきりしないと指摘されていることを見た。これらの先行研究の指摘から，心理動詞テイル形と対応する心理形容詞が，アスペクトの相違を要因として使い分けられるのか否かは明確ではない。そこで本章では，まず心理動詞が本来動的時間展開を語彙的意味に含む〈動き〉であることを理論的に説明する。そして，日本語母語話者に対する調査によって，心理形容詞と心理動詞テイル形とのアスペクトによる使い分けを実証的に示す。

その上で，心理的事態を〈状態〉として捉えるか，〈動き〉として捉えるかという話者による事態の捉え方が，心理形容詞と心理動詞テイル形の使い分けに反映されているという本研究の見解を述べる。従来モダリティ要因によって説明されてきた主語の人称による使い分けも上で述べたような事態把握の観点から捉え直せる。すなわち，話者が事態をどのように捉えるかという事態把握の相違は，モダリティとアスペクトという二つの使い分け要因の両方に反映されていると考えられる。本研究の考察を通して，心理述語の使い分けにモダリティ要因とアスペクト要因が互いに影響し合いながら関与していることが示されると言える。

本章は，以下の流れで議論を進める。まず 3.1 節で形態的に対応する心理形容詞と心理動詞テイル形の使い分けに関する問題を確認する。3.2 節で，先行研究の指摘を検討しながら，心理動詞テイル形と心理形容詞の使い分けに関わるモダリティ要因について整理する。3.3 節で，心理動詞の語彙的アスペクトを先行

研究の指摘を検討しつつ，再考する。その上で，アスペクトを要因として心理形容詞と心理動詞テイル形が使い分けられる可能性を検討する。3.4 節では，実際にアスペクトを要因として心理形容詞と心理動詞が使い分けられることを母語話者に対する文完成課題を用いた調査によって，確かめる。3.5 節ではここまでの議論を総合して，話者の事態の捉え方と述語の品詞の使い分けという一般原則に還元した考察を行う。3.6 節で，全体の論をまとめて，本章の結論を述べる。

3.1. 問題となる現象

日本語の心理述語には，(60)のように形容詞と動詞が形態的に対応しているものがある。

(60) 悲しい—悲しむ，楽しい—楽しむ，苦しい—苦しむ，惜しい—惜しむ，悔やしい—悔やむ，憎い—憎む，懐かしい—懐かしむ

これらの対になる述語は中核的な意味を共有しているため，一見同じ事態を表現できるように見える。特に，心理動詞がテイル形の形で用いられる場合，対応する心理形容詞と置き換えても論理的意味が変化しない。たとえば(61)や(62)はそのような例である。

(61) 大学に入学して，毎日｛楽しい／楽しんでいる｝[18]。
(62) 昨日高熱が出て，一晩中｛苦しかった／苦しんでいた｝。

しかし，(61)と(62)が全ての点で意味的に等価であると言えるだろうか。形容詞と動詞という品詞の違いは何を示しているのだろうか。

先行研究では，客観的な叙述か主観的・直接的な表出かといったモダリティ

[18] 後述するように，心理形容詞の使用には主語の人称に関する制限が存在するため，省略された主語が一人称以外の解釈を受ければ，形容詞の使用は不自然となる。そのため以下の例文の文法性判断は，省略された主語を一人称と解釈した場合のものとする。

的意味の相違が指摘されている（寺村 1982）。確かに，三人称の心理表現では，(63)や(64)のように使い分けが生じることから，モダリティの観点は，これら二つの述語形式の違いを捉える上で大変重要であると言える。

(63) 太郎は大学に入学して，毎日｛*楽しい／楽しんでいる｝。
(64) 息子は昨日高熱が出て，一晩中｛*苦しかった／苦しんでいた｝。

しかし，一人称の心理表現では全く使い分けが生じないわけではない。(65)や(66)のような従属節の述語の場合には，心理形容詞よりも心理動詞テイル形が選好されることで使い分けが生じる。

(65) ゲームをして｛??楽しかった／楽しんでいた｝ときに，母に台所から名前を呼ばれた。
(66) 高熱で｛??苦しい／苦しんでいる｝あいだに，せっかくの連休が終わってしまった。

このような時の従属節を含む文は，二つの事態の同時性を表すものである。そのため，事態の展開を表すか否かというアスペクトの相違が主節の述語の使い分けをもたらしているのではないかと考えられる。このことから，先行研究が指摘するモダリティの相違だけでなく，アスペクトの相違が使い分けの要因となり得ると考えられる。

このことは，類似の事態を表す原因・理由節と比較することでより明確に示される。すなわち，(65)(66)の文と，類似の事態を表す(67)(68)の原因・理由節を含む文とを比較すると，原因・理由節では心理形容詞と心理動詞テイル形との間に目立った選好差は感じられない。

(67) ゲームをして｛楽しかった／楽しんでいた｝ため，母に台所から名前を呼ばれたが，気が付かなかった。
(68) 高熱で｛苦しい／苦しんでいる｝ので，せっかくの連休なのにどこへも出かけられない。

時の従属節と原因・理由の従属節の相違は，前者が主節との間の時間的関係を明示的に述べようとするのに対して，後者は必ずしも時間関係を問題としていないことにある。したがって，これらの従属節の間に見られる相違は，心理形容詞と心理動詞が表現する事態に，時間的展開の点で相違があることを示唆すると言える。時間的展開の違いとは，第 2 章で既に述べたように〈状態〉と〈動き〉という語彙的アスペクトの二つの類型の対立である。

形容詞は〈状態〉に特化した品詞であると言われている（影山 2009:9）が，動詞は〈状態〉を表すものと〈動き〉を表すものがあることが指摘されている（金田一 1950，Vendler1967）。また，第 2 章で述べたように，心理動詞が〈状態〉を表すものか，〈動き〉を表すものかについて先行研究の見解は一致していない。心理動詞と対応する心理形容詞が時間的展開の点において異なるのか否かは必ずしも明らかではない。

また，心理動詞は目に見えない事態を表すものであるため，展開局面が一般の動詞の場合ほど明らかではないと指摘されている（国立国語研究所 1985，金水 2000）。

したがって，(65)(66)に見られる心理動詞テイル形と心理形容詞の相違は，時間展開を表すか否かという語彙的アスペクトの相違を要因として生じているように思われるが，そのことは，先行研究では論証されていない。

そこで，本章では(65)(66)における二つの述語形式の選好差がアスペクトの相違を要因として生じることを理論的・実証的に明らかにしたい。そして，このような心理述語の使い分けの要因を探ることで，モダリティの観点だけでなく，アスペクトの観点からも心理述語の相違が捉えられることを主張したい。

3.2. 心理述語のモダリティによる使い分け

ここで挙げる先行研究は，心理形容詞と心理動詞が主語の人称によって使い分けられることを指摘し，その使い分けをモダリティの観点から説明している。本節ではそれらの先行研究の指摘を検討した上で，モダリティの観点だけでは十分に説明できない使い分けがあることを指摘する。

まず，心理形容詞は表出的，心理動詞は客観的・物語的とする寺村(1982)の指摘を見たい。寺村(1982)は，(69)に見られる心理述語の使い分けをモダリティ的意味の相違によって説明している。すなわち，(69a)は全く自然な文だが，(69b)は不自然に感じられるという違いについて，心理形容詞が文末に言い切りで表出のモダリティを帯びるためだと説明している。また，三人称主語の心理を表す際，(69c)のように，心理形容詞の代わりに対応する心理動詞が用いられる。このことから寺村(1982)は，この種の心理動詞は客観的，物語的であると述べている。

(69) a.（(37a)再掲）私は犬が怖い。
b.（(37b)再掲）??あの子は犬が怖い。
c.（(37')再掲）あの子は犬を怖がる。　（寺村 1982：147）

以上のように，寺村(1982)では，心理形容詞は表出的，心理動詞は客観的というモダリティ的意味の違いがあり，その意味の相違によって使い分けられると述べている。

一方，金水(1989)は，寺村(1982)の表出のモダリティによる説明に反論し，(69b)のような文の不適切性は，むしろ他者の心理の直接的報告という談話の情報管理上の違反であると述べている。つまり，心理形容詞の言い切りは自分自身が経験したことを直接に報告する際に用いられる形式で，他者の心理の間接的報告には用いられないというものである。まず，金水(1989)では，寺村(1982)の表出のモダリティによる説明に次のような問題があることを指摘している。すなわち，形容詞が過去形をとる場合も三人称主語の心理表現が不自然になることを説明できない点である。寺村(1984:348-349)では，表出のモダリティは形容詞の現在形で終わる文に限られるため，過去形では主語の人称制限が解除されると述べている。しかし，金水(1989)は，形容詞が過去形をとる場合も人称制限が解除されないことを指摘し，寺村(1982)の説に異議を唱えている。確かに(70a)のように過去形の場合でも，心理形容詞の使用が不自然さを伴う場合がある。

(70) 「それを聞いて，山田はどうした？」

a. 「うん，??ひどく悲しかった」

b. 「うん，?ひどく悲しんだ」

c. 「うん，ひどく悲しんでいる」

（金水 1989：125 改変）

金水(1989)では，この不自然さは，心理形容詞の言い切りが直接経験したことを報告する文体で，心理動詞テイル形が外から観察したことを報告する文体であるという違いに起因すると説明している。つまり，(69b)や(70a)の不自然さの原因は，話し手が知り得ないはずの他者の心理を直接に報告しているように感じられることにある。ただし金水(1989)は，形容詞と動詞という品詞の違いが直接文体的区別につながると述べているわけではない。動詞がテイル形で用いられる場合には，(70c)のように報告文として適切だが，タ形で用いられる場合は(70b)のように多少不自然さが伴うと指摘している。

また，金水(1989)では，動詞「悲しむ」が伝える情報を，(71)のような相の重なりとして捉え，それによって報告文における述語形式の使い分けを説明している。

(71) a. ＜悲しい＞という心的状態

b. 悲しげな表情や動作

c. 「ああ，悲しい」などの発語行為

（金水 1989:125）

すなわち他者の心理の場合，(71a)は直接知ることができないが，(71b)(71c)は外から観察可能であるため，第三者である話し手が報告することができる。したがって，心理動詞テイル形「悲しんでいる」が報告する内容は，(71b)または(71c)が観察されたということである。一方，心理形容詞の言い切りの形は(71a)を直接報告するものであるため，他者の心理の報告に向かないのである。この金水(1989)の説明は，三人称の心理表現において，心理形容詞と心理動詞テイル形が使い分けられるという事実をうまく説明していると言える。

柳澤(1992，1994)は，金水(1989)の指摘をさらに一般化して，動詞テイル形は報告性というモダリティ的意味を持つと述べている。すなわち，動詞テイル形が用いられる場合，話し手は何らかの現象を観察しており，その観察結果を報告しているというニュアンスを帯びるという。そのため動詞テイル形は他者の行為を観察して報告する三人称主語文で用いられやすい。動詞テイル形が一人称主語文で用いられる場合は，自分自身を客観的に観察している意味になるという。そのような文を柳澤(1992:59)では自分自身を三人称化した言い方だと述べている。

以上のように，直接経験を表すか観察結果を表すかという意味の違いは，確かに心理形容詞と心理動詞テイル形の一つの相違点である。しかしそれだけでは，一人称の心理表現を含めた全ての使い分けを説明することはできない。特に，3.1 節で示した(65)や(66)のように，一人称の心理表現で動詞テイル形が好まれる場合があることについて，先行研究では言及されていない。また，柳澤(1992)によれば，(65)や(66)は自分自身を三人称化した言い方であるということになる。しかし，なぜこのような例で動詞を選択して三人称化するほうが自然であり，心理形容詞を使用することが不自然になるのかは明らかではない。

(65)(66)のような使い分けがモダリティの相違だけで説明し切れないからといって，心理形容詞と心理動詞テイル形がモダリティによる相違を持つことが否定されるわけではない。しかし，重要なことは，このような例から，心理述語がモダリティの相違と同時に，アスペクトの対立を成していることが示唆されるという点である。第 2 章で，心理動詞のル形とテイル形がモダリティの影響を受けるために完全なアスペクト対立を成さないと指摘されていることを見た。もし心理形容詞と心理動詞テイル形がモダリティの相違と同時にアスペクトの相違を成しているとすれば，心理動詞の語彙的アスペクトが特殊であるとは言えないということになるだろう。そこで本章では，心理形容詞と心理動詞テイル形の使い分けを説明するには，モダリティの観点だけでは不十分で，アスペクトの観点を加えることが重要だと主張したい。そして，モダリティ的相違とアスペクト的相違が共に，心理を〈状態〉として捉えるか，〈動き〉として捉えるかという話者による事態の捉え方の相違として説明できることを論じたい。

3.3. 心理述語のアスペクトの相違と使い分け

本節では，まず心理形容詞と心理動詞が語彙的アスペクトの相違を持つこと，そして，動詞がテイル形を取る場合にその相違が解消されることを述べる。その上で，心理形容詞と心理動詞テイル形が全く意味的に等価であるわけではなく，本来の語彙的アスペクトの相違を反映して含意的意味のレベルで相違が生じることを指摘する。特に，その含意的意味の相違が，同時性を表す時の従属節で表面化することを指摘する。

3.3.1. 心理形容詞と心理動詞の語彙的アスペクト

形容詞は時間の流れによって変化したり展開したりすることのない〈状態〉を表す品詞である。それに対し，動詞は状態動詞と呼ばれる〈状態〉を表す動詞もあれば，動的な展開を含む〈動き〉を表すものもあることは既に述べた通りである。そこで，心理形容詞と心理動詞の語彙的アスペクトが対立を成すか否かを知る上で，心理動詞が〈状態〉であるか〈動き〉であるかが重要な問題となる。第 2 章で挙げた先行研究の指摘をここでもう一度振り返り，心理動詞が時間展開を持たない〈状態〉を表す動詞であるか，時間展開を含む〈動き〉を表す動詞であるかを検討する。

ある動詞が〈状態〉を表すものか，〈動き〉を表すものかは，ル形の解釈によって判断できると指摘されている（鈴木 1957，三原 2000）。すなわち，ル形が現在の事態を表す述語は〈状態〉を表すもので，ル形で未来の事態を表す述語は〈動き〉を表すものだと判断できる。ところが心理動詞の場合，2.2 節で述べたように，ル形で現在の事態を表すと解釈される場合と，未来の事態を表すと解釈される場合があるため，問題となる。たとえば，(72)では同じ心理動詞のル形が，(a)では現在の事態を，(b)では未来の事態を表しているように思われる。

(72) a. 急な変更は困る。
　　 b. この手帳がなければ，明日出張先で困る。

このことを根拠に，心理動詞は〈状態〉を表す動詞であると看做されたり，〈動き〉と〈状態〉の中間的存在であると考えられたりしてきた。しかし，(72)のような二つのル形の解釈によって，心理動詞の語彙的アスペクトを判断するのが妥当かどうか疑問に思われる点もある。

それは，全ての動詞が(72a)のようにル形で現在時を表す用法を持つわけではないということである。本章で扱う対応する形容詞を持つ心理動詞の多くは，(73a)に示すように，ル形で現在時を表すことができない。一方，(73b)のような未来時の解釈のほうは全く自然な文として受け入れられる。

(73) a. ??別れは悲しむ。
b. そんなことを言えば，お父さんが悲しむぞ。

また，(72a)のような文で心理動詞が本当に状態動詞と同様に現在の事態を表しているのかにも疑問が残る。状態動詞のル形は無標の解釈として現在の事態を表すものである。それに対して，心理動詞では，たとえば「急な変更は困るようなものだ」などのように属性的な解釈を受ける場合にのみ現在の事態として捉えられるのではないかと思われる。したがって，心理動詞のル形は，無標の解釈では未来時を表すのだが，何らかの条件の下で属性解釈を受ける可能性があると考える方が妥当であると考えられる。心理動詞のル形が属性解釈を受ける条件については，第 4 章で詳しく論じる。

以上で述べたように，心理動詞のル形の無標の解釈を未来時とする妥当性が認められる。それに加えて，吉永(2008)で指摘されているように開始限界を持つ点でも心理動詞が〈動き〉を表す動詞であることが示される。すなわち，心理動詞は(74)に示すように「～出す」「～始める」と複合して開始を表すことができると吉永(2008：112)で指摘されている。一方，状態動詞「ある，いる」は開始点を意味に含まないため，(75)のように複合動詞を形成して事態の開始局面を表すことができない。

(74) a. 男は突然苦しみ出した。
b. 12 時を過ぎると太郎は娘の帰りを心配し始めた。

(75)　((25)再掲)　a. *9 時から学生が教室にい始める。
　　b. *冷蔵庫にビールがあり出した。

このように開始限界を持つことは，心理動詞がその語彙的意味に時間展開を含んでいるということで，まさに〈動き〉を表す動詞であることを示している[19]。

当然ながら，心理形容詞は「～始める」「～出す」と複合して開始を表すことができない。心理形容詞というものが語彙的意味に開始限界を含まない〈状態〉を表すものであるためであると考えられる[20]。

(76)　a.　*大学生活が楽しい始める。(cf. 楽しみ始める)
　　b.　*喘息の発作で苦しい出す。(cf. 苦しみ出す)

以上をまとめると，語彙的アスペクトのレベルでは，心理形容詞は〈状態〉，心理動詞は〈動き〉という対立が成り立つと言える。しかし，ここで述べた語彙的アスペクトの相違が，文のレベルにそのまま受け継がれるとは限らないこともまた示唆される。冒頭で述べた(61)や(62)のような文では，心理形容詞と心理動詞テイル形が論理的意味において等価と看做せるからである。次節では，語彙的アスペクトの相違が文レベルで解消される場合があることを見る。

---

[19] ここで述べた以外にも，心理動詞が場所格と共起することは，心理を〈動き〉として捉えている証拠となると考えられる。「私は部屋で｛悲しかった／悲しんでいた｝」という場合形容詞は用いられず，動詞が義務的に選ばれる。これは，事態が部屋という特定の空間に限定されることを表すことで，部屋以外の場所では事態が成立していなかったことが含意されるからであると考えられる。このように特定の空間に限定される場合も，心理を〈動き〉として捉える動詞が適している。

[20] 後で論じるように，心理形容詞が変化の開始を表しているように思われる文がある。しかし，その場合も形容詞の語彙的意味に開始限界が含まれているためではないと考えられる。すなわち，「彼女がいれば，大学生活が｛楽しい／楽しくなる｝」のような文では，心理形容詞が変化動詞ナルと同様に，変化の開始を表しているように思われるが，これは第 5 章で詳しく論じるように，条件文の帰結部分という文脈によって，形容詞が表す状態が一瞬の変化点として捉えられるために生じる解釈である。心理形容詞は語彙的アスペクトのレベルでは〈状態〉を表すものだが，文や談話のレベルでは〈動き〉を表す可能性があると言える。

3.3.2. 心理動詞テイル形のアスペクト

一般に動詞テイル形は，その基本的な意味において動作や結果状態の一定期間の継続を表現するものである（奥田 1977）。心理動詞は前節で見たように本来〈動き〉を表すものであると考えられるため，心理動詞のテイル形は，時間によって展開する事態が始まって，終わらずに継続している局面を切り出していると言える。既に述べたように，始まりの局面は対応する心理形容詞では表すことができないが，心理動詞がテイル形をとり，継続の局面を表す場合は，対応する心理形容詞で表すことができる。(77)のような例では，心理形容詞と心理動詞テイル形がどちらも継続期間を表す副詞と共起していることからも，等しく継続局面を表していると考えられる。

(77) ((62)再掲) 昨日高熱が出て，一晩中｛苦しかった／苦しんでいた｝。

形容詞の中でも第 2 章で既に述べたように，恒常的属性を表す形容詞は一時的継続を表すことはできない。心理形容詞が時間の限定を受ける一時的状態を表す性質があるために，対応する心理動詞のテイル形と同じ時間局面を表せるのである。ここでもう一度心理形容詞が一時的状態を表すとはどういうことかを確認しておく。

心理形容詞が一時的状態を表すことは，荒(1989)，樋口(1996)，八亀(2008)，眞野・影山(2009)など多くの先行研究で認められている。心理形容詞は，Carlson(1980)で言う「場面レベル」を表す状態表現に相当する。すなわち，Carlson(1980)は，状態述語に特定の時空間に限定される「場面レベル(stage-level)」と時空間の限定を受けない「個体レベル(individual-level)」の区別があると指摘している。場面レベルの述語には，時間の流れの中で開始したり終了したりする出来事を表すものと一時的状態を表すものがある（眞野・影山 2009:44-49）。すなわち，「場面レベル」の述語には，本研究で言う〈動き〉を表すものと，〈状態〉を表す述語のうちで一時的状態を表すものが含まれるということになる。心理形容詞は，前節で述べたように時間展開を含まない〈状態〉を表す述語であるが，時間の限定を受けることができるため場面レベル述語に含まれる。形容詞が時間の限定を受けるか否かは，「今だけ」などの時間副

詞との共起性によって確かめられる。(78)に示すように「苦しい，楽しい」などの心理形容詞は,「今だけ」などの時間副詞と共起するのに対して,「背が高い，聡明だ」などの形容詞は共起しない。このことから，前者は場面レベルの述語で，後者は恒常的な属性を表す個体レベルの述語であることがわかる。

(78) a. 僕は今だけ｛苦しい／楽しい／恥ずかしい…｝。
b. *ジョンは今だけ｛背が高い／聡明だ／目が青い…｝。

つまり，副詞句を含めた文のレベルでは心理形容詞も，心理動詞と同様に時間の流れの中で発生したり, 消失したりする事態を表せると言える。そのため，心理動詞がテイル形をとる場合，両形式がともに心理の一時的継続を表し，論理的意味において違いがなくなると考えられる。

以上の考察から，心理形容詞と心理動詞は語彙的アスペクトのレベルでは相違があるものの，文法的アスペクトや副詞などの付加要素を加えた文のレベルでは, その相違が解消されることがあるということがわかる。3.1 節で示した(61)や(62)の例のように, 心理形容詞と心理動詞テイル形は論理的意味の上で差がなくなり，交替可能になる場合があるのはそのためである。

3.3.3. 時の従属節における使い分け

前節までで，心理形容詞と心理動詞のアスペクトは語彙的なレベルでは〈状態〉と〈動き〉という対立を成していること，しかし，心理動詞がテイル形を取ることにより，文のレベルではアスペクトの対立が解消されることを指摘した。ただここで，もしアスペクトの相違が完全に解消され，心理動詞のテイル形が〈状態〉を表すのであれば，なぜ初めから心理形容詞を使用しないのかという疑問が生じる。この疑問に対して，次のような事態把握の観点から考えてみたい。まず，心理形容詞と心理動詞に見られる語彙的アスペクトの相違は，事態に対する話者の認識を表していると考えられる。だとすれば，心理動詞のテイル形はあくまでも事態をいったん〈動き〉として捉えた上で，さらにその継続局面を切り出して提示していることになる。これに対して形容詞が使用された場合は，事態は最初から〈状態〉として捉えられている。このような話者

による事態の捉え方の相違は，時の従属節での選好差に現れる。すなわち，3.1 節で指摘した「同時性」を表す時の従属節における動詞テイル形の選好性である。(79)(80)に再掲する。

(79)　((65)再掲）ゲームをして｛??楽しかった／楽しんでいた｝ときに，母に台所から名前を呼ばれた。

(80)　((66)再掲）　高熱で｛??苦しい／苦しんでいる｝あいだに，せっかくの連休が終わってしまった。

すなわち，(79)や(80)は，事態が一時的に継続しているときに，他の事態が発生する「同時性」を表すものである。このような時の従属節を含む文では，時間によって展開していく事態がまさに継続中であるその時に，主節の事態が発生したということを含意する。したがって，この種の時間節に埋め込まれる述語には，可変的な事態を表すものが適している。

たとえば，(81a)のように時の従属節内に可変的な事態が表される場合は自然だが，(81b)のような文は奇妙に感じられるだろう。これは「日本が島国である」という事態が恒常的な属性であり，変化の含意と意味的に整合しないからである[21]。

(81) a.　日本がまだ鎖国をしていたときに，大きな地震があった。

b. ??日本が島国のときに，大きな地震があった。

心理述語の場合も，このように二つの事態の同時性を表す時の従属節内で用いられる場合には，時間によって変化する事態として捉えられている。心理動詞は，時間の中で展開する〈動き〉を表すため，ある時点では継続中であるが，他の時点では継続していない可能性があることが含意される。しかし，心理形

[21] 状態述語が同時性を表す時間節で用いられないわけではないことに注意されたい。たとえば，「雨脚が弱いあいだに，家へ帰った」のような場合は，状態述語である「弱い」を時間節内の述語として使用することが可能である。しかしこのような場合でも，「雨脚が弱まっているあいだに，家へ帰った」と述べれば「変化の含意」が強調され，一時的に雨脚が弱いという時間局面が存在したことが含意されるようになる。

容詞は時間展開を含まない〈状態〉を表すため，たとえ心理状態が一時的なものであっても，心理動詞のようなはっきりとした含意が生じない。したがって，同時性を表す従属節で事態がたまたま継続中であることを表現するには，〈動き〉として捉える動詞が適していると言える。

同時性を表す従属節であれば，(82)のように，「～ときに」「～ところ（に）」「～ころ（に）」など，同種の他の形式でもこの選好差が見られる。以下，このような時間関係を表す従属節を「同時性を表す時間節」と総称する。

(82) a. 友だちとおしゃべりをして｛??楽しかった／楽しんでいた｝ときに，父が部屋に入ってきた。
b. 一晩中高熱で｛??苦しい／苦しんでいる｝ところに，友だちから電話があった。
c. 失恋して｛??悲しい／悲しんでいる｝ころ，弟は彼女ができて嬉しそうにしていた。

一方，時間関係に関心のない従属節では，このような選好差が現れない。たとえば，(83)のように「ので」「せいで」「から」などの因果関係を表す従属節の場合がそうである。

(83) a. 友だちとおしゃべりをして｛楽しかった／楽しんでいた｝ので，時間が経つのも忘れていた。
b. 一晩中高熱で｛苦しかった／苦しんでいた｝せいで，宿題ができなかった。
c. 失恋して｛悲しい／悲しんでいる｝から，幸せそうなカップルが羨ましい。

この種の従属節では原因となる事態が存在していること自体に関心があり，その事態が時間によって変化するものかどうかには関心が向けられていない。そのため，心理状態の存在を必ずしも動的時間展開の一局面として捉える必要がないのだと考えられる。

また，時間節であっても，因果関係性が読み取れる場合には，選好差が生じない場合もある。たとえば(84)のような場合には，特に心理動詞テイル形が選好されるということはない。

(84) 仕事で行き詰って｛苦しい／苦しんでいる｝とき，先輩が相談に乗ってくれた。

時間節には単純に時間関係のみを表している場合と時間関係と同時に因果関係性を表している場合があると言われている（工藤 1995:255）が，(84)のような時間節は後者にあたると考えられる。

以上のことから，(79)(80)（(65)(66)再掲）や(82)のような純粋に同時性を表す時間節で見られる使い分けは，確かに動的時間展開の有無というアスペクトの相違を要因としていると考えられる。

一方で，(84)のように同時性を強調する必要がない時間節の場合や，(83)のような理由節，(61)や(62)に示した主節の述語の場合には，心理形容詞と心理動詞テイル形で偏った選好性が見られない。これは，心理という事態が時間展開のない〈状態〉としても，時間によって展開する〈動き〉としても捉えられるためだと考えられる。そのような場合には，〈状態〉と〈動き〉の区別が見えにくい。しかし区別がないわけではなく，語彙に内在するアスペクトのレベルで潜在的に相違を持っていると考えられる。その相違が，同時性という文脈によって表面化し，使い分けが生じるのである。

以上で，同じ心理を表す心理形容詞と心理動詞が〈状態〉と〈動き〉という異なる事態の捉え方を反映していること，そしてその相違が同時性を表す時間節で表面化するという仮説を述べた。しかしこのような相違は，文の論理的意味のレベルではなく，むしろ同時性から導かれる含意的意味の部分で生じているため，選好性の判断は微妙であり，文脈や個人差の影響を受けることが予想される。そこで選好性の存在を明確にするためには，調査によって統計的に，母語話者による述語の使用傾向を確認する必要があると考えられる。よって続く 3.4 節では，ここで述べた使い分けが実際に母語話者の使用に見られることを，文完成課題を用いた調査によって実証する。それによって，〈状態〉と〈動き〉

という区別が理論上認められるだけでなく，実際に母語話者の述語選択に影響を与えていることを明らかにしたい。

3.4. アスペクトによる使い分けの検証

本節では，心理を〈動き〉として捉えるか，〈状態〉として捉えるかという話者の事態の捉え方によって，心理述語の品詞の使い分けが生じるという本章の考察を，実証的に確かめたい。それによって，〈動き〉と〈状態〉という語彙的アスペクトにおける相違が，文の述語のレベルで意味の相違を生み出していることが確認される。すなわち，先行研究で指摘されているモダリティの相違に加えて，アスペクトの相違が使い分け要因となり得ることが実証されると言える。

3.4.1. 調査の目的

本調査は，3.3.3 で述べた，二つの事態の同時性を表す時間節で心理形容詞よりも心理動詞テイル形が選好されるという使い分けを検証するものである。この使い分けは，同時性を表す時間節という文脈によって，心理を〈動き〉として捉える捉え方が要求されるために生じると考えられる。調査では，そのような〈動き〉としての捉え方を要求する文脈とそうでない文脈で，動詞テイル形の選好度が異なるか否かを調べる。それによって，事態の捉え方が使い分けにつながるという 3.3 節で述べた仮説を検証することができる。

心理を〈動き〉として捉えるか否かという事態の捉え方の違いは，(85a)と(85b)のような時間節と理由節を比べることで確かめられる。

(85) a. ゲームに夢中になって｛?楽しかった／楽しんでいた｝とき，雷が鳴ったが，気付かなかった。
b. ゲームに夢中になって｛楽しかった／楽しんでいた｝ので，雷が鳴ったが，気付かなかった。

(85a)と(85b)は「とき」と「ので」という従属節の形式が異なるだけで，その

他はまったく同じ文である。しかし，その形式の違いによって，従属節の事態と主節の事態の同時性を捉えるか否かに違いが生じる。本研究の仮説が正しければ，事態間の同時性を捉える時間節においては，形容詞よりも動詞テイル形が好まれ，因果関係を捉える理由節では，そのような選好差が見られないと考えられる。それは，理由節では事態の存在が問題となるだけで，時間の中で事態が展開することに関心がないためである。すなわち，時間節では心理を変化のない〈状態〉としてではなく，動的時間展開を持つ〈動き〉として捉える捉え方が要求されるが，理由節ではそのどちらの捉え方も可能であると言える。この時間節と理由節の性質の違いを利用して，事態の捉え方と述語選択の傾向を調べ，上で述べた使い分けを実証する。

3.4.2. 調査方法

調査協力者は，広島大学に在籍する日本語を母語とする大学生・大学院生で，調査 1 は 30 名，調査 2 は 25 名であった。

調査は，(86)(87)に示すような文完成課題を用いて行われた。従属節のタイプが時間節と理由節に指定されている他は，まったく同一の文を用いた。本調査では，主語の人称によるモダリティの影響を排除するため，主語の人称を統一して調査を行った。一人称主語文は調査 1，三人称主語文は調査 2 とする。(86)は調査 1 の調査文，(87)は調査 2 の調査文の例で，それぞれ(a)は時間節条件の提示文，(b)は理由節条件の提示文である。なお，使用した全ての材料文を，巻末に資料として添付した。

(86) 悲　高校最後の引退試合で優勝できなくて，

a.　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ときに，

b.　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ので，

スポーツ推薦で大学に合格しても，喜べなかった。

(87) 悲　その子は，高校最後の引退試合で優勝できなくて，

a.　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ときに，

b.　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ので，

スポーツ推薦で大学に合格しても，喜べなかった。

(86)(87)に例示したように，各文の前に心理形容詞・心理動詞に共通の漢字一字を示し，調査協力者はその漢字を用いて文を完成させるよう指示された。調査協力者は十分な時間が与えられた中で，それぞれの空欄に述語を書き込んで，日本語の文を完成させた。

調査計画は，従属節のタイプを要因として，時間節と理由節という 2 つの基準を含む 1 要因 2 水準である。要因は，参加者内変数であった。

なお，同一の語彙が重複する回数を減らすため，時間節を指定する形式としては，「とき（に)」と「ところ（を)」[22]を用い，理由節を指定する形式としては，「ので」「ため」「から」を用いた。

調査材料は，形態的類似性の高い「悲し（い／む)・楽し（い／む)・苦し（い／む)」を用いた。それぞれを用いて，時間節・理由節内の述語部分を完成させる文を 4 文ずつ作り，24 文をターゲットとした。

時間節と理由節を入れ替えても後続文脈に整合性が保たれるように，直後の文を挿入節とし，理由節を受けるための文をその後に続けた。事態の同時性が強調されるよう，挿入節には瞬間的に成立する事態を表す文を設定した。

調査の意図が協力者に見破られないように，時間節・理由節以外の従属節，たとえば「悩みながら」や「努力を嫌う人間は」などの従属節部分（下線部）を完成させる課題をフィラーとして各調査に 12 文ずつ加えた。

3.4.3. 調査結果

3.4.3.1. 調査 1 の結果

回収された回答の中で，回答が途中までのものや，漢字を読み間違えていたものを除外した。調査 1 では 11 文（全回答の 3.0%）を除外した。調査 1 で得られた回答のうち，心理形容詞の現在時制と過去時制，心理動詞テイル形の現在時制と過去時制のそれぞれが用いられた回答数と全回答数における割合を【表 5】に示す。

[22] 「ところ（を)」は，「ある状況下で新たな事態が成立することを表す（日本語記述文法研究会 2008:223)」もので，本調査で用いる時間節と近い意味を持つ。

【表 5】調査 1（一人称主語）の結果

	時間節条件	理由節条件
（悲し）い／かった	50 (27.8%)	91 (51.7%)
（悲し）んでいる／た	115 (63.9%)	67 (38.1%)
その他	15 (8.3%)	18 (10.2%)
合計	180 (100%)	176 (100%)

時間節条件では，形容詞の使用が 50 文で全回答の 27.8%，動詞テイル形の使用が 115 文で全回答の 63.9%であった。一方，理由節条件では，形容詞の使用が 91 文で全回答の 51.7%，動詞テイル形が 67 文で全回答の 38.1%であった。この結果を基にカイ自乗検定を行ったところ，時間節条件で有意に動詞テイル形の使用が多いことが認められた（$X^2(1)=25.6$，$p<.01$）。理由節ではやや形容詞の使用が多かったが，有意傾向にとどまった（$X^2(1)=3.6$，$p<.10$）。

3.4.3.2.　調査 2 の結果

調査 2 で得られた回答のうち，3.4.3.1 で述べた理由で不適切な回答を含む 4 文（全回答の 1.4%）を除外した。結果を【表 6】に示す。

【表 6】調査 2（三人称主語）の結果

	時間節条件	理由節条件
（悲し）い／かった	41 (28.3%)	60 (41.7%)
（悲し）んでいる／た	100 (68.9%)	77 (53.5%)
その他	4 (2.8%)	7 (4.8%)
合計	145 (100%)	144 (100%)

三人称主語文を用いた調査 2 では，時間節条件で形容詞の使用が 41 文で全回答の 28.3%，動詞テイル形の使用が 100 文で全回答の 68.9%であった。理由節条件では，形容詞の使用が 60 文で全回答の 41.7%，動詞テイル形の使用が 77 文で全回答の 53.5%であった。

この結果を基にカイ自乗検定を行ったところ，時間節条件で有意に動詞テイル形の使用が多いことが認められた（$X^2(1)=24.0$，$p<.01$）。理由節条件では，形容詞と動詞の使用に有意差はなかった（$X^2(1)=2.2$，ns）。

3.4.4. 結果の考察

3.4.4.1. 調査 1 の考察

調査 1 の結果から，3.3 節で述べた仮説のとおり，〈動き〉としての捉え方が要求される時間節では心理動詞テイル形が選好されることが確認された。このことから，心理形容詞は心理を〈状態〉として捉え，心理動詞は〈動き〉として捉えるというアスペクトの相違を要因として使い分けが生じることが実証されたと言える。また，理由節では，明らかな選好差とまでは言えないものの，やや形容詞の使用が多かった。このことにより，〈動き〉としての捉え方が要求されない限りは，先行研究が指摘しているように，一人称主語の心理は形容詞で表されやすいことが確かめられた。

3.4.4.2. 調査 2 の考察

三人称主語文を使った調査 2 でも，一人称主語文を使った調査 1 と同じ選好傾向が見られた。つまり，三人称主語文においても，〈動き〉としての捉え方が求められる文脈で心理動詞テイル形の選好度が高まることが確認された。なお，調査 1 では理由節で形容詞に有意傾向が見られたが，調査 2 では差が認められなかった。理由節で述語形式の選好度に差が認められなかったことは，理由節では事態の捉え方が任意であったことを示していると考えられる。また，主節の述語の場合，三人称の心理は動詞テイル形で表されやすいが，従属節内の述語では動詞テイル形が優先されることはなかった。このことから，従属節内の述語の場合，報告性というモダリティ的意味よりも，アスペクトの相違が主要な使い分け要因となると言える。

以上の調査によって，事態の捉え方の違いを要因として心理形容詞と心理動詞テイル形の使い分けが生じることが実証されたと言える。3.3 節では，語彙的アスペクトの相違を要因として，心理形容詞と心理動詞テイル形に含意的意味の相違が存在すると考察した。本節では，その考察が母語話者の述語選択の傾

向によって裏付けられることを示した。最後に，本章の考察を総合して，事態の捉え方が述語の品詞の使い分けに影響を与えるという一般原則が導かれることを述べておきたい。

3.5. 話者による事態の捉え方と述語の使い分け

前節で報告した調査結果は，心理を〈動き〉として捉える時間節で心理動詞テイル形が選好され，それによって心理形容詞との使い分けが生じるというものだった。〈動き〉としての捉え方が要求されない理由節では，心理形容詞と心理動詞テイル形に顕著な選好差が見られなかった。これは，この両形式が論理的意味の上で等価であることを示していると考えられる。心理動詞テイル形と心理形容詞の相違は，心理を時間によって変化する〈動き〉として捉えるか，変化しない〈状態〉として捉えるかという事態の捉え方に帰結する。その捉え方の相違はまず，心理動詞と心理形容詞の語彙的アスペクトの相違として言語に反映されると言える。次に，心理動詞がテイル形をとる場合，一見，心理形容詞が表す〈状態〉との区別が解消するように見えるが，全く意味的に等価であるわけではない。心理動詞テイル形は心理をいったん〈動き〉として捉えた上で，その継続の局面を切り出すものであるが，心理形容詞はそもそも時間展開を含まない〈状態〉を表すという違いがある。そのため，心理動詞テイル形が用いられるとき，表される事態が時間によって変化するものであることが含意される。そのような含意が，同時性を表す時間節に合致するため，心理動詞テイル形が選好され，心理形容詞との使い分けが生じる。以上を総合すると，論理的意味において等価である心理形容詞と心理動詞テイル形の間には，語彙的アスペクトの相違によってもたらされる含意的意味のレベルで相違があると結論付けられる。

本章で述べた，事態を〈状態〉として捉えるか，〈動き〉として捉えるかの相違が品詞の選択に反映されているという観察は，広く一般の言語現象に認められるものである。たとえば，(88)のような動詞と名詞の関係は，〈動き〉と〈状態〉に対応していると考えられる。影山(1993)では，状態変化や位置変化を表す動詞が名詞化すると，状態や性質を意味することが多いと指摘されている。

(88) a. 肩がこる／肩こり
b. 肌が荒れる／肌荒れ
c. 外国から帰る／外国帰り
d. 時計が回る／時計回り （影山 1993:188）

これらの述語は，同じ出来事に関連する意味を表しているが，動詞は時間に沿って展開する動的事態を捉えて言語化しており，名詞は対象の状態という静的事態を捉えて言語化している。つまり，話者の事態の捉え方が動詞と名詞という述語の品詞の区別に反映されている。

また，同様の現象が「動作性名詞＋スル」という形式を持つ動詞述語と「動作性名詞＋ダ」という形式を持つ名詞述語の対応関係にも見られる。「動作性名詞＋スル」に対応して，「動作性名詞＋ダ」という述語が存在する場合と存在しない場合がある。そして，そのことと事態が〈動き〉としても〈状態〉としても捉えられる二面性を持っていることが連動していると考えられる。たとえば，(89a)で，「完成している」は開始や終了を含んだ出来事の一部である継続局面を表しているが，「完成だ」は「完成状態」という一様な状態を表している。このように，出来事の一局面としても状態としても捉えられる場合に，動詞テイル形とともに名詞述語が用いられる。一方，(89b)が表す事態は，常に動的時間展開の一部として捉えられるため，「準備している」という動詞述語で表されるのみで，「準備だ」のように名詞述語化されることはない。

(89) a. この作品は，{完成している／完成だ}。
b. この計画は，{準備している／*準備だ}。

以上のように，ある事態を捉えて言語化する際，その事態が動的事態としても静的事態としても捉えられる場合，それを言語化する語の品詞も二通り存在すると言える。心理述語に対応する形容詞と動詞のペアが数多く存在するのは，心理という事態が外面的な動作や状態変化を伴うものではないため，動的時間展開の捉え方が任意であることを反映しているのではないかと考えられる。す

なわち，心理という事態は，〈状態〉としても〈動き〉としても捉えられる可能性があるために，同じ心理を叙述する形容詞述語と動詞述語が存在するのだと考えられる。

さらに，先行研究で指摘されている心理述語の主語の人称による使い分けも，事態把握の観点から次のように捉え直せると考えられる。すなわち，他者の心理は直接内面にある状態を見ることができないため，外面に現れる表情や言動が心理として捉えられる。表情や言動は時間が経てば消失するものであるため，時間展開を含む〈動き〉として捉えられ，動詞によって表現されやすい。一方，話者自身の心理は，時間によって展開するものとして意識されない場合は〈状態〉として，時間による展開が意識される場合は〈動き〉として捉えられる。そのため，時間展開の捉え方が任意の場合は，本章で示したように心理形容詞と心理動詞テイル形が交替可能になるのだと考えられる。このようにして人称に応じて述語の選択が連動していると考えられる。このような捉え方は，心理形容詞と心理動詞の使い分けにモダリティによる制限が存在するという先行研究の主張を否定するものではない。むしろ他者の内面にある状態を直接知ることができないというモダリティ要因と，事態の時間展開というアスペクト要因とが相互に影響し合うことによって，心理形容詞と心理動詞の使い分けが決まっていると言うことができるだろう。

3.6. 第 3 章のまとめ

本章は，形態的に対応する心理形容詞と心理動詞テイル形が〈状態〉と〈動き〉というアスペクトの相違を要因として使い分けられることを考察し，母語話者に対する調査によって実証した。本章で述べたことは，次の三点にまとめられる。

① 心理形容詞と心理動詞の違いは，心理を〈状態〉として捉えるか，〈動き〉として捉えるかという事態の捉え方を反映している。

② ①の相違を要因として，心理形容詞と心理動詞テイル形が使い分けられることが本章の調査によって確認された。具体的には，時間節と理由

節の述語選択の傾向を比べることで，心理を〈動き〉として捉えるか否かが，心理動詞テイル形の選好度に影響を与えることを示した。

③　従来モダリティの制限によると考えられていた人称に応じた心理述語の使い分けは，事態を〈状態〉として捉えるか，〈動き〉として捉えるかの相違とも関係し，モダリティ要因とアスペクト要因が相互に関わり合うことで生じている可能性を示唆した。

本章の考察は，次の点で意義を持つと考えられる。第一に，対応する心理形容詞と心理動詞テイル形の使い分けを実証することで，心理動詞の語彙的アスペクトに関する近年の理論的見解を裏付けたことである。すなわち，心理動詞が Vendler 分類の活動動詞に近い語彙的アスペクトを持つことは，三原(2000, 2004)や吉永(2008)で指摘されていたが，本研究によって，それが実際に文の述語選択に反映されていることが明らかとなった。 第二に，従来心理述語に固有の問題だと考えられていた述語選択における制限を，一般述語と連続性を持つ問題として捉え直したことにも意義が認められるだろう。心理という外面的に観察できない事態を捉える場合でも，話し手はそれを言語化するために，時間軸の中に位置付けることが求められる。そのため，時間によって展開する事態としての動的な捉え方と，時間の中で変動しない一様な事態としての静的な捉え方の二通りが生じることとなる。そして，その捉え方の相違が心理述語の品詞の使い分けに反映されていると言える。本章の考察を通して，心理を言語化する際に，〈状態〉を表す形容詞と，〈動き〉を表しつつその継続局面を切り取る動詞テイル形が精緻に使い分けられていることが明らかとなったと言える。

第 4 章

心理動詞が状態を表す文

第 4 章　心理動詞が状態を表す文

第 2 章で，心理動詞のル形が現在の事態を表す場合と未来の事態を表す場合があり，〈動き〉と〈状態〉の両方の性質が認められることを述べた。また，心理動詞のル形が現在の事態として解釈される文は何らかの狭い範囲の心理動詞に限って認められることを指摘した。本章では，心理動詞のル形が現在の事態として解釈される文の成立条件を考察することを通して，心理動詞が〈状態〉に近付く要因を明らかにする。たとえば，「朝の渋滞は，イライラする」や「慣れない仕事は，戸惑う」のような文では，経験者が総称的に解釈され，心理動詞のル形が主題の恒常的属性を述べていると解釈される。この種の文は「朝の渋滞は，腹立たしい」や「慣れない仕事は煩わしい」のような形容詞文が表す〈状態〉に接近している。このような現象を通して，心理動詞と心理形容詞のアスペクト的近接性を明らかにしたい。

本章は以下の流れで議論を進める。まず 4.1 節で，問題となる現象を確認し，その現象に対して三原(2000)が提案する成立条件を検討する。4.2 節では，経験者の解釈やその明示化によって心理動詞のル形の解釈が影響を受けることを述べる。4.3 節では，本来事象を表す動詞が属性化する類似の現象として，英語の中間構文と日本語の受動的可能文の意味特徴を考察する。4.4 節では，中間構文の成立条件として指摘されている主題の責任性という概念を適用することで，心理動詞を述語とする属性文の成立条件を検討する。4.5 節では，4.4 節での考察を基に，具体的な成立条件を提案する。4.6 節では，ここまでの考察を基に，心理動詞による属性文の特徴をまとめ，形容詞によって表される属性との違いを考察する。最後に 4.7 節で，本章の結論を述べ，第 2 章で述べた問題提起に答える。

4.1.　問題となる現象

本章が問題とする心理動詞が状態を表す文とは，(90)のようなものである。

(90) a. 朝の渋滞は，イライラする。
b. 慣れない仕事は，戸惑う。
c. 味付けの濃い料理は，飽きる。
d. 進路の選択は，迷う。

これらの文は，「今から」とか「明日」というような未来において心理的事態が発生するという出来事を表しているのではない。むしろ「誰にとってもイライラするようなものだ」などのように，時間的変化を含まない状態を表していると考えられる[23]。つまり，状態を表現しているという点で，(90)のような文は(91)のような形容詞文に近い性質を持っている。

(91) a. 朝の渋滞は，腹立たしい。
b. 慣れない仕事は，煩わしい。

通常，時間展開を含まない〈状態〉を表す動詞はル形で現在の事態を表し，時間展開を含む〈動き〉を表す動詞はル形で未来の事態を表すことが指摘されている（鈴木 1957，三原 2000）。したがって，(90)のような心理動詞のル形の解釈は，〈状態〉的であると言える。

しかし，(90)に示した心理動詞のル形が常に〈状態〉を表すわけではなく，(92)のような場合には未来における事態の発生を表していると解釈される。

(92) a. 早めに家を出なければ，（明日の朝）渋滞でイライラするだろう。
b. 十分に準備をしておかないと，（明日）出張先で戸惑うぞ。

これは，(90)のような文が益岡(1987，2000，2004，2008)の叙述類型論で言

[23] ただし，後で論じるように，一人称経験者の心理として解釈される可能性もある。その場合に，ル形が現在時を表しているように捉えられるのは，表出のモダリティを帯びるためだと考えられる。本章では，このようなモダリティ的要因以外の要因で心理動詞のル形が状態化する可能性を論じるため，一人称経験者の解釈ではなく総称的解釈を受ける場合を中心に議論を進める。

う「属性叙述」[24]に相当し，(92)のような文が「事象叙述」に相当するという相違によるものだと考えられる。本章では以下，(90)のような文を心理動詞による「属性文」，(92)のような文を「事象文」と呼ぶこととする。

(90)のような文が「属性文」であることは，時間の限定を受けないことからわかる。時間副詞によって特定の時間に限定すると，(90')のように不自然な文になってしまう。

(90') a. 朝の渋滞は，(??今から）イライラする。
b. 味付けの濃い料理は，(??来月）飽きる。
c. 慣れない仕事は，(??明日）戸惑う。
d. 進路の選択は，(??3 月ごろ）迷う。

また，(90)は「朝の渋滞にあえば，常にイライラする感情が起こる」といったように，「～は」で表される対象表示成分と述語である心理動詞で表される属性表示成分との間の依存関係を表している。この点でも，(90)のような文は益岡(2004:4)の「属性叙述」の要件を満たしている。

叙述のタイプによってル形の解釈が二通り認められることは，心理動詞に限らず，一般に〈動き〉を表す動詞に認められる。たとえば，「たばこを吸う」のような動詞にも，(93a)のような属性解釈と(93b)のような未来時制解釈がある。

(93) a. [喫煙者だという意味で] 太郎は，たばこを吸う。
b. [今にもたばこを吸おうとしている現場を見て] 見ろ，禁煙中の太郎が，たばこを吸うぞ。

問題となるのは，全ての心理動詞で(90)のような属性文が成立するわけではない点である[25]。たとえば，(94)に示す心理動詞では不自然な文が形成されてしま

[24]益岡(1987)で「属性叙述」とは，「現実世界に属する具体的・抽象的実在物を対象として取り上げ，それが有する何らかの属性を述べるもの」と定義されている。一方，それと対立する概念である「事象叙述」は「現実世界のある時空間に実現・存在する事象（出来事と静的事態）を叙述するもの」であるとされている。

[25] 後で述べるが，「花束のプレゼントは女性が喜ぶ」のように経験者を伴う属性文は全ての

う。

(94)　a. ??悪質ないたずらは怒る。
　　b. ??花束のプレゼントは喜ぶ。
　　c. ??雷の音は恐れる。

そこで，どのような場合に心理動詞を述語とする属性文が成立するのかが問題となる。これについて三原(2000)は(95)のような特徴を持つ心理動詞で属性文が成立すると述べている。

(95) 自動詞で，対応する形容詞・名詞述語が欠如している心理動詞
（三原 2000:66）

属性文を形成する心理動詞は多くの場合これに当てはまるが，次のように当てはまらない例も見られる。すなわち，ヲ格補語をとる「ためらう」や直接受身文を形成する「憧れる」は，他動詞の特徴を持つものだが，それぞれ(96)(97)で示すように属性文が成立する。

(96)　新車の購入はためらう。（cf. 新車の購入をためらう）
(97)　セレブ女優のファッションは憧れる。
（cf. セレブ女優のファッションは若い女性に憧れられている）

また，(98)は対応する形容詞・名詞述語が欠如しているが，属性文が成立するとは言えない。反対に，(99)のように対応する形容詞述語を持っているにもかかわらず，属性文を形成するものもある[26]。

(98)　暴力団は｛*怯えだ／??怯える｝。

心理動詞で成立する。ここでは，経験者を伴わない属性文について述べている。
[26] 対応する形容詞・名詞述語を持っているにもかかわらず，動詞のル形が属性文を形成する場合があることは，三原(2000)自身も p.72，注 13 で述べている。

(99)　((2)再掲) 変化のない人生は｛退屈だ／退屈する｝。

したがって，三原(2000)の指摘は，属性文を形成する心理動詞の語彙的特徴を部分的には捉えているものの，属性文の成立を完全に予測できる条件とはなっていないと言える。また，そもそもなぜ他動詞ではなく自動詞の心理動詞で属性文が成立しやすいのかについて，踏み込んだ議論は行われていない。さらに三原(2000)では言及されていないが，動詞の語彙的意味だけでなく，主題となる名詞句の意味も動詞の意味と連動して属性文の成立の可否に深く関わる。

(100) a.　子供からの質問は困る。(cf. 子供からの質問に困る)
　　b. ??子供への返答は困る。(cf. 子供への返答に困る)

(100)を見ると，同じ心理動詞「困る」の補語となる名詞句でも属性文の主題として適切な場合と適切でない場合があることがわかる。このように心理動詞による属性文の主題に課せられる意味制約について，三原(2000)では説明されていない。

以上をまとめると，三原(2000)の成立条件の問題点は以下の三点である。第一に，属性文の成否を正しく予測できる成立条件になっていないこと，第二に，なぜ他動詞の心理動詞では属性文が成立しにくいのか，属性文の成立に関わる意味的要因について明らかにされていないこと，第三に，動詞の語彙的特徴だけでなく，主題名詞句との組合せによって属性文の成否が影響を受けることについて説明されていないことである。そこで本章では，三原(2000)の成立条件を意味の面から検討し直し，心理動詞による属性文の成立にどのような意味制約が，なぜ求められるのかを明らかにしたい。

4.2.　心理動詞のル形の解釈と経験者の非明示化

本節では，心理を経験する主体である経験者が明示されず，総称的に解釈されることが属性文としての解釈の成立に関わっていることを論じる。具体的には次のような場合に，述語となる心理動詞のル形が未来時制として解釈されや

すいことを述べる。すなわち，経験者が明示される場合と，明示されない場合でも文脈中に特定の指示対象を持つ場合に，心理動詞のル形が未来時制としての解釈を受けることを示す。一方で，経験者の一般性・総称性が高まるほど，属性としての解釈に傾くことを示す。

4.2.1　経験者を明示する属性文

これまで論じてきた属性文は全て，経験者が明示されず，「誰にとっても」という総称的存在として解釈されるものであった。しかし，経験者を明示する属性文も存在する。たとえば，(101)のような文は経験者を伴って，「若者が嫌がるようなものだ」という属性を述べている。これらの文も特定の時空間の限定を受けないことから，事象文ではなく，属性文の一種であると考えられる。

(101)　a.　政治の話題は，若者が嫌がる。
　　b.　花束のプレゼントは，女性が喜ぶ。
　　c.　雷の音は，子供が恐れる。

しかし，経験者を伴わない属性文とは異なる点もある。それは，経験者を伴わない文より経験者を伴う文はより事象としての解釈を残していると考えられる点である。それは次の二つのことから示される。第一に，動作の様態を表す「目を輝かせて」などの副詞句と共起することである。経験者を伴う属性文には(102)のように共起するが，経験者を伴わない属性文には(103)に示すように共起しない。これは，(102)の文では心理動詞が事象性を残しているのに対して，(103)の文ではより属性化していることを示していると考えられる。

(102)　a.　花束のプレゼントは，女性が（目を輝かせて）喜ぶ。
　　b.　授業への遅刻は，先生が（眉間にしわを寄せて）怒る。
(103)　a.　朝の渋滞は，(??ハンドルを叩いて）イライラする。
　　b.　慣れない仕事は，(??真っ青になって）戸惑う。

第二に，経験者を伴う文は「きっと，おそらく」などの蓋然性の副詞と共起

する。(104)に示すように，経験者を伴わない文は「きっと，おそらく」などの蓋然性の副詞と共起しにくい。これは，これらの蓋然性の副詞が未来における事態の発生の可能性を表しているため，未来時制の意味が失われている属性文では生起できないからである。

(104) a. 朝の渋滞は，(??きっと）イライラする。
b. 慣れない仕事は，(??おそらく）戸惑う。

(101)に示した経験者を伴う属性文も，文脈中に特定の指示対象が存在しない限りは，(105)のように蓋然性の副詞と結び付けにくい。しかし，経験者が「女性，子供」のような種（kind）を表す名詞ではなく，個体を表す名詞であれば，(106)のようにこれらの副詞と共起しやすい。

(105) a. 花束のプレゼントは，女性が（?きっと）喜ぶ。
b. 雷の音は，子供が（?おそらく）恐れる。
(106) a. こんな下手なプレゼンは，社長が（きっと）イライラする。
b. こんな複雑な仕事は，パートの山田さんが（おそらく）戸惑う。

以上のことから，経験者が明示される属性文よりも明示されない属性文のほうが，また経験者が明示される場合も不特定性が保たれるほうが，事象的解釈が強くなると考えられる。つまり，心理動詞は本来ル形で未来における心理的事態の発生を表すものであるが，経験者の一般性・総称性が属性解釈への移行を促し，未来における事態の発生という解釈がそれにともなって弱まっていくということである。また，経験者を伴う属性文が多くの心理動詞において見られるのに対して，最も属性化が進んだ属性文は，限られた心理動詞によってのみ成立するものである。(101)に示した「嫌がる，喜ぶ，恐れる」などの心理動詞は，経験者を伴う属性文は形成するが，経験者を伴わない場合は不自然な文になってしまう。よって，経験者が明示されない属性文は，心理動詞の語彙的意味に何らかの条件を課すものだと考えられる。そこで，本章では，経験者が明示されない属性文について，その成立がどのような心理動詞の意味によって

条件付けられているかを考察する。

4.2.2　明示されない経験者の解釈

経験者が明示されない場合に常に属性解釈が成り立つわけではなく，経験者が文脈によって特定できる場合は属性解釈が成り立たない。たとえば，(107)のように特定の経験者が文脈によって指定されている場合には，述語である「イライラする」が主題「下手なプレゼン」の属性を述べているという解釈は成立しない。「きっと」という蓋然性の副詞と共起できることからも事象を表していると考えられる。

(107) 社長は短気だから，こんな下手なプレゼンは，（きっと）イライラする。

また，明示されない経験者が話し手自身として解釈される場合も多い。堀川(1992)，山岡(1998，2000)ではむしろ一人称経験者に限られることが，この種の心理動詞の特性であると看做している。すなわち，「イライラする，困る，疲れる」などの心理動詞は，ル形で用いられる場合，一人称経験者がしばしば省略される。これらの動詞は，経験者を伴わない「属性文」を形成する動詞であるが，堀川(1992)，山岡(1998，2000)ではむしろ主観的性質を持っていることに注目している。これらの動詞で経験者が省略されやすいのは，ル形で常に一人称経験者を主語にとるため，自明のこととして省略できるためだと説明されている（堀川 1992：190)。このような心理動詞は，堀川(1992)では「形容詞的用法」を持つ心理動詞，山岡(1998，2000)では「感情表出動詞」と呼ばれている。(108)は堀川(1992)が指摘する「形容詞的用法」の例である。また，山岡(1998)は(109a)と(109b)の対比によって感情表出文を形成する動詞と形成しない動詞の区別があることを指摘している。

(108)　a.　彼のわがままは，本当に困ります。
　　b.　初級クラスの授業は，疲れます。　　（堀川 1992:191）

(109)　a.　ああ，腹が立つ。

b. *ああ，怒る。　（山岡 1998:1-2）

確かに，(108)や(109a)のような文でも心理動詞のル形が未来時制を表しているとは解釈されず，現在の心理状態を表しているように思われる。これは，主観性を持つ心理動詞がル形で表出のモダリティを帯びるためだと考えられる。したがって，心理動詞のル形の状態化に心理動詞の主観性が関わっていることは否定できない。

しかし，心理動詞のル形が現在の事態として解釈される現象は，主観性を持つ心理動詞においてのみ成立するわけではない。本研究で言う「属性文」を形成する心理動詞の中には，特に主観的であるとは認められないものもある。たとえば「戸惑う」と「飽きる」を述語とする属性文に，(110)のように一人称経験者を加えると，未来における自分の心理変化を予告しているような文になり，不自然に感じられる[27]。また，これらの動詞は(111)のように，発話時の即時的感情を表す「感情表出」にも馴染みにくい。

(110)　a.　?慣れない仕事は，私は戸惑う。（cf.　慣れない仕事は，戸惑う）
　　b.　?味付けの濃い料理は，私は飽きる。（cf.　味付けの濃い料理は，飽きる）

(111)　a.　?ああ，戸惑う。
　　b.　?ああ，飽きる。

一方，主題を伴い，「誰にとっても｛戸惑う／飽きる｝ようなものだ」という属性的な解釈を受ける場合は，自然な文として受け入れられる。

(112)　a.　（(90b)再掲）慣れない仕事は戸惑う。
　　b.　（(90c)再掲）味付けの濃い料理は飽きる。

すなわち，「戸惑う」や「飽きる」のように感情表出を表さない動詞が，常に

[27] 未来における心理的事態の生起は，話し手が発話時において把握しにくいために，心理動詞はル形が未来を表しにくいと仁田(2010:20)で述べられている。

未来時制の解釈を受けるわけではなく，属性文を形成する場合は現在時として解釈されるということである。このことから，心理動詞のル形が現在の事態を表していると解釈される現象には確かに心理動詞の主観性が関わっているが，それだけが要因ではないと考えられる。

また，「イライラする，困る，疲れる」のように主観的とされる心理動詞がル形で用いられる場合も，常に一人称経験者の心理として解釈されるわけではない。文脈によって経験者が「一般に誰でも」という総称的な存在として解釈されることもある[28]。(113a)では，一人称経験者が発話時点でイライラしていることを意味するが，(113b)は，「渋滞というものは，一般に誰でもイライラするものだ」という意味に解釈される。

(113) a.　また渋滞だ。ああ，渋滞はイライラする。
　　b.　渋滞はイライラする。だから，事故が起きやすい。

一人称経験者に限定的な解釈の場合，蓋然性の副詞や様態の副詞との共起が可能となる。このことは，一人称経験者の心理に限定される場合は心理動詞の意味が事象的になっていることを示していると考えられる。

(114)　1 時間以上の渋滞は，（私なら）きっとハンドルを叩いてイライラする。

したがって本章では，心理動詞が主観性を持つこと以外の要因でル形が状態化する要因を探るため，明示されない経験者が総称的に解釈される文について成立条件を考察することとする。本章の主張は，心理動詞の主観性によって，ル形が状態化することがあることを否定するわけではない。しかし，本章の考察によって，主観的性質を持つ心理動詞以外の動詞にも属性文を形成することで状態化する可能性があることが示されると言える。

[28] ここで言う「一般に誰でも」とは，あくまで話者によって想定される対象の範囲内で誰にでも成立するという意味であり，現実世界における全ての人にとって成立することを意味するものではない。たとえば，「渋滞はイライラする」と言うとき，話者が自分自身を含めて想定される全ての人は「誰でもイライラする」と述べていると考えられる。

4.3. 事象が属性化する現象

心理動詞による属性文は，本来事象を表す動詞が主題の属性を叙述するという点と，主体が総称的に解釈されるという点で，次のような構文と類似していると言える。すなわち，英語の「中間構文」と呼ばれる(115)のような文と，「受動的可能文（寺村 1982：259）」と呼ばれる(116)のような文である。

(115) a. German cars handle easily. (Fellbaum1986:1)
b. Bureaucrats bribe easily. (Keyser&Roeper 1984:381)
c. The wall paints easily. (Keyser&Roeper 1984:383)
d. This dress launders nicely. (Fagan1992:150)

(116) a. この水は飲める。
b. この茸は食べられる。 （寺村 1982:259 文末改変）

「中間構文(middle construction)」とは，本来は事象を表す他動詞がそのままの形で，意味上の対象を主題としてその属性を表す文である。中間構文における動作主は表面上に現れないが，解釈上は「一般に誰でも」という潜在的動作主が含意されていると言われている(Fellbaum1986:4-5，Fagan1992:154-155)。たとえば，(117a)の中間構文は(117b)とほぼ同じ意味を表すと指摘されている。

(117) a. This book reads easily.
b. People, in general, can read this book easily.
(Fagan1992:155)

また，「受動的可能文(passive potential)」とは，寺村(1982:259)で次のように定義されているものである。すなわち，動作の対象を主題とし，動詞の可能形を述語とする文で，「一般に人間にとってこの水は飲める」などのように「一般的な可能状態」を表す表現である。この種の可能文は，中右(1991)，松瀬・今泉(2001)で，主題となる対象の属性規定に近付いていると指摘されており，中間構

文に近い構文であると言われている[29]。

心理動詞による属性文は，他動的行為を表さない点では異なるものの，上記の二つの構文と共通する特徴が認められる。中間構文，受動的可能文，心理動詞による属性文という三つの構文には，①明示化されない主体が総称的に解釈される，②動詞が表す事象の成立可能性が主題の属性として解釈されるという二つの共通した意味特徴が認められる。

4.4. 事象の属性化に関わる要因

事象叙述と属性叙述の対応関係を持つ三つの構文に，同じ意味特徴が認められることは，これらの意味特徴が事象の属性化に関わる成立条件を反映しているためだと考えられる。本節では，その成立条件が中間構文の意味制約である「責任性(responsibility)」の概念によって捉えられることを述べる。

「責任性」とは，Van Oosten (1986:85)で「述語が表す行為の成立が主題の属性に依存している」ことを表す概念とされているものである。中間構文の主題はこの「責任性」を持つ要素でなければならないという。たとえば(118)で述語動詞が sell か buy かによって，主題である this book が，述語が表す事象の成立に「責任性」を持つか否かが異なると言われている(Van Oosten 1986:99-100, 松瀬・今泉 2001:194)。

(118) a. This book sells well.
b. *This book buys well. (Fagan1992:76)

売られる商品である this book の属性，たとえば人気がある本だといった属性は，sell という行為の成立を左右する要因となる。このような場合，主題となる名詞句は述語が表す事象の成立可能性を決める責任性を持つとされる。一方，buy では買われる商品の属性ではなく買う人，すなわち動作主の属性に大きく

[29] 中間構文に近い日本語の表現として，この受動的可能文以外に影山(1998:80)では，「銅板は簡単に曲がる」「木綿のシャツはすぐに乾く」のような自動詞文を挙げている。本研究では事象叙述を基本として，派生的に属性叙述を表す点で，受動的可能文と心理動詞による属性文との類似性に注目している。

左右される。たとえば，お金を持っている，買う気があるといった動作主の属性が買う行為の実行可能性を決定付けると言えるだろう。そのため，述語が buy の場合は主題が責任性の条件を満たさず，中間構文が成立しない。

また，中間構文において対象が責任性を持つということは，行為の実行可能性が動作主の属性に依存しないということでもある。Fellbaum(1986)は(119)のような例を挙げてそれを説明している。

(119) a. This piano plays easily.
b. *This sonata plays easily. (Fellbaum1986:13)

すなわち，Fellbaum(1986:13)によると，(119a)は動作主がピアノの弾き方を知らないでやみくもに鍵盤を叩いただけでも，「ピアノを楽に弾く」という行為が実行されることを表しているという。行為の実行は，ピアノが良く調律されているといったピアノの属性に依存していると捉えられる。一方，単にピアノを弾くのではなく，「ソナタ」のように，ある特定の曲が楽に弾けるという場合は，弾く人の技能に関係なく弾けるという解釈が成立しにくい。それは，やみくもに鍵盤を叩くだけでは曲を弾いたことにならないため，ある程度動作主の技能に依存するためだと考えられる。そのため，(119b)のような中間構文は成立しない。

このように事象の成立が動作主の属性に依存せず，主題となる名詞の属性に依存するという条件は，本来事象を表す動詞が主題の属性として解釈される要因となっていると考えられる。すなわち，事象の属性化という点で共通性を持つ構文である受動的可能文や心理動詞による属性文にもこの責任性の原理が働いていると考えられる。

(120a)と(120b)の可能文の解釈の違いを比較されたい。(120a)は人が能力を持っていることを表す可能文で，(120b)は受動的可能文である。

(120) a. [彼に]中国語が話せる。
b. [人間に]この水が飲める。 （寺村 1982:258-259）

(120a)では, 事象の成立が動作主の能力に依存していることを表す文であるため，動作主の属性が責任性を持つと言える。それに対して，(120b)では動作主の属性に関係なく，主題である「この水」の属性によって事象の成立が可能となることを述べている[30]。したがって，(120b)は主題に，事象の成立を左右する責任性があると認められる。つまり，事象の成立において動作主の属性が問題とならず，事象の成立が対象の属性に依存しているという認識が，受動的可能文としての解釈を支えているということである。このことから，ある可能文が受動的可能文となる一つの条件として，主題の責任性が求められると言える。

また，心理動詞による属性文にとっても，主題が事象の成立に責任性を持つという条件は必要条件となっていると考えられる。心理動詞のル形が主題の属性として解釈される場合，経験者は「一般に誰にとっても」という総称的存在である必要があると 4.2 節で既に述べた。すなわち，心理動詞による属性文は，総称主語をとる(121)のような文に近い意味を持つと言える。

(121) a. 誰でも朝の渋滞でイライラする。(≒朝の渋滞はイライラする)
b. 誰でも慣れない仕事で戸惑う。(≒慣れない仕事は戸惑う)
c. 誰でも進路の選択に迷う。(≒進路の選択は迷う)

もし，経験者の属性によって事象の成立が左右されるなら，必ず経験者が明示されるはずである。たとえば,「イライラしやすい人だから朝の渋滞でイライラする」と話し手が認識しているなら,「朝の渋滞はイライラする」と経験者を明示せずに表現することはないだろう。また，話し手自身が自分の性格などが要因となって心理が生じると認識している場合は,「(私は) 朝の渋滞はイライラする」と述べても，主題の属性を述べていることにはならない。

以上のことは，本来心理動詞が表す事象（以下,「心理事象」と呼ぶ）の成立可能性が主題の属性として解釈されるために，責任性が要件となることを示し

[30] ここで単に動作主が不特定であることが成立条件となるのではないことに注意されたい。たとえば「[人間に] 言語が話せる」という場合には，受動的可能文の解釈にはならない。それは，言語を話すという事象の成立が人間の属性に依存するからである。したがって，単に動作主が不特定であるという意味で問題にならないのではなく，動作主の属性に事象の成立が依存しないという意味で，動作主の属性が問題とならないことが成立条件となる。

ている。ところが，心理動詞による属性文の成立にとって責任性は必要条件であっても，十分条件ではないと考えられる。それは，次のことから示される。すなわち，(122a)(123a)はどちらも経験者の属性に関わりなく成立する心理事象を表していると考えられる。しかし，これらの総称文に対応する(122b)(123b)は属性文として容認されない。

(122) a. 誰でも悪質ないたずらには怒る。
b. ??悪質ないたずらは怒る。
(123) a. 誰でも褒め言葉には喜ぶ。
b. ??褒め言葉は喜ぶ。

よって，心理動詞による属性文の成立には，責任性に加えて独自の制約が課せられているのではないかと考えられる。属性文が成立する心理動詞を観察すると，経験者が主体的に関与せず，原因によって不可避的に引き起こされるようなタイプの事象を表すものが多い。たとえば，「困る」や「疲れる」は経験者がコントロールできない心理事象である。しかし，(122)の「怒る」や，(123)の「喜ぶ」はそうではなく，経験者がコントロールできる心的態度であると考えられる[31]。すなわち，心理動詞による属性文では，経験者が心理事象の成立をコントロールできないことが重要な要件になるのではないかと考えられる。

しかし，一方で中間構文や受動的可能文では，動作主が意志的に事象の成立に参与し，そのことが主題の責任性を妨げない。この違いは，基盤とする事象のタイプの違いによると考えられる。中間構文や受動的可能文に使用される述語は本来他動的事象を表すものであるため，それらが表す事象の成立には，動作主の働きかけもその一端を担っている。これらの構文で主題が責任性を持つとは，主題の属性が事象の成立を「促す」という意味にほかならない。一方，心理動詞が表現する事象には動作主の働きかけは含まれない。むしろ心理動詞

[31] ここで述べている心理動詞の意味の違いは，寺村(1982:140-144)で，日本語の感情表現に「受動的感情」の表現と「能動的感情」の表現の区別があると指摘されていることと重なる。他にも，森山(1988:222)で，感情を表す動詞の中にある程度人間がコントロールできる動きを表すものがあることが言及されており，心理動詞の中に，心理事象への経験者の関与度のレベルの差があることが認められている。

を述語とする属性文の主題は，心理事象を「引き起こす」ものである。そのため心理動詞による属性文では，責任性よりも強い制約として，経験者が事象の成立をコントロールできず，主題の属性によって不可避的に心理事象が引き起こされることが条件となると考えられる。本章ではこれを，経験者の「被動性」の条件と呼ぶことにしたい。

三原(2000)では，心理動詞による属性文が自動詞の心理動詞によってのみ成立すると指摘されていた。しかし，ここで述べたことと心理動詞の自他の区別は，関連性を持つが全く一致するわけではない。経験者が事象の成立に主体的に関与する度合いは，動詞の語彙的性質のみによって決まるのではなく，補語となる名詞句との組合せに影響を受けるからである。たとえば同じ心理動詞「ためらう」を述語とする場合でも，(124a)と(124b)では属性文としての容認度に差がある。

(124)　a.　高額な買い物はためらう。
　　b. ??車の購入はためらう。

(124a)と(124b)の主題となる名詞句が述語の補語位置で受ける格を考えると，その違いがわかる。(124)の二つの文の主題となる名詞句は，どちらも心理動詞のヲ格補語であるが，(124a)の主題名詞句は(124'a)に示すようにデ格で置き換えられる。一方，(124b)では(124'b)に示すようにデ格で表示できない。

(124')　a.　高額な買い物｛で／を｝ためらう。
　　b.　車の購入｛??で／を｝ためらう。

これは，補語の意味役割が異なることを示していると考えられる。坂東・松村(2001:83)は，心理動詞の補語がデ格で表示できる場合には原因補語，デ格で表示できない場合は対象補語であると判断できると述べている。(124)と(124')で示したように，デ格で表示される原因補語のみが属性文の主題となり得ることから，主題が心理動詞の原因補語であることが属性文の成立要件となると考えられる。これを主題の「原因性」の条件と呼ぶことにする。

以上の 2 つの条件を満たした上で，4.2.2 で述べたように事象の成立が一人称経験者に限定されないという文脈的制約が課せられると考えられる。すなわち，話者が個人の心理経験として述べているのではなく，その心理の成立可能性を主題の属性として述べる文脈においてのみ属性文が成立する。通常，心理動詞のル形は未来における事態の発生を表すものであるが，心理事象が恒常的であると認識されている場合に，属性解釈に移行する。すなわち，主題の属性がそのような心理事象を引き起こすようなものであるという解釈が成立する。このような話者によって事象が恒常的なものとして認識されているという条件を事象の「恒常性」の条件と呼ぼう。

ここまでの議論をまとめると，心理動詞による属性文の成立条件を次のように仮定することができる。まず，最も優先される条件は，心理動詞が表す心理事象の成立に経験者が主体的に関与せず，被動的に受け入れるのみであること（成立条件①：経験者の被動性）である。次に，属性文の主題は心理動詞の原因補語でなければならないという条件（成立条件②：主題の原因性）が加わる。さらに，属性文としての解釈を保証する文脈的制約として，話し手が心理事象の成立を恒常的なものとして認識していること（成立条件③：事象の恒常性）が求められる。これらの 3 つの条件は，次のように階層性を成している。すなわち，成立条件①は動詞の意味を中心とした動詞句の意味のレベルで決まるもので，成立条件②は主題と述語を関係づける文のレベルで適用される。そして，これら二つの条件を満たした上で最後に，文が述べる心理事象と現実世界の知識とを結び付ける談話のレベルに，成立条件③が適用される。

以上で，中間構文や受動的可能文に課せられる意味制約から事象の属性化を引き起こす要因を探り，それを心理動詞による属性文に当てはめることで，成立条件を考察した。次節では，それぞれの成立条件が属性文の成立を正しく予測できるかどうかを確かめ，仮説の妥当性を検討する。

4.5. 心理動詞による属性文の成立条件

本節では，4.4 節の考察によって導かれた成立条件が，具体的な言語テストによって確かめられることを述べる。それによって，本研究が提案する条件が，

心理動詞による属性文の成立可能性を正しく予測できるものであることを論証するとともに，当該の構文の意味特性を明らかにする。

4.5.1　成立条件①：経験者の被動性

まず，心理動詞が表す意味タイプに制限があることを確かめる。すなわち，心理動詞による属性文が成立する動詞は，経験者のコントロールが及ばないタイプの心理事象を表す動詞に限られるということである。通常，心理事象は意志的に引き起すことができるものではない。それは，森山(1988)が指摘するように，心理動詞が意志性の表現を形成することができないことからも示される。(125)や(126)はそれを示す例である。

(125) a.　*惜しんでみた。
　　 b.　*悲しんでみた。
(126) a.　*わざと惜しんだ。
　　 b.　*わざと悲しんだ。　（森山 1988:221-222）

したがって，経験者が心理事象をコントロールできるという場合も，経験者が自ら心理を引き起こすという積極的な意味においてではない。原因によって引き起こされる心理を経験者が避けることができるという消極的な関与でしかないだろう。すなわち，心理状態の生起を防止するという点で経験者が事象の成立に参与する可能性があり，防止することさえできない場合には，経験者はまったく被動的であることになる。

心理動詞が表す意味に，経験者の関与度において違いがあるということは，森山(1988:222)で既に指摘されている。すなわち，経験者が心理状態の生起を避けることができるか，避けることができず，被動的に受け入れるのみであるかという違いを次のような否定の命令文の可否によって測ることができると指摘されている。人の感情・感覚を表す心理動詞は意志性を持たないため，多くの場合命令文を形成することはできないが，禁止の意味を表す否定の命令文を形成する可能性はある。たとえば，心理動詞「惜しむ」は「*惜しめ，*惜しみなさい」のように積極的に命令することはできないが，(127)のように否定の命令

文を形成することができると指摘されている。

(127)　そんなことをいちいち惜しんではいけない。

（森山 1988:222）

これは，「惜しむ」が表す心理事象は，経験者が避けようとすれば避けることができることを示していると考えられる。一方，経験者が心理状態の生起を防止することができない場合には，否定命令文を形成することができない。たとえば，(127)の文を(128)のように「困る」に置き換えてみると，不自然に感じられる。

(128) ??そんなことでいちいち困ってはいけない。

このことから，否定命令文を形成できるかどうかを見ることで，経験者が心理事象に関与する可能性があるかどうかを判断することができ，経験者の被動性を確かめることができると考えられる。そこで，「～するな」という否定命令文の成立可能性と属性文の成立の可否の関係を調べてみる。すると，次のように両者に関連性が見られる。まず，(129)に挙げる心理動詞は否定命令文を形成しにくいため，このような心理動詞が表す心理事象においては，経験者が心理状態の生起を防止する余地がないと考えられる。この種の心理動詞では属性文が成立する。

(129)　a. ??急な変更に困るな。（急な変更は困る）
　　b. ??慣れない仕事で戸惑うな。（慣れない仕事は戸惑う）
　　c. ??味付けの濃い料理に飽きるな。（味付けの濃い料理は飽きる）

一方，(130)の心理動詞では否定命令文を形成しやすいため，経験者が心理状態の生起を主体的に防止し得ると考えられる。これらの心理動詞では属性文が成立しにくい。

(130) a.　子供のいたずらで怒るな。(??子供のいたずらは怒る)
b.　雷の音を恐れるな。(??雷の音は恐れる)
c.　花束のプレゼントを喜ぶな。(??花束のプレゼントは喜ぶ)

このように否定命令文を形成できる心理動詞では属性文が成立せず，否定命令文を形成しにくい心理動詞で属性文が成立するという対応関係が認められる。これにより，経験者が主体的に心理事象を防止できないこと，すなわち経験者が被動的であることが確かに心理動詞の属性文の成立条件となることが確認される。

しかし，否定命令文のテストは，属性文が成立する可能性を予測するにはやや強すぎる条件であると考えられる。それは基本的には経験者がコントロールする余地がある心理事象であっても，重大な原因によって経験者が被動的になる場合には，属性文が成立する場合があるからである。たとえば(131)に挙げる心理動詞は否定命令文を形成するが，これらの動詞は属性文が成立する。この種の心理動詞には，三原(2000)の条件で他動詞と判断されるものが多い。

(131)　a.　朝の渋滞にイライラするな。(朝の渋滞はイライラする)
b.　重大な決断をためらうな。(重大な決断はためらう)
c.　贅沢な暮しに憧れるな。(贅沢な暮しは憧れる)

これらの動詞は，基本的には経験者が主体的に防止し得る心理事象を表すものであるが，経験者の意に反して心理事象が成立してしまう場合もある。このことは(131)に挙げた心理動詞が，(132)のように「人がどうしても～てしまう」という非意図性の表現を形成できることからも確認できる[32]。

[32] ただし，非意図性の表現が成立するかどうかのみを成立条件とするのは適当でないことに注意されたい。このような非意図性の表現は，基本的に経験者が主体的に関与しない心理動詞の場合には形成されにくい。たとえば「落ち着く」は，経験者が主体的に関与しない心理を表す動詞で，「この喫茶店は落ち着く」のような属性文を形成するが，「?この喫茶店はどうしても落ち着いてしまう」のような表現は容認されにくい。しかしこの場合，「??（この喫茶店で）落ち着くな」のような否定命令文は成立しないので，両条件を組み合わせて判断すれば，属性文が成立することが正しく予測される。

(132) a.　朝の渋滞は，人がどうしてもイライラしてしまう。
b.　重大な決断は，人がどうしてもためらってしまう。
c.　贅沢な暮しは，人がどうしても憧れてしまう。

すなわち，否定命令文を形成できる心理動詞であっても，(132)のように非意図性を表す文を形成できる心理動詞は，属性文を成立させることができる。一方，原因によって経験者が被動的になる可能性がなければ，(133)のように非意図性の表現を形成しにくい。

(133)　a. ?子供のいたずらは，人がどうしても怒ってしまう。
b. ?雷の音は，人がどうしても怯えてしまう。
c. ?花束のプレゼントは，人がどうしても喜んでしまう。

以上のように，否定命令文と非意図性の表現の二つを合わせて判断することで，経験者の被動性の条件を満たす心理動詞を判定できることがわかった。また，経験者が被動的になり得ることを成立条件とすることによって，三原(2000)の成立条件では例外となってしまう「ためらう」「憧れる」などの他動詞の心理動詞を含めて正しく属性文の成立を予測することができる。

4.5.2　成立条件②：主題の原因性

「経験者の被動性」を満たす心理動詞を述語とする場合も，組合される主題名詞句の意味によって属性文としての容認度が影響を受ける。そこで，次に属性文の主題となる名詞句に課せられる条件を検討する。すなわち，属性文の主題となる名詞句が述語である心理動詞の原因補語に限られるという条件である[33]。まず，確かに原因補語となる名詞句のみが属性文の主題となり得るという事

[33] 単に原因ではなく，「原因補語」であることに注意されたい。たとえば「煩悩は人を迷わせる」という使役文が形成できることから「煩悩」は原因となり得るものであるが，「??煩悩は迷う」と言えないように，属性文の主題にはなり得ない。これは，「煩悩」が「??人は煩悩で迷う」と言えないように，心理動詞「迷う」の原因補語になり得ず，むしろ「人は煩悩のせいで人生の選択に迷う」のように修飾要素として現れるものであるからである。すなわち，間接的な原因は，事象の成立を左右するものと看做されにくく，属性文の主題の要件を満たさないため，属性文の主題となり得ないと考えられる。以上のことから，主

実を，補語の格表示と属性文の可否との関連性によって確かめる。その上で，なぜ心理動詞による属性文では，対象ではなく原因が主題に適しているのかを考察する[34]。

心理動詞の補語となる要素には，対象と原因の二つの可能性があると言われている（寺村 1982:141-143，山岡 2000:31，坂東・松村 2001:83）。このうち，属性文の主題となる名詞句は，原因補語に限られると考えられる[35]。そのことは，心理動詞の補語の格表示をデ格に置き換えてみることで確かめることができる。同じ心理動詞を述語とする(134a)(135a)(136a)のニ格補語と(134b)(135b)(136b)のニ格補語を比較されたい。前者はデ格で置き換えられ，主題化すると属性文が成立するのに対し，後者はデ格で置き換えられず，主題化しても属性文が成立しないことがわかる。

(134) a. 進路の問題｛に／で｝悩む。（進路の問題は悩む）
　　 b. 将来｛に／??で｝悩む。（??将来は悩む）
(135) a. 重大な決断｛を／で｝ためらう。（重大な決断はためらう）
　　 b. 契約｛を／??で｝ためらう。（??契約はためらう）
(136) a. 派手な色の服｛に／で｝飽きる。（派手な色の服は飽きる）
　　 b. 何度も着た服｛に／??で｝飽きる。（??何度も着た服は飽きる）

このことは，述語となる心理動詞の意味条件に加えて，確かに主題となる名詞句が心理動詞の原因補語であることが属性文の成立条件となっていることを示していると考えられる。三原(2000)では，主題名詞句が属性文の成立の可否に

題の「原因性」の条件は，心理事象の成立に直接的に関与する要素である「原因補語」が主題となることを要件とすると結論付けられる。

34 経験者を主題とする属性文もあり得るが，ここでは検討の対象に含めていない。たとえば，「花子はすぐ怒る」や「太郎は犬を恐れる」のような文も属性文としての性質を持っていると認められるが，経験者の被動性の条件を満たしていない。この種の属性文は，「太郎はたばこを吸う」が「太郎は喫煙者だ」という属性を表すのと同様で，一般の動作動詞に広く見られる現象であり，心理動詞に固有の意味制約は存在しないと考えられる。

35 「落ち着く」を述語とする場合，「??この喫茶店｛で／によって｝落ち着く」のように原因を表す句で置き換えられない。これは「この喫茶店」という名詞句がコト性を持たないために「～で／～によって」と共起しにくいためだと考えられる。「この喫茶店に行くこと｛で／によって｝，落ち着く」のようにコト性を補えば成立する。

影響を与えることについて言及されていないが，ここで述べた主題の原因性を条件とすることで，それを説明することができると言える。

それでは，心理動詞による属性文の成立に，なぜ主題が原因補語であることが求められるのだろうか。心理動詞による属性文の主題に求められる原因性は，主題が事象の成立を左右する要素であるという点で，中間構文や受動的可能文の主題に求められる「責任性」と共通している。すなわち，主題の属性と述語である心理動詞が表す心理事象の依存関係が保たれるための条件である。しかし，中間構文や受動的可能文の主題が述語動詞の対象補語である点は，心理動詞による属性文との大きな相違点である。これは，中間構文や受動的可能文が基盤とする事象が動作主の働きかけを含むものであるのに対して，心理動詞は働きかけを含まない事象を表すものであるという相違に基づいている。前者のタイプの事象は，あくまで動作主によって引き起こされるもので，主題はそれを促す役割を果たすが，後者のタイプでは，主題が直接に事象を引き起こす役割を果たす。どちらも事象の成立を左右するという点では共通しているが，主題の原因性はより積極的な役割を果たすことを求める制約である。そのため，心理動詞による属性文では，中間構文や受動的可能文よりも強い制約を受けると言える。

4.5.3　成立条件③：事象の恒常性

以上の二つの成立条件を満たした上で，属性文としての解釈を支える文脈的制約が課せられる。ある心理事象が属性として表現される時，その心理事象の成立は，話し手の知識・経験において一般的・恒常的なものとして認識されている。たとえば，渋滞に遭った時たまにイライラすることもあるが，いつもではないという場合，(137)のように言ったとしても「渋滞」の属性を述べたことにならないだろう。あくまで話し手自身の心理経験を述べるものとして解釈されると思われる。

(137)［渋滞の属性として］ ＃渋滞は，たまにイライラする。

つまり，事象の成立が恒常的である場合にのみ，本来事象を表す心理動詞の

ル形が主題の属性として解釈され得ると言える。このことは，(138)に示すように頻度の副詞との共起性から示される。すなわち，「いつも，必ず，常に」といった常時性を表す副詞と共起する場合には，属性解釈が可能だが，低頻度を表す「時々，たまに，まれに」と共起する場合は，一人称経験者の心理に限定される。

(138) a.　高額な買い物は，｛いつも／＃時々｝ためらう。
　　b.　営業の仕事は，｛常に／＃たまに｝疲れる。
　　c.　進路の問題は，｛必ず／＃まれに｝悩む。

何らかの原因によって不可避的に心理事象が引き起こされたとしても，それが恒常的なものとして認識されない以上，属性文として表現されることはない。この背景文脈の制約を「事象の恒常性」と呼ぶ。「事象の恒常性」は，前の二つの条件を満たした上で，文が談話の中で属性文として解釈されるために必要な条件である。4.2.2 で述べたように，文脈によって心理動詞のル形が一人称経験者の心理として解釈される場合と，総称経験者の心理として解釈される場合がある。事象が恒常的なものとして認識されているという文脈条件によって，一人称経験者の心理を離れて総称的解釈が生まれると考えられる。

また，なぜ事象の恒常性が認められれば，心理動詞のル形が状態化するのかについて，次のように考えられる。すなわち，心理動詞のル形は未来の事態を表すが，事象が恒常的に起こる場合に，現在の事態としての解釈に移行し得るということである。それは，心理事象が恒常的に起こる場合，未来における事象の成立を話者が現在時に存在する恒常的属性として捉え直すことができるからである。たとえば,「渋滞でイライラする」という心理事象が恒常的ではなく，一回性の事態として捉えられている場合は，未来における心理の発生を述べる文になる。しかし，事象が恒常的であると認識される場合，原因である「渋滞」がイライラさせるような属性を持っているという認識が生じる。「イライラさせるような属性」は現在時に話者の想定世界に存在するものであるため，心理動詞のル形は現在時において実現されている事態を表していると解釈される。以上のような原理によって，事象の恒常性の条件を満たす場合に，心理動詞のル

形が現在の事態を表しているように解釈され，状態性に近付くのだと考えられる。

4.6. 形容詞が表す状態との違い

前節までの議論から，心理動詞の属性化が次のような要因によってもたらされることが示唆された。すなわち，心理動詞が表す事象と原因との間に依存関係が認められることと，話者が心理事象を恒常的なものとして認識していることが要因となって属性解釈が成立するというものである。そこで本節では，このような成立要因を背景として，心理動詞による属性文が形容詞による属性文とは異なる意味特徴を持つことを論じる。

心理を表す形容詞が主題の恒常的属性として解釈されるためには，やはり形容詞が表す心理と原因との間に依存関係が認められる必要がある。たとえば，「渋滞は腹立たしい」という文が，主題である「渋滞」の恒常的属性として解釈されるのは，主題である「渋滞」が必ず「腹立たしい」心理を引き起こすと認識されている場合に限られる。(139)のように言う場合は，機嫌が悪いという他の要因によって心理が起こる意味になり，「渋滞」という原因に依存して心理が引き起こされることを述べることにならない。そのため，このような場合は，主題の属性ではなく，話者自身の心理を述べていると解釈される。

(139) 今日たまたま機嫌が悪いので，渋滞は，腹立たしい。

したがって，心理形容詞による属性文も心理と原因の依存関係を意味する点では心理動詞による属性文と共通している。形容詞による属性文と動詞による属性文の重要な相違は，動詞による属性文が，恒常的事象を属性として捉え直す話者の認識を含意している点に求められると考えられる。

心理動詞による属性文が含意する話者の認識とは，次のようなことである。すなわち，話者が心理事象を主題の属性として捉え直しているという含意である。本来，心理動詞のル形は未来における心理事象の開始局面という動的時間局面を表すものである。しかし，話者がその心理事象を恒常的なものとして認

識している場合，その動的時間展開が意識されなくなり，むしろ主題となる原因事象の属性という静的状態として捉え直される。つまり，心理動詞による属性文は，動的時間展開を持った〈動き〉を〈状態〉として捉え直して表現したものであると言える。したがって，心理動詞による属性文は，主題の属性を述べると同時に，その主題の属性によって心理事象が恒常的に成立することを述べるものであると言える。一方で，形容詞による属性文は，心理を初めから〈状態〉として捉えており，動詞のように開始局面を含んだ動的事象として捉えているわけではない。したがって，〈動き〉を〈状態〉として捉え直す心理動詞文の場合に生じる含意は形容詞文では生じない。このような含意的意味の相違は，(140a)と(140b)に示す文連鎖によって確かめられる。すなわち，(140a)の動詞による属性文と(140b)の形容詞による属性文に，それぞれ「よくあることだ」という文を後続させる。すると，(140a)では，話者の恒常性の認識が「よくあることだ」という後続文と適合するため，「何がよくある」のかを言わなくても前文の事態を指していることがわかる。一方，(140b)ではそのような含意がないため，何がよくあるのかと尋ねたくなる。

(140) a.　慣れない仕事は，戸惑う。よくあることだよ。
　　b.　慣れない仕事は，煩わしい。#よくあることだよ。

これは，心理動詞が本来，開始点を含む〈動き〉を表すものであり，ル形で未来の事態を表すのを基本とすることに起因すると考えられる。動詞によって表現される以上，話者は事態をいったん〈動き〉として捉えている。その上で，事態が恒常的に起こるという認識によって，未来における事態の発生を現在の時点で存在する〈状態〉として把握し直している。一方で，形容詞はもともと事態を〈状態〉として捉えている。このような違いが含意的意味の違いに反映されていると考えられる。心理動詞が属性文を形成する場合，動的な展開は背景化され，形容詞が表す状態性に接近している。しかし，心理動詞のル形が本来未来における事態の生起という動的な局面を表すものであることは含意のレベルで表されていると言える。

以上の考察から，本章で扱った心理動詞による属性文は，時間的性質におい

て形容詞文に近接していながらも，含意のレベルで相違があると結論付けられる。

4.7. 第 4 章のまとめ

本章では心理動詞を述語とする属性文の成立条件として，以下の三つの条件を提案した。

① 心理事象の成立において経験者が専ら被動的であること
② 主題名詞句が述語となる心理動詞の原因補語であること
③ 心理事象が恒常的に成立すると話し手が認識していること

これらの条件は，三原(2000)で提案された説明と比較して，次の三点で優れていると考えられる。第一に，三原(2000)の説明に比べ，より広い範囲の属性文の成否を正しく予測できる。第二に，属性文の成立に関わる意味的要因が捉えられている。第三に，動詞の語彙的特徴だけでなく，主題名詞句との組み合わせによっても属性文の成否が影響を受けることを説明している。以上の点で，本章の考察は三原(2000)の説明を理論的に発展させたと言える。

また，本章では心理動詞による属性文が，中間構文や受動的可能文と共通性を持つことも明らかにした。特に，主題の属性と事象の成立の依存関係が事象を表す動詞の状態化に関わっていることが本章の議論を通して確かめられた。それと同時に，これらの構文の具体的な成立条件は同じではないことも明らかになった。心理動詞による属性文は，中間構文・受動的可能文に比べて，より主題の属性に依存的な事象を基盤とするため，より強い制約が課せられる。本章の考察によって，心理動詞による属性文の成立条件が明らかにされるとともに，事象叙述と属性叙述が対応関係を持つ諸構文の間の共通点と相違点を捉えることができたと言える。

また，本研究の全体の目的である心理形容詞と心理動詞の相違と近接性の問題に対して，本章は次のことを明らかにした。すなわち，心理動詞が属性文を形成するという現象は，心理事象を恒常的属性として把握し直す話者の捉え方

によって，心理動詞のル形が状態性に近付くことを示している。つまり，心理動詞による属性文は，動的時間展開を含まない〈状態〉を表している点で形容詞文に近接していると言える。しかし，本来心理動詞は動的展開を含む〈動き〉を表すものであり，形容詞は〈状態〉を表すものであるという相違を反映して，含意のレベルで相違があることも明らかとなった。すなわち，心理動詞によって属性を述べる場合は，動的事象を恒常的な〈状態〉として捉え直す話者の認識が含意されるが，形容詞はそもそも〈状態〉として捉えているためその含意が生じないという相違である。心理動詞は本章で述べた条件の下で状態化するが，その場合にも本来の〈動き〉を表す動詞としての性質が意味に影響すると言える。

第 5 章

心理形容詞が変化を表す文

第 5 章　心理形容詞が変化を表す文

第 2 章で，心理的な意味を持つ形容詞が条件文の帰結部分に単独で現れ，変化を表せることを見た。形容詞は本来，時間による変化を含まない〈状態〉を表す品詞であると言われており，通常，変化を表す場合には変化動詞ナルと複合する必要がある。では，なぜ心理形容詞が条件文の帰結部分に現れる場合は，変化を表すことができるのだろうか。本章では，そのような文の成立に，心理形容詞の意味特性が関わっていることを論じる。そして，心理形容詞が表す変化と変化動詞が表す変化にはどのような違いがあるのかを考察する。

5.1.　問題となる現象

形容詞は，時間の流れによって変化したり展開したりすることのない〈状態〉を表す品詞であると指摘されている（影山 2009:9）。たとえば，(141)の形容詞文が表す状態は，それが継続する限り変動することはないし，それがいつ終わるかという明確な終点も想定されていない。

(141)　顔が赤い。

時間の流れの中で新たな状態が生起したり，状態が一時的に成立して，また消失したりすることを表す場合には，動詞を付加して表現する必要がある。(142)の例を参照されたい。(142a)では状態の生起，(142b)では状態の一時的成立を表す際に，形容詞「赤い」に変化動詞「ナル」が複合した形式が用いられている。

(142) a.　お酒を飲み始めて 30 分で，顔が赤くなった。
　　b.　彼女と話をしている間だけ，顔が赤くなっていた。

このように状態の生起，消失という事態の動的展開を表す場合は変化動詞が，動的展開のない状態は形容詞が用いられるという品詞の使い分けがなされてい

ると言える。以下，前者に用いられる述語形式を「形容詞＋ナル」，後者を「形容詞終止形」と呼ぶこととする。

ところが上記の原則に反して，形容詞終止形の非過去形[36]が状態の生起を表すように見える場合がある。それは，次のような条件文の帰結部分において観察される。(143)はインターネットから収集した実例で，原文は形容詞終止形が用いられていたものだが，形容詞＋ナルで置き換えても文の意味に影響しない。

(143) a. 家の中を綺麗にすると｛気持ちがいいです／気持ちがよくなります｝よね。
b. 立ちっぱなしの作業が続くと，｛辛い／辛くなる｝。
c. 自由な意見交換ができなくなったら，｛寂しい／寂しくなる｝ね。
d. 息子から頼られると，｛嬉しい／嬉しくなる｝。

（WEB 実例[37]）

このような場合に，形容詞終止形と形容詞＋ナルが表す意味が近接する要因には二つの可能性が考えられる。一つの可能性は，形容詞終止形が変化を表すことで形容詞＋ナルの意味に近付くことができるというもので，もう一つの可能性は，形容詞＋ナルのほうが形容詞終止形に近付いているというものである。本章では，この二つの可能性を検討することで，(143)のような文に見られる形容詞と動詞の近接性がどのような要因によって生み出されているのかを明らかにしたい。

---

[36] 本章では非過去形に限って議論を進める。それは，本章で言う「変化」が新たな状態の生起を表す場合を問題としているためである。過去形の場合は，形容詞＋ナッタが表す変化の完了と形容詞終止形が表す変化の結果の状態が近接することで両形式が置き換え可能になる場合がある。たとえば「父はいつもお酒を飲むと，顔が赤かった」は，「父はいつもお酒を飲むと，顔が赤くなった」とも言えるため，形容詞終止形と形容詞＋ナルが交替可能に見える。しかし，その場合の「顔が赤かった」は変化を表しているのではなく，変化の結果の状態を表していると考えられる。本章では，非過去形の場合を扱うことで，形容詞が新たな状態の生起を表す点において変化の表現に近付く要因を探りたい。

[37] 出典は，以下の通りである。
(143a) http://www.lscservice.jp/, 2010/4/23
(143b) http://www.interq.or.jp/ski/hasegasj/x-strec.htm, 2010/9/3
(143c) http://news.livedoor.com/article/tb/3960419/, 2010/9/3
(143d) http://blog.goo.ne.jp/mo-e-e/d/20080915, 2010/9/3

第一の可能性を検討する上で重要な手がかかりとなるのは，主節の述語となる形容詞の意味制約が認められるということである。たとえば，(144)のような形容詞の場合には，条件文の帰結部分に終止形で現れ得ない。このような場合，変化動詞ナルとの複合が必須となる。ところが，(144)の主節の形容詞を(144')のように話し手の感覚を表すものに変えると，形容詞終止形の使用が自然に感じられる。すなわち，主観的意味を持つ形容詞では交替が成立することがわかる。

(144) a. お酒を飲むと，顔が｛??赤い／赤くなる｝。
b. 温泉に入ると，肌が｛??綺麗だ／綺麗になる｝。
c. テレビゲームをしたら，目が｛??悪い／悪くなる｝。
(144') a. お酒を飲むと，体が｛熱い／熱くなる｝。
b. 温泉に入ると，肌が｛つるつるだ／つるつるになる｝。
c. テレビゲームをしたら，目が｛痛い／痛くなる｝。

このことから条件文の帰結部分に話し手の感情や感覚などの主観的意味を表す形容詞が用いられる場合，形容詞終止形が変化の意味に近付くのではないかと考えられる。

また第二の可能性は，(145)のように形容詞＋ナルに属性としての解釈が成り立つことから示唆される。すなわち(145)のような表現は，(146)の形容詞文に近く，主題である「花束のプレゼント」の恒常的属性を述べているように思われる。

(145) 花束のプレゼントは，嬉しくなる。
(146) 花束のプレゼントは，嬉しいものだ。

本来変化というものは，特定の時空間に実現する事象だが，それが恒常的に起こるものとして認識されている場合，属性の意味に近付くことがある[38]。(145)

[38] ただし，「嬉しくなくなる」というような心理状態の消失が属性の意味になる例は見受けられない。これは，心理状態の生起は，原因となる事態の特徴付けになるが，消失が特徴

の形容詞＋ナルが属性として解釈されるのは，そのためだと考えられる。(145)と(146)の文の主題である「花束のプレゼント」を条件節で言い換えると，(147)のような文になる。

(147)　花束をもらうと，{嬉しい／嬉しくなる}。

(147)のように条件文の帰結部分に現れる場合も，(145)や(146)のような文の述語の場合と同様の解釈が成り立つのではないだろうか。だとすれば，形容詞＋ナルが属性的に解釈されることで状態化し，形容詞終止形に近付いていると言えるのではないだろうか。

以上の二つの可能性を合わせると，本来〈状態〉を表す形容詞が〈動き〉である変化を表し，本来〈動き〉を表す動詞が〈状態〉である属性を表すという交差が起きていることになる。本章では，このようにアスペクトが交差する可能性を考察することを通して，心理述語のアスペクト的近接性を論じたい。

本章では以下の流れで，論を進める。5.2 節で，(143)のような交替現象の成立に関わる形容詞の意味特性を，先行研究の指摘を踏まえつつ考察する。続く 5.3 節では，条件文の帰結部分で状態と変化が相互に近接する要因を考察し，特に心理的意味を表す形容詞にこの現象が成立しやすい理由を説明する。次に，5.4 節で，交替が起こる条件文では事態の捉え方に二面性があり，それによって条件文の解釈も二通り可能となることを述べる。5.6 節では，条件文の帰結部分で形容詞終止形が表す変化と形容詞＋ナルが表す変化にどのような違いがあるかを考察する。最後に 5.6 節で論をまとめて，心理述語のアスペクト特性と心理的事態の捉え方に関する本章の結論を述べる。

5.2.　形容詞の意味と形容詞＋ナルとの交替

本節では条件文の帰結部分で形容詞終止形と形容詞＋ナルが交替する現象に，形容詞の主観性と時間的限定性という意味特性が関わっていることを論じる。

付けになりにくいためだと考えられる。

当該の交替現象と形容詞の主観性との関わりは,豊田(1983)の次の指摘から示唆される。すなわち，第 2 章で述べたように，豊田(1983)では,「と」条件文の帰結部分に現れ得る形容詞が「現在の気持ち」を表すものに限られることを指摘している。この指摘は本章の考察に示唆を与えるものであるが，具体的に「現在の気持ち」を表すという意味制約がどのような範囲の述語に当てはまるのかは明確ではない。また，形容詞が時間的限定性を持つことと条件文の帰結部分に終止形で現れることは関連性を持つと考えられる。定延(2002，2008)は，条件文の帰結部分に状態表現が現れる現象を「状態表現のデキゴト化」であると主張し，当該の現象が成立する状態述語は時間的限定を受けるものに限られると捉えている。既に述べたように形容詞＋ナルが状態化している可能性も考え得るため，全ての場合にデキゴト化していると捉えるべきかには疑問が生じる。しかし，状態の表現である形容詞がデキゴト化するという定延(2002，2008)の捉え方は，心理形容詞のアスペクト特性を考える上で重要な示唆となる。

そこで，以下ではこの二つの先行研究の指摘を見た上で，当該の現象と心理形容詞の意味特性との関わりを明らかにしたい。

5.2.1. 形容詞の主観性

豊田(1983)によると，接続助詞「と」による条件文で，主節に形容詞が非過去形で用いられる場合，その形容詞は「現在の気持ちを表す」ものに限られるという[39]。豊田(1983)は，(148)と(149)の対比によってそれを示している。すなわち，(148)の「楽しい」「おいしい」は自然な表現として受け入れられるが，(149)の「速い」「重い」では容認度が落ちるという。

(148) a.（(52a)再掲）パーティーは花子さんが来ると，楽しい。
　　b. メロンは冷たくすると，おいしい。
(149) a. ?この自転車はギヤを切り換えると，速い。
　　b. ?この手紙は写真を入れると，重い。

（豊田 1983:12-13）

[39] ただし，前件が状態性述語の場合には主節の述語に意味の制限はないと豊田(1983)は述べている。注 17 を参照されたい。

さらに，(149)のような場合に終助詞の「ね」や「な」を付加すると，容認されやすくなると豊田(1983)で指摘されている。

(149’) a. この自転車はギヤを切り換えると，速い｛ね／な｝。
b. この手紙は写真を入れると，重い｛ね／な｝。
（豊田 1983:13）

これは，終助詞「ね／な」の付加によって，主節の「速い，重い」などの事態を現在感じたこととして表すことになるために容認可能になるためだと，豊田(1983)は説明している。

この豊田(1983)の指摘は, 条件文の帰結部分に形容詞終止形が現れる現象と形容詞の意味の関連性を示す点で示唆的であると言える。しかし,「現在の気持ち」という意味制約が具体的にどのような範囲の述語に当てはまるのか, 豊田(1983)では明確に論じられていない。(149’)のような例を見ると，終助詞「ね／な」を付加すれば，形容詞の意味制約がなくなるかのように見えるが，決してそうではない。(150)のような場合には,「ね／な」を付加してもかなり不自然に感じられる。

(150) a. ??お酒を飲むと，顔が赤い｛ね／な｝。
b. ??毎日テレビゲームをすると，目が悪い｛ね／な｝。

(150)では，終助詞を付加しても現在感じたことを表現することにならないからではないだろうか。だとすれば，やはり形容詞が語彙的に話者の感情・感覚を表す意味を持っていることが重要になるだろう。

また，なぜ「現在の気持ち」を表す形容詞が条件文の帰結部分に終止形で出現可能となるのか, その理由は豊田(1983)では述べられていない。その理由を探る上で，この現象が成立しやすい特定の文脈があることに注目したい。すなわち，条件節の事態の成立の瞬間に注目させる文脈では形容詞終止形の使用が容認されやすくなる。特に，豊田(1983)で終止形の使用が容認されにくいと判断さ

れている形容詞が上のような文脈では容認されやすくなることが観察される。先に挙げた(149)の例を，条件節の事態が成立する瞬間に話者が感じたことを発話するという文脈に置いてみると，形容詞終止形の使用が自然に感じられる。

(151) a. [自転車のギヤを切り換えると同時に述べる場面で]
おおっ，この自転車はギヤを切り換えると，速い！
b. [写真を入れて重さを実感した瞬間に述べる場面で]
あっ，この手紙は写真を入れると，重い！

このような文は，山岡(2000)で「感覚表出文」と呼ばれているものに相当すると考えられる。山岡(2000:86)によると，「表出文」とは「話者の現在の感情状態（情意・感覚・思考など）を直接に言語化する」ものと定義されている。特に，発話時が「瞬間的現在」であることが「表出文」の重要な要件となると指摘されている（中右 1994：44，山岡 2000：183）。つまり(151)では，瞬間的現在時を指し示す文脈があるために，「話者の感覚の表出」という主観的意味が前面に出るのだと考えられる。「速い」や「重い」のような形容詞は，物の属性を表すと同時に話者がそのように認識・知覚したことを表す意味が含まれている（樋口 2001，八亀 2008）。そのため，文脈によって主観的知覚の側面が強く意識されると，表出文を形成する可能性があると考えられる。

また，豊田(1983)は，「～たい」と「欲しい」は「と」条件文の帰結部分に終止形で現れにくいことを指摘しているが，これらの語もやはり表出文にすると容認可能となる。まず，(152)の文を見られたい。(152)では形容詞＋ナルの使用はまったく自然だが，終止形はやや不自然に感じられる。またこの場合，「ね／な」を付加しても容認されにくい。

(152) a. 映画を見ると，原作が｛?読みたい／読みたくなる｝ね。
b. 疲れると，甘い物が｛?欲しい／欲しくなる｝な。

これについて豊田(1983)では，「～たい」「欲しい」が意志的なモダリティを表

し，「と」条件文の文末ではそれらのモダリティが生起できない[40]ために，終止形では現れにくいにくいと説明している。しかし，(152')のように感情の表出を述べる文脈では，終止形の使用が自然になる。話者の意志としての解釈は，時間幅のある現在において成立するものだが，(152')のような感情表出は，瞬間的現在の感情を表すものであるという違いによると考えられる。

(152') a. [映画を見終えた人がその場での感想として]
いやあ，映画を見ると，やっぱり原作が読みたいなあ。
b. [疲れたときその場で実感したことを述べて]
ああ，疲れた。疲れると，甘い物が欲しいなあ。

(151)や(152')のように「表出文」を形成する場合に，形容詞終止形が許されるという事実は，(143)のような交替現象に形容詞の主観性が関与していることを示していると考えられる。5.3 節でこの点をさらに検討し，この交替現象が起こる要因を考察する。

5.2.2. 形容詞の時間的限定性

条件文の帰結部分に終止形で現れる形容詞は，ある条件の下で新たに状態が生起することを表す。したがって，そのような意味を表せる形容詞は，時間的限定を受ける性質を持つものに限られると考えられる。このことは，定延(2002, 2008)の「デキゴト化」という捉え方からもうかがえる。定延(2002, 2008)では，形容詞終止形が条件文の帰結部分に現れる現象を「状態表現のデキゴト化」として捉えている。第 2 章で既に述べたように，定延(2002，2008)では，「痛い，気持ちがいい」などの心理形容詞は，「デキゴト化」するとされている。すなわち，これらの語は認知者が環境から体感として刺激を受け取る体験を述べるものであり，体験は時空間の限定を受けるため，「デキゴト」であると言える。条件文の帰結部分には通常デキゴトを表す語が現れることから，体験を表す形容詞が現れる現象は状態表現がデキゴト化したものだということになる。また，

[40] たとえば，「*学校が終わると，早く家に帰りなさい」と言えないように，「と」条件文では文末に意志のモダリティが現れない（日本語記述文法研究会 2008:102）。

定延(2002，2008)では，心理的意味を表す形容詞に限らず，強い刺激を表す述語であれば，デキゴト化する可能性があると述べている。たとえば，色彩語が条件文の帰結部分に現れ得ることが定延(2002：169，2008：158)で指摘されている。すなわち，(153a)の「真っ赤だ」は，「一分もしたら」という条件の帰結に現れるが，これは強い刺激であって体感として語られやすいからだという。

(153)　[酸性に反応すると赤くなるリトマス試験紙を使って実験中に]
　　a.　さあ、溶液に試験紙を浸けた。一分もしたら，真っ赤だよ。
　　b. ?さあ、溶液に試験紙を浸けた。一分もしたら赤だよ。
（定延 2008：158）

(153b)の「赤だ」と比較すると，(153a)の「真っ赤だ」のほうが自然に感じられやすいのは，「真」という接頭辞によって甚だしい程度であることが示されているためだと説明されている。このことから定延(2008:157)では，この現象の成立にとって重要なことは，語彙的に心理的意味を表すということではなく，あくまでも刺激の程度の強さだと述べている。

定延(2002，2008)の指摘は，条件文の帰結部分に形容詞終止形が現れる現象の背後にある要因に言及している点で，本章の考察に重要な示唆を与えるものである。しかし，当該の現象の成立を刺激の程度によって説明している点は，疑問が残る。(154)のような条件文もあり得ることから，程度が強い刺激でなければ，条件文の帰結部分に現れ得ないわけではないからである。

(154)　[古代米について説明する文]　炊いたらほんのりピンク色。梅干を刻んだのを入れたみたいです。　（WEB 実例[41]）

むしろ(153a)と(153b)の容認度の違いは，5.2.1 で述べた「表出文」としての適切性に深い関係があると考えられる。(153'a)と(153'b)では，両者の表出文としての適切性に差があることがわかる。

[41] 出典は次の通りである。http://rikuzo.exblog.jp/2052852/, 2010/4/30

(153') a.　うわぁ，試験紙を溶液に浸したら，真っ赤だ！
　　b. ?うわぁ，試験紙を溶液に浸したら，赤だ！

酸性に反応して赤くなるリトマス試験紙が単に「赤」であることは客観的な事実であり，表出文の特性である「話者の主観性」を持たない。それに対して，「真っ赤」であるという逸脱性の判断は話者によるものであり，主観性を持ち得る。すなわち，平常の状態から逸脱しているかどうかは，話者が瞬間的に知覚・認知するものである。「真っ赤だ」のような逸脱状態を表す述語が条件文の帰結部分に現れるのは，客観的な状態だけでなく，それを話者が瞬間的に感じ取ったことを表しているためだと考えられる。また，定延(2002，2008)で体感の表現になり得ないとされる「赤だ」という語も，話者が知覚する瞬間に焦点を当てる文脈では，(155)のように容認可能となる。

(155)　[信号機の色が変わりそうなとき]
　　あ，あと 2，3 秒もしたら，赤だ！止まれ！

したがって，刺激の程度によって当該の現象の成立を説明することは妥当ではなく，むしろ瞬間的知覚を表せるか否かという主観性の程度が重要な要因となっていると考えられる。

また，定延(2002，2008)の「状態のデキゴト化」という捉え方は，条件文の帰結部分に形容詞終止形が現れる現象の一部を捉えているものの，全てに当てはまるわけではないことを指摘したい。たとえば，(156)のような条件文は，定延(2002，2008)では取り上げられていない。(156)では状態を表す形容詞終止形の使用がむしろ適しており，デキゴトの表現である形容詞＋ナルで置き換えられない。

(156) a.　この枕，触ると，柔らかいよ。
　　b.　*この枕，触ると，柔らかくなるよ。

(156a)で「柔らかい」は，前件の成立以前から「この枕」が備えている属性を表しており，前件の成立を契機に変化することを表しているわけではない。つまり，このような場合，形容詞は時間的限定を受けていないためデキゴト化しているとは看做せないと考えられる。

一方，これとよく似た例だが，(157)では形容詞終止形とともに形容詞＋ナルが用いられる。

(157) a.　この枕，寝ると，気持ちがいいよ。
　　b.　この枕，寝ると，気持ちがよくなるよ。

(157a)の「気持ちがいい」は，前件の成立によって起こる心理変化を表しており，形容詞＋ナルと置き換えられるため，「デキゴト化している」と捉えられる。つまり「状態のデキゴト化」という観点から見る限り，(156a)と(157a)はまったく異なるタイプの用法だということになる。しかし，(157a)は，「この枕で寝るのは気持ちがいい」という枕に関連する属性を述べているとも解釈できる。その意味では(156a)は(157a)と共通性を持っている。枕は前件の成立以前から変化していないのであるから，(157a)が属性として解釈される限りは，(156a)と同様，変化を表しているわけではないだろう。にもかかわらず，(157a)のみがデキゴト化しているという帰結は，事実の一側面を見落としていることにならないだろうか。むしろ(157a)で形容詞終止形がデキゴト化しない解釈があることを認めた上で，なぜ形容詞＋ナルとの交替が可能なるのかという問題に答える必要がある。そのためには，(156a)のような条件文を含めたより広い範囲の現象を検討する必要がある。

また，ここで重要なことは，形容詞＋ナルが表す変化が恒常的な事態として解釈されることで，属性的な意味に近付くということである。これは第 4 章で論じた心理動詞による属性文の成立原理と同様である。たとえば，「この枕で寝ると，常に気持ちがよくなる」という恒常性の認識は，「この枕で寝ること」がそのような心理を起こさせる可能性を備えているという認識を生み出す。そして，その結果「この枕で寝ることは，気持ちがよくなるようなことだ」という属性の解釈が可能となる。以上のように属性の解釈が成り立つ場合，本来デキ

ゴトを表す形容詞＋ナルが状態化すると言えるのではないだろうか。

以上のような考察から，本章では，状態の表現である形容詞終止形が変化の意味に近付く場合に加えて，変化の表現である形容詞＋ナルが状態に近付く可能性を検討したい。定延(2002，2008)の指摘は，前者の現象のみを説明するもので，後者の場合は考慮されていない。しかし，それでは条件文の帰結部分で形容詞終止形と形容詞＋ナルが近付く現象の全体を捉えることはできないと考えられる。そのような批判に基づき，本研究では状態と変化が双方向に近接する可能性を検討したい。

以上で，主観性と時間的限定性という心理形容詞が典型的に持つ意味特性が形容詞＋ナルとの交替現象に関わっていることを見た。次節では，ここでの検討から得られた示唆に基づき，なぜ条件文において状態の表現と変化の表現が近接するのか，その要因を考察する。

5.3.　条件文における状態と変化の近接性の要因

本節では，前節の検討を踏まえて，条件文の帰結部分で状態と変化の表現が相互に近接している可能性を検討する。すなわち，状態の表現である形容詞終止形と変化の表現である形容詞＋ナルが相互に近付く可能性とその要因を論じる。そして，その状態と変化の近接性が，話者による事態把握を反映していることを述べる。すなわち，条件文が表す事態がしばしば変化の開始の局面であると同時に，変化後の状態の局面としても捉えられる場合があり，その場合に，形容詞＋ナルと形容詞終止形が近接性を持つと考えられる。

5.3.1　状態が変化に近付く

前節で，条件文の帰結部分に形容詞終止形が生起する現象に，形容詞の主観性が関わっていると述べた。形容詞の主観性とは，心理形容詞が典型的に持っている意味特性であるが，程度の差こそあれ全ての形容詞が持ち得る性質であると樋口(2001)，八亀(2008)で指摘されている。それは，形容詞の意味には，話者が対象を評価し，意味付ける意味が含まれているためだという。たとえば，ある人が(158)のように発言したとすると，この形容詞文は，対象の属性を表し

ていると同時に，発言した人が自分が持っている基準に照らして「広い」と評価したことを表していると八亀(2008:33)で述べられている。

(158) この部屋広いね。

このような話者の評価は文脈によって前面に現れる場合と背景化する場合がある。同じ「広い」という形容詞でも，文脈や共起要素によって主観的側面が強く現れるか，背景化されるかが異なる。(159)のような場合には，話者がその場で感じたことを述べる意味になり，主観的側面が前面に現れる。一方，(160)では，広さを認定する主体の主観性は背景化され，対象の属性を表す意味が前面化する。

(159) [部屋に入って] わあ，この部屋広いね。
(160) 中国は日本より国土が広い。

条件文の帰結部分に形容詞終止形の使用が容認されるか否かが，終助詞の付加や文脈によって影響を受けるのは，このように形容詞の主観性の程度が増減する可能性があるためだと考えられる。通常，属性形容詞と言われる主観性の程度の低い形容詞であっても，(161)のような文脈では終止形の使用が容認され，形容詞＋ナルとの交替が成立する。

(161) ((151a)再掲)) [自転車のギヤを切り換えると同時に述べる場面で]
おおっ，この自転車はギヤを切り換えると，{速い／速くなる} ！

(161)のような文脈がなぜ形容詞の主観性を引き出すのだろうか。それは，条件節の事態が成立した瞬間を話者が体験するという場面では，話者の心理変化が捉えられやすいからである。すなわち，条件節の事態の成立の瞬間に話者の内面に新たな知覚が生じるという心理変化である。たとえば，(161)で「速い」と言うとき，「自転車のスピードが速くなる」という物理的な状態変化を述べているわけではない。むしろ「速い」と感じる感覚が話者の内面に生じたこと，

すなわち心理変化が生じたことを述べていると考えられる。それと同時に(161)はまた「スピードが速くなる」という物理的変化が開始することも表せるため，変化の開始を表す形容詞＋ナルと交替可能になるのだと考えられる。

一方，瞬間的に生じる感覚を表さない場合は，形容詞終止形が用いられない。たとえば，「目が悪い」という状態は，一瞬で感じ取られるようなものではないため，(162)のように瞬間的現在の感覚を表す表出文に適さない。このような時間的幅を持った状態の場合，話者が感じ取るという主観的側面が強調されにくいと言える。

(162) [テレビゲームをし終わった直後に述べる場面で]
??ああ，テレビゲームをしたら，目が悪い！

このような場合，条件節の事態の成立はあくまで状態変化の原因であって，話者の知覚を引き起こす原因とはなっていない。そのため，変化の開始を表す形容詞＋ナルは生起できるが，形容詞終止形は用いられないと考えられる。

(163) ((144c)再掲) テレビゲームをしたら，目が｛*悪い／悪くなる｝。

以上のことから，条件文の帰結部分で形容詞終止形と形容詞＋ナルが交替可能になるのは，話者が新たな知覚・認識を得る瞬間と状態変化の開始時点が重なりを持つためだと言える。(161)の例では，話者が「速い」と感じた時点と「スピードが速くなる」変化が開始した時点が一致している。そのため，話者の瞬間的現在の知覚を表す形容詞終止形と状態変化の開始局面を表す形容詞＋ナルが交替可能になるのだと考えられる。話者の瞬間的現在の知覚と変化の開始のどちらか一方の捉え方しかできない場合は，交替が生じない。(163)のような場合がそうである。(163)は，「目が悪い」と話者が感じた瞬間を表しているのではない。あくまで条件節の事態の成立を契機に「目が悪くなる」という変化が開始することを表している[42]。そのため，形容詞終止形と形容詞＋ナルの交替が成

[42] ここで表される変化の開始は，条件節の成立時と同時に開始するものであるとは限らず，条件節の事態の成立を契機として起こる変化の開始である。「家の中を綺麗にすると，｛気

立しない。また，話者の知覚を表していても，状態変化の開始を表さない場合には交替が成立しない。(164)の例がそのような場合を示している。(164)では，話者が「おいしい」と感じる感覚を表してはいるが，「(料理が）おいしくなる」という変化の開始を表しているわけではない。そのため，形容詞終止形と形容詞＋ナルの交替は成立しない。

(164)　食べてみると，{おいしい／*おいしくなる}よ。

一方，(165)では条件節の事態の成立を契機に話者が新たな感覚を得ることを表すと同時に，状態変化が開始することも表すことになるため，交替が成立する。

(165)　砂糖を入れると，{おいしい／おいしくなる}よ。

また，(143)の例のように，「気持ちがいい」「辛い」などの心理変化を表す文で交替が起こりやすいのは，心理変化の場合，話者に新たな感覚・知覚が発生する時点がまさに変化の開始点でもあるからだと考えられる。形容詞終止形と形容詞＋ナルの交替が典型的に成立する場合はこれが当てはまる。たとえば，(166)で「気持ちがいい」という感覚を得た瞬間は，同時に話者の心理変化が開始した変化の開始点でもある。そのため，状態を表す形容詞と変化の開始を表す変化動詞が接近していると言える。

(166)（(143a)再掲）家の中を綺麗にすると｛気持ちがいいです／気持ちがよくなります｝よね。

以上の考察から，条件文の帰結部分に現れる形容詞終止形は，条件節の事態

持ちがいい／気持ちがよくなる}」という場合には，条件節の事態の成立の瞬間に心理変化が開始するという解釈が自然である。しかしながら，「テレビゲームをしたら，目が悪くなる」という場合は，条件節の事態の成立の瞬間に開始するとは限らず，後々になって目が悪くなるという解釈も可能である。ただし，その場合も条件節の事態の成立がきっかけとなって変化が起こることに変わりはない。

の成立によって話者の内面に起こる一瞬の心理状態を表現するものだと考えられる。特に，条件節の事態の成立によって新たな感情や感覚が生じる意味を表す文の場合，話者が新たな心理状態を感じ取る瞬間が話者の心理変化の開始時点となる。そのため，条件文の帰結部分という文脈で，本来状態の表現である形容詞が変化の開始を表す形容詞＋ナルに接近し，交替が成立するのだと考えられる。

このように説明することで，定延(2002，2008)の言う「デキゴト化」の内実が見えてくる。定延(2002，2008)は状態がデキゴト化した結果，本来デキゴトが表されるべき条件文の帰結部分に形容詞終止形が現れ得ると捉えている。しかし，そのデキゴト化になぜ主観的意味が要求されるのかは明らかにされていなかった。すなわち，定延(2002)は，認知者が環境から刺激を受ける体感は「一瞬であり，時間の進展がないデキゴト(p.179)」であると述べている。しかし，なぜ体感を表す状態述語が「一瞬の」デキゴトを表すのか明確にしていなかった。主観的意味を持つ形容詞が，瞬間的現在における感情・感覚を表出的に述べることができることと考え合わせてみれば，その理由がわかる。人が何らかの感情・感覚を経験することは時間に限定されるデキゴトであるが，その一瞬を捉えれば，動的展開はない。そのため，一瞬を切り取って表現する場合は，動的展開を表さない形容詞が用いられる。形容詞は瞬間的現在の感情・感覚を表しているのだが，条件文の帰結部分という文脈が加わると，ある条件を契機にして起こる心理変化の一瞬の変化点として解釈し直される。形容詞＋ナルが表すような幅を持った変化ではないが，変化事象の開始点と重なりを持つことで，形容詞＋ナルの意味に近付くと言える。

5.3.2　変化が状態に近付く

次に，変化を表す形容詞＋ナルの側から状態の表現である形容詞終止形に近付く可能性を検討したい。条件文の帰結部分に形容詞終止形が現れる文の全てが，話者の瞬間的現在の感情を表しているわけではないと考えられる。たとえば，(167)のような文は，必ずしも話者の瞬間的現在の感情を表すという解釈に限られない。(167')のような文脈ではむしろ一般的・反復的な事態として解釈される。

(167) 単純な作業をすると，{眠い／眠くなる}。

(167') 単純な作業をすると，{眠い／眠くなる}。だから，安全のために適度な休憩を入れたほうがいい。

だとすれば，前節で論じた要因とは別の要因で形容詞終止形と形容詞＋ナルが近接する可能性があるのではないかと考えられる。その可能性を検討する上で，主節の形容詞が表すもう一つの意味に注目したい。すなわち，条件文の帰結部分に現れる形容詞は，話者の瞬間的現在の感情を表す一方で，属性を表す場合があるということである。

たとえば「眠い」という形容詞は，特定の時空間に限定される一時的状態を表すだけでなく，(168)のように一般的・恒常的属性を表すことができる。すなわち，(168)のような文は，益岡(1987，他)における「属性叙述」に相当する[43]。

(168) 単純な作業は眠い。

属性叙述は，「対象表示成分と属性表示成分が相互依存の関係で結合するという構造を持つ（益岡 2004:4）」とされている。(168)では，「単純な作業」と「眠い」が相互依存の関係で結び付けられていると考えられる。その関係は(167')の条件文が表す恒常的条件関係と非常に近いものである。つまり，(167)の条件文を恒常的事態として解釈する場合，(168)のような属性叙述文に意味的に接近すると言える。

このような意味解釈は，心理形容詞を主節の述語とする条件文でしばしば見られる。たとえば，(169)に示すように，心理形容詞の終止形を主節の述語とする条件文は，条件節の事態を主題化した属性叙述文で言い換えてもほぼ文意に影響はない。

(169) a. 家の中を綺麗にするのは，気持ちがいい。

[43] 感情・感覚を表す形容詞が，原因を主題化してその属性を表す属性叙述文を形成する機能を持つことは，山岡(2000:135-141)でも指摘されている。

（≒家の中を綺麗にすると，気持ちがいい）

b.　立ちっぱなしの作業が続くのは，辛い。

（≒立ちっぱなしの作業が続くと，辛い）

c.　自由な意見交換ができなくなるのは，寂しい。

（≒自由な意見交換ができなくなると，寂しい）

d.　息子から頼られるのは，嬉しい。

（≒息子から頼られると，嬉しい）

条件文の帰結部分に現れる形容詞終止形が，恒常的属性という静的な状態を表しているとすれば，なぜ形容詞＋ナルと交替可能になるのだろうか。それは，形容詞＋ナルが状態化する可能性があるからにほかならない。第 4 章で心理動詞がある条件の下に状態化することを述べた。心理形容詞に変化動詞が複合してできた動詞も，同様に状態化する可能性があると考えられる。

(169)の形容詞終止形を(170)のように対応する形容詞＋ナルで置き換えても，近い意味を表すことができる。

(170)　a.　家の中を綺麗にするのは，気持ちがよくなる。

b.　立ちっぱなしの作業が続くのは，辛くなる。

c.　自由な意見交換ができなくなるのは，寂しくなる。

d.　息子から頼られるのは，嬉しくなる。

厳密にいえば，(170)の形容詞＋ナルは，未来における変化の可能性を述べているのだが，変化が恒常的に起こるという認識から，変化の開始という本来の動的展開の意味は希薄化している。むしろ主題となる事態がそのような変化を起こさせる属性を持っているという意味に近付いている。

普通，形容詞＋ナルは開始限界を持つ動詞であるため，「～出す」「～始める」のような開始を表す複合動詞を形成できる。ところが，上で述べたように属性的に解釈される場合，開始のような動的展開が背景化されるため，この種の複合動詞を形成しない。(171)に示すように，一人称経験者の心理を表す場合，開始を表す複合動詞を形成できる。一方，(172)では個別の変化事象を離れて，属

性的に解釈されるため，開始を表しにくい。

(171)　a.　私は午後から単純な作業をすると，眠くなり始める。
　　b.　私は寂しがり屋だから，一人になると，すぐに寂しくなり出す。
(172)　a.　?単純な作業をするのは，眠くなり始める。
　　b.　?一人になるのは，すぐに寂しくなり出す。

前田(2009:48)では，ある条件文が個別的条件関係を表しているか，一般的条件関係を表しているかを区別するのは非常に困難であると述べられている。確かに，形容詞＋ナルが個別の変化事象を表しているのか，状態化して属性的な解釈を受けているのかはしばしば見分けにくい。冒頭に示した(143)の条件文の解釈も二通り可能であるだろう。

しかし，少なくともここでわかることは，(170)のように属性を叙述する文に言い換えられるような条件文は，形容詞＋ナルが状態化することによって形容詞終止形に接近している可能性があるということである。

そこで，条件節の事態を主題化することができるかどうかによって，形容詞＋ナルが状態化する可能性を検討してみると，次のような場合に状態化しやすいと判断できる。すなわち，条件節の事態がその変化を起こさせる原因であり，且つ述語を形成する形容詞の補語となる場合である。

まず，条件節の事態が形容詞＋ナルが表す変化を起こさせる原因ではない場合は，そもそも形容詞＋ナルが生起しない。(173)のような場合である。このような文で，主節の「柔らかい」が表しているのは，条件節の事態が成立する以前から存在する枕の状態である。この種の条件文では，話者が条件節の成立を契機にその状態を発見した意味になる。このような条件文では，(174)のような言い換えができないように，主節の述語が条件節の事態の属性として解釈されることはない。

(173)　この枕，触ってみると，{柔らかい／*柔らかくなる} よ。
(174)　*この枕を触るのは，{柔らかい／柔らかくなる}。

また，条件節の事態が状態変化の原因であっても，述語となる形容詞が原因補語をとらない場合は，条件節の事態は形容詞の補語になり得ない。この場合，条件節の事態を主題化して，その属性を述べる文は形成されない。このことは，(175a)と(175b)の述語の形容詞の違いによって示される。すなわち，(175a)の「辛い」のような心理形容詞は，原因となる事態を補語にとれるのに対して，(175b)の「顔が赤い」のような客観的状態を表す形容詞は，原因補語をとり得ない。

(175) a.　私は立ちっぱなしの作業が続くのが，辛い。
　　b.　*私はお酒を飲むのが，顔が赤い。

心理形容詞とそれに対応する形容詞＋ナルは，条件節の事態を原因補語としてとることができるため，条件節を主題化しても自然な文を形成できる。すなわち，(176a)に対応する(176b)が成立する。

(176) a.　((143b)再掲) 立ちっぱなしの作業が続くと，{辛い／辛くなる}。
　　b.　立ちっぱなしの作業が続くのは，{辛い／辛くなる}。

一方，(177)のように，客観的な状態を表す形容詞とそれに対応する形容詞＋ナルの場合，条件節の事態は補語となり得ないため，これを主題化した(177b)のような文は不適切となる。

(177)　a. ((144a)再掲) お酒を飲むと，{*顔が赤い／顔が赤くなる}。
　　b. *お酒を飲むのは，{顔が赤い／顔が赤くなる}。

また，心理的意味を表す形容詞であっても，「～たい」と「欲しい」は原因補語ではなく，対象補語をとる性質を持つため，条件節の事態の属性を表す文を形成しにくい。「～たい」は(178a)のように対象補語をとる場合は適切な文となるが，(178b)のように原因となる事態を補語にとることはできない。(179a)と(179b)の「欲しい」も同様である。そのため(180)に示すように，どちらも原因

となる事態を主題とする文を形成できない[44]。

(178) a.　私はビールが飲みたい。
　　b. *私は暑くなるのが飲みたい。
(179) a.　私は休みが欲しい。
　　b. *私は忙しい日が続くのが欲しい。
(180) a. *暑くなるのは，飲みたい。
　　b. *忙しい日が続くのは，欲しい。

対象補語をとりやすい「～たい」と「欲しい」を除いて，多くの心理形容詞は，原因となる事態の属性を述べることができる。このことは，人の心理変化は原因に依存的に成立すると認識されやすいためだと考えられる。心理変化と原因の間に恒常的な関係が認められる場合，原因となる事態がその心理変化を起こさせる可能性を潜在的に持っているという認識が生まれる。そのような話者の認識によって，心理変化を表す形容詞＋ナルが属性を表す意味に近付くと言える。

以上をまとめると，次のようになる。条件文の帰結部分で状態表現である形容詞終止形と変化の表現である形容詞＋ナルが近接する要因の一つは，形容詞＋ナルが状態化するためである。形容詞＋ナルが状態化するのは，心理形容詞と複合して述語となる場合で，原因となる事態と心理変化が恒常的条件関係で結ばれる場合に成立する。本来心理変化は特定の時空間に実現する事象であるが，原因によって恒常的・反復的に引き起こされる事態として捉えられると，原因と心理が固定的な関係として結ばれ，属性化する。そのような場合，変化動詞が本来持つ開始・終了といった動的時間展開が意識されなくなり，結果として一様な事態である状態に近付く。このようにして，本来変化を表す形容詞

---

44 ただし，「～たい」と「欲しい」は対象補語を主題化する場合に属性解釈を受けることがある。たとえば，(i)(ii)のような場合には，主題の属性として解釈されやすい。
(i)　[映画評論家が述べる場合] この映画は，必ず｛見たい／見たくなる｝。
(ii)　[不動産屋が述べる場合] このぐらいの広さは，｛欲しいです／欲しくなります｝よ。
つまり，これらの語は物の属性を表す場合に状態化する可能性はあるが，条件文の帰結部分に現れる場合には属性解釈を受けにくいと考えられる。

＋ナルが状態の表現である形容詞終止形に接近すると考えられる。

先に述べた状態が変化に近付く要因と合わせて考えると，条件文の帰結部分における形容詞終止形と形容詞＋ナルの交替は次のような要因によってもたらされると結論付けられる。すなわち，形容詞終止形が話者の瞬間的現在の感情・感覚を表すという形容詞の主観性による要因と，心理変化を表す形容詞＋ナルが原因との恒常的条件関係によって状態化するという要因である。しかし，(143)の例がそうであるように，典型的に交替が起こる例では，どちらの要因によるかを特定することは難しい。それは，心理形容詞が主観性を持つことと，心理動詞が原因を主題として属性を表す性質があることの二つの心理述語の特性が相互に関係しているからだと考えられる。そのような意味で，当該の現象は心理述語に特徴的に起こる現象であると言える。

5.4. 心理形容詞の意味と条件文の 2 つの解釈

本節では，形容詞終止形と形容詞＋ナルが交替可能となる場合，条件文全体の解釈も二通りの可能性が生じることを述べる。

本章で考察の対象とする条件文は，形容詞終止形と形容詞＋ナルの非過去形が主節の述語となるものである。そのような条件文は(181)に示す前田(2009:40)による条件文の用法分類のうち，主に「一般条件文」「反復条件文」か「発現」「発見」の用法に当たると考えられる[45]。「一般条件文」・「反復条件文」は，前件の成立を契機に後件の事態が恒常的・反復的に起こることを表す条件文で，「発現」・「発見」は，前件が表す状況で後件の状態が見出される意味を表す条件文である。

[45] 形容詞＋ナルが表す変化が仮説的な一回性の事態の場合，仮説的用法に含まれる可能性もあるが，条件文が表す事態が個別的なものか，一般的なものかを区別することは非常に困難である（前田 2009:48）ため，「一般／反復」に含めて考えることとした。

(181) 条件文の用法の分類

- 仮定的
  - 反事実的用法
  - 仮説的用法
- 非仮定的
  - 多回的
    - 一般条件文
    - 反復・習慣条件文
  - 一回的
    - 連続
    - きっかけ
    - 発現
    - 発見

(前田 2009:40)

形容詞終止形と形容詞＋ナルの交替が起こる場合，この「一般／反復」の解釈と，「発見／発現」の解釈が同時に成り立つことが多い。たとえば，「家の中を綺麗にすると，気持ちがいい」という条件文は，次のような二つの解釈が可能である。一つは，前件の事態の成立によって，話者が新たな感覚を得ることを表しているという解釈で，豊田(1979:92)の定義によれば「発見」の用法に含まれる[46]。もう一つは，前件の事態「家の中を綺麗にすること」が恒常的・反復的に人を「気持ちがいい」状態にさせるという「一般／反復」の解釈である。この場合，単に反復的な事態を表しているという解釈に留まらず，条件節の事態が気持ちよくさせるような属性を持っているという解釈につながる。この二つの解釈が同時に成立するのは，主節の述語が感情・感覚など心理的意味を表す形容詞の場合である。心理形容詞の解釈が二つあることを反映して，条件文全体の解釈も上記の二つが結び付いていると考えられる。

通常，「発見／発現」の条件文は，前件の事態の成立をきっかけに，新たな状

[46] 豊田(1979:98)では，話者が物の存在や状態を発見する場合だけでなく，「花子が部屋へ行くと，いいにおいがした」のように話者が「自覚する」場合を「発見」の用法に加えている。通常の「発見」では，前件の成立以前から存在している状態が発見されるのだが，感情・感覚の場合，前件が成立してはじめて生じる点で通常の「発見」とは異なる。

態を見出す一回性の事態を意味する。しかし，心理形容詞を述語とする場合，「一般／反復」という多回性の事態の解釈も同時に成り立つのはなぜだろうか。それは，感情・感覚を捉える話者の認識と関係があると考えられる。通常，条件節の事態の成立を待たなければ，後件の感覚が生じることはない。しかし，人はしばしば「私がやってそうだから，誰がやってもそうだ」という認識によって，自らの心理経験を一般化して述べることがある。そのような場合，条件節の事態が成立する以前から，その事態が成立すれば常にある心理変化が起こるという恒常的条件関係を述べる意味になる。そのようにして，一回性の感情・感覚が一般的・恒常的事態として認識され，その認識が「一般／反復」条件文の解釈を成立させていると考えられる。

以上のように，心理形容詞を主節の述語とする条件文は，主節述語が一回性の事態としても恒常的事態としても捉えられるという事態の捉え方の二面性を反映して，「一般／反復」と「発見／発現」の両方の意味を持つと言える。

5.5. 変化動詞が表す変化との違い

前節までで，形容詞終止形と形容詞＋ナルが双方向に接近する現象に心理形容詞の意味特性が関与していることを述べた。最後に，心理形容詞が条件文の帰結部分で表す変化と変化動詞が表す変化とはどのような違いがあるかについて述べる。

条件文の帰結部分で形容詞終止形が表す変化は，条件節の事態の成立を契機に瞬間的に生じる心理変化である。それに対して，形容詞＋ナルは開始から終了までの時間展開を含んだ，幅のある変化を表すものである。このような相違が現れるのは，変化が漸次的に成立することを表す場合である。そのような場合には，形容詞終止形を用いることができない。たとえば(182)のように，「だんだん，徐々に」など漸次的変化を表す副詞を伴う場合は，変化動詞ナルとの複合が必須となる。

(182) a. 単純な作業が続くと，だんだんと｛*眠い／眠くなる｝。
b. 夕方になると，徐々に｛*寒い／寒くなる｝。

このことは，条件文の帰結部分に形容詞終止形が現れる場合，対応する形容詞＋ナルとの相違が見えにくいが，全くなくなるわけではないことを示している。すなわち，本来形容詞終止形と形容詞＋ナルが表す変化は時間展開の有無において異なるものであるため，心理変化の移行過程を強調する場合，その相違が見えてくる。心理変化は，平常心から逸脱することによって瞬間的に成立するものであるため，心理変化の移行過程は捉えにくい。そのため，通常は心理変化の開始の局面と変化の結果生じる状態の局面の区別は見えにくい。そのため，本来それらの異なる局面を表現する形式が近接性を持つのだと考えられる。すなわち，心理形容詞が動詞に近接する背景には，瞬間的に成立する状態を表すという心理形容詞の特性が一つの要因となっていると言える。

5.6. 第 5 章のまとめ

本章では，条件文の帰結部分で形容詞終止形と形容詞＋ナルが交替可能になる現象について考察し，その成立要因が心理述語の意味特性によって説明できることを述べた。本章の主張は，次のようにまとめられる。すなわち，条件文で状態を表す形容詞と変化を表す形容詞＋ナルが意味的に近付く現象は，状態が変化に近付くことによって生じる可能性と，変化が状態に近付くことによって生じる可能性がある。状態が変化に近付くとは，条件文の帰結部分に現れる形容詞終止形が条件節の成立時における一瞬の心理状態を表す場合に，形容詞＋ナルが表す変化の意味に近付くというものである[47]。瞬間的現在の心理状態を表し得る形容詞は，典型的には感情・感覚を表す心理形容詞であるが，文脈によっては本来対象の属性を表す形容詞が主観性を帯びる場合もある。それは，その形容詞が表す属性が，話者の内面に生じる新たな知覚として捉えられる場合である。条件節の事態の成立を契機に状態変化が起こるという事態は，条件

[47] 一方で，心理動詞が話者の内面に起こる一瞬の心理変化を表現する場合には状態表現に近付くことが指摘されている。たとえば，「話し声がする」「いい匂いがする」「栗のような味がする」などの表現がある。寺村(1984:101)は，これらの表現を感覚を捉えた瞬間を述べたものだと述べている。この場合，動詞のル形は現在時を指していると解釈されるため，状態動詞的であると言える。

節の成立を契機に，話者が新たな状態を知覚するという事態でもある。前者のような事態として捉える場合には形容詞＋ナルが，後者の事態として捉える場合には形容詞終止形が用いられる。そして，両形式が交替可能となるのは，その両方の捉え方が可能である場合があるからである。

また，変化が状態に近付くとは，本来変化を表す形容詞＋ナルが，条件節の事態との恒常的関係が認められることによって状態化するというものである。すなわち，ある事態が原因となって，恒常的に心理変化が起こる場合，その原因が心理変化を起こさせるような属性を持っていると認識される。そのような原因と心理変化の恒常的関係が話者によって認定されることによって，心理変化を表す形容詞＋ナルが原因となる事態の属性を表す意味に近付く。人の心理変化はそれを引き起こす原因が必ず存在すると認識されるため，この現象は心理的意味を表す場合に典型的に起こる。それは，心理形容詞が原因となる事態を主題化する場合に恒常的属性を表すことと，心理形容詞＋ナルが主題の属性を表す意味に近付くことによって実現する。つまり，形容詞終止形と形容詞＋ナルがどちらも属性的に解釈されることで意味的に近付き，交替が成立するのである。

形容詞終止形と形容詞＋ナルが交替可能となる場合，その条件文は次のように二つの解釈を同時に受ける。すなわち，前件の成立をきっかけに，話し手が新たな感情や感覚を得るという発見の意味と，前件の事態の成立を契機に，後件の状態変化が恒常的に起こるという一般条件文の意味である。発見の条件文は，〈状態〉の表現である形容詞を後件にとりやすく，一般条件文は，〈動き〉の表現である動詞を後件にとりやすい。二つの解釈が同時に可能な条件文では，帰結部分で表される事態が〈状態〉としても〈動き〉としても捉えられる可能性があるため，その二つの表現が交替し得ると言える。

以上で述べた本章の主張は【図 1】にまとめられる。

形式	形容詞終止形	交替	形容詞＋ナル
形容詞の用法	状態	表出 ⇒ / ⇐ 事態の属性	状態変化
条件文の用法	発見／発現		一般／反復
事態の捉え方	〈状態〉		〈動き〉

【図 1】状態と変化の近接性と交替現象

この図は，形容詞終止形の表出の用法によって状態が変化に，形容詞＋ナルが属性解釈を受けることによって変化が状態に，それぞれ近付いていることを表している。またそれにともなって，条件文の二つの解釈と事態の時間展開の二通りの捉え方がいずれも近接することを示したものである。本章の考察によって，先行研究では捉えきれなかった成立条件が正しく導かれたとともに，心理述語が持つ意味特性によって状態表現と変化表現が接近することが明らかとなったと言える。

本章の結論は，本研究の全体の目的である心理形容詞と心理動詞のアスペクト的近接性と相違について何を示したことになるだろうか。第 3 章では，本来心理形容詞は〈状態〉を表し，心理動詞は〈動き〉を表すというアスペクトの対立が成立していることを論じた。そして第 4 章では，心理動詞の側の要因によって，心理形容詞と心理動詞のアスペクト対立が解消することを見た。本章では，心理形容詞の側の要因によっても心理述語の間のアスペクト的近接性がもたらされることを示した。すなわち，心理形容詞は条件文の帰結部分で，対応する形容詞＋ナルが表す時間局面に近付くことができることを見た。したがって，本章の考察は，文のレベルのアスペクトを含めると，心理形容詞は〈状態〉，心理動詞は〈動き〉というアスペクトの対立が必ずしも成立しないという事実を示していると言える。しかし，心理形容詞が〈動き〉に近付くと言っても，本来〈状態〉を表すものであるという語彙的アスペクトが変化するわけではない。条件文の帰結部分で心理形容詞が変化を表すように見える現象も，注意深く見れば，対応する形容詞＋ナルが表す時間局面と全く同一ではないこと

がわかる。すなわち，条件文の帰結部分に現れる心理形容詞の終止形が表す変化は，変化動詞ナルが表す変化と同じように見えても，時間展開の有無において異なるものである。心理形容詞は，あくまで時間展開を含まない〈状態〉を表すものであるが，変化動詞は開始や終了を含んだ幅のある〈動き〉を表している。そのことは，漸次的変化を表す場合に心理形容詞が用いられないという事実から示される。それにもかかわらず心理形容詞と変化動詞が交替可能となるのは，事態が幅のある変化としても，状態としても捉えられる可能性があるからだと考えられる。本章で扱った現象は，心理的事態が話者によって動的時間展開を含むものとしても含まないものとしても捉えられるという事態の特性を反映していると言える。第 4 章と本章の結論を総合すると，次の結論が導かれる。すなわち，心理述語文では〈状態〉と〈動き〉が互いに近接性を持つこと，そして，それは話者による心理的事態の捉え方が二通り可能であるためだということである。

第 6 章

結論と今後の展望

第 6 章　結論と今後の展望

本章では，まず全体のまとめとして，第 1 章で述べた目的に沿って本研究で明らかになったことを述べる。そして，話者による心理の捉え方と心理述語文のアスペクト特性について本研究の結論を述べる。次に，本研究の結論が理論的にどのような意義を持つかを述べる。また，本研究のテーマである心理形容詞と心理動詞の相違と近接性は，日本語を外国語として学習する立場からも関心を持たれる問題である。そこで，本研究からどのような教育的示唆が得られるかを述べておきたい。そして最後に，今後の発展に向けて取り組むべき課題について述べる。

6.1.　本研究のまとめと結論

本研究は，先行研究で明らかにされていなかった心理述語のアスペクトの問題を，形容詞と動詞の相違と近接性という観点から考察した。本研究が明らかにしたことを，第 1 章で述べた 4 つの問題提起に答える形で整理する。

① 心理動詞がテイル形を取る場合，心理形容詞とどのような意味の相違を持つのか，なぜ相違が生じるのか。

心理動詞と心理形容詞は，前者は心理を〈動き〉として捉えるもので，後者は〈状態〉として捉えるものであるという語彙的アスペクトの相違を持つ。心理動詞がテイル形をとる場合，その相違が解消され，論理的意味の上で等価となるが，両者は時間展開の含意の有無において異なる。すなわち，心理動詞テイル形は，心理をいったん〈動き〉として捉えた上で，その継続局面を切り出して示しているのに対し，心理形容詞は最初から心理を〈状態〉として捉えている。そのため，心理動詞テイル形が用いられるとき，表される事態が時間の流れに沿って展開するものであることが含意されるが，心理形容詞ではその含意が生じない。本研究は，この相違によって，心理動詞テイ

ル形と心理形容詞が二つの事態の同時性を述べる文脈で使い分けられることを明らかにした。たとえば,「わたしが風邪で｛??苦しい／苦しんでいる｝あいだに，妻は友だちと旅行に出かけた」のように，従属節内の事態が継続中に主節の事態が生じたことを表す文では，心理動詞テイル形が選好されるというものである。このような時の従属節では，〈動き〉としての捉え方が適しているため，心理動詞テイル形の持つ時間展開の含意が文脈に合致すると考えられる。以上の考察から本研究は，心理動詞テイル形と心理形容詞は論理的意味においては等価であるが，語彙的アスペクトの相違によってもたらされる含意的意味の違いを持つと結論付けた。

② 心理動詞のル形が状態化するのはどのような場合で，心理形容詞が表す状態性とどのような違いがあるのか。

本研究は心理動詞のル形が属性解釈を受ける場合に状態化することを明らかにした。たとえば,「慣れない仕事は戸惑う」のような文では，慣れない仕事は人を戸惑わせるような属性を持っているという解釈が成り立つ。このような解釈が成立する場合，本来事象を表す心理動詞が状態化する。本研究では上のような文の成立条件を考察することで，心理動詞のル形が状態化する要因を明らかにした。その成立条件とは次のようなものである。第一に，心理動詞が表す事象（心理事象）の成立を，経験者がコントロールできず，被動的に受け入れるのみであること，第二に，主題名詞句が述語となる心理動詞の原因補語であること，第三に心理事象が恒常的に成立すると話し手が認識していること，という三つである。これらの条件を満たす場合に，心理動詞のル形が属性解釈を受ける。心理動詞のル形が属性を表す場合，話者がその心理事象を恒常的に起こるものとして認識していることが含意される。それは，心理動詞による属性文が心理事象を原因となる事態の属性として話者が捉え直した表現であるからである。もともと状態として捉えている形容詞ではそのような話者の認識は含意されない。したがって，心理動詞のル形が状態を表す文は，時間的性質において形容詞文に近接していながら，含意のレベルで意味の相違があると言える。

③　心理形容詞が条件文の帰結部分で変化を表せるのはなぜか。心理動詞が表す変化とどのような違いがあるのか。

本研究は，心理形容詞が条件文の帰結部分で変化を表すと解釈される現象が心理形容詞の意味特性を要因としていることを明らかにした。たとえば，「家の中を綺麗にすると，気持ちが｛いい／よくなる｝」のような文で，心理形容詞が変化動詞と同様に変化の開始局面を表しているように見える現象である。本来形容詞は時間の中で変化しない〈状態〉を表すものであるが，このような文では，〈動き〉の表現である変化動詞ナルが表す時間局面に接近する。この現象の成立には，心理形容詞が主観性を持ち，表出を表すことが要因として関わっている。表出とは，瞬間的現在における話者の感情・感覚を直接に言語化するものである。すなわち，条件文の帰結部分に現れる心理形容詞は，瞬間的現在時の話者の心理状態を表していると言える。話者が心理変化の瞬間を捉えて言語化する際，その瞬間に存在する心理状態として捉えられる一方，心理変化の開始点という動的局面としても捉えられる。そのため，状態の表現である心理形容詞が変化の表現に接近すると言える。しかし，変化動詞が表す変化との重大な相違は，心理形容詞が表す変化は，時間展開のない瞬間的事態であるということである。一方の心理形容詞＋ナルによって表される変化は，開始・終了という時間展開を含んだ幅のある事態である。これは，変化が漸次的に起こることを表す場合に，形容詞単独では表せず，変化動詞との複合が必須となることから明らかである。

④　①から③で観察されたことは，話者による心理的事態の捉え方をどのように反映しているか。

①から③の疑問に答えることを通して，心理的事態を話者がどう捉えるかという話者による事態の捉え方が心理表現の述語形式の使い分けに反映されていることを見た。心理を時間の流れに沿って開始したり終了したりする時間展開を持った〈動き〉として捉える場合には心理動詞が用いられる。一

方，時間展開を含まない一様な事態である〈状態〉として捉える場合には心理形容詞が用いられる。しかし，目に見えない事態を言語化するという心理表現の特殊性によって，〈状態〉の表現である心理形容詞と〈動き〉の表現である心理動詞が互いに近接することがあることも示された。具体的には，〈動き〉を恒常的事態として捉える話者の認識に支えられて，心理動詞のル形が状態を表す現象と，〈状態〉を瞬間的変化点として捉える話者の解釈によって，心理形容詞が変化を表す現象を示した。このような場合に，〈動き〉と〈状態〉が近接しているように見えるのは，同じ心理的事態が話者の解釈によって，〈動き〉としても〈状態〉としても捉えられるためだと考えられる。このことから，事態が時間によって展開するか否かは，目に見えない事態の場合，話者の解釈に依存するということが示される。本研究で明らかとなった心理述語のアスペクト的相違と近接性は，そのような心理的事態の特性を反映していると言えよう。

以上の考察を通して，本研究は結論として次の二つのことを主張する。すなわち，第一に，心理を〈動き〉として捉えるか，〈状態〉として捉えるかという話者の心理的事態の捉え方が，日本語の心理述語の品詞の使い分けに反映されているということである。そして第二に，日本語の心理述語文では，話者の事態の捉え方を背景として〈動き〉と〈状態〉が交差する場合があることもまた示された。すなわち，心理的事態の捉え方はしばしば任意であり，〈動き〉としても〈状態〉としても捉えられる場合があるために，〈動き〉の表現である心理動詞が〈状態〉に，〈状態〉の表現である心理形容詞が〈動き〉にそれぞれ近接すると考えられる。

6.2. 本研究の意義

本研究は，心理形容詞と心理動詞を比較することによって，それらのアスペクト特性についての新たな知見を提示した。本節では，本研究で明らかになったことが，どのような理論的意義を持つかを述べる。

第一に，先行研究で既に指摘されている心理動詞の〈動き〉としての性質を，

実際の運用のレベルで確認したことである。すなわち，三原(2000，2004)，吉永(2008)で心理動詞が〈動き〉を表す動詞と多くの共通性を持つことが指摘されている。しかし一方で，動きが外面に現れないため時間的局面の境目がはっきりしない（国立国語研究所 1985）ことや，ル形とテイル形のアスペクト対立が部分的である（工藤 1995）ことなど，文レベルでは〈動き〉の動詞と異なる振る舞いを見せることが報告されている。本研究では心理形容詞との使い分けの観点から，心理動詞の〈動き〉としての性質が文レベルの振る舞いに反映されていることを確認した。

第二に，本来は動的時間展開を含む心理動詞が，状態性を持つように見える現象を，原因の主題化や談話形成に関わる話者の意識によって生じる解釈の問題として説明した点である。先行研究はこの現象について，心理動詞が「アスペクトから解放されている」（国立国語研究所 1985:68-69）ためだと捉えたり，「対応する形容詞を持たない動詞がル形でそれを代用する」（三原 2000:66）という一部の心理動詞の語彙特徴として捉えていた。しかし本研究では，上記の現象を，心理変化の原因が主題化されることや，心理変化が恒常的であると認識されていることを要因として成立する一つの解釈のあり方として説明した。そのように捉えることによって，心理動詞が語彙的アスペクトのレベルで〈動き〉を表すことと矛盾なく説明できる。

第三に，本研究は，心理形容詞の主観的性質と，心理形容詞が条件文の帰結部分で変化を表す現象との関わりを明らかにした。この現象は，定延(2002，2008)で，状態表現のデキゴト化として指摘されていたものであるが，「デキゴト化」が時間の限定を受ける性質によるものか，主観的な意味を要因とするものかは明確ではなかった。本研究の考察を通して，心理形容詞が話者の瞬間的感情・感覚の表出を表す性質を持つことが，この現象の成立に関わっていることが明らかとなった。すなわち，心理形容詞は心理変化の結果生じる心理状態を述べているのだが，条件文の帰結部分という文脈が加わることによって，心理変化の開始点として解釈されるということである。心理変化は一瞬で成立するため，変化の開始の局面と変化の結果生じる状態の局面とが接近し得る。そのため，心理的意味を表す形容詞で典型的に当該の現象が見られる。本研究のこのような考察は，定延(2002，2008)のデキゴト化という概念に内実を与え，

理論的に発展させたという点で理論的意義が認められるものであると言える。

第四に，本研究は心理述語のアスペクト特性を，話者による事態の捉え方という事態の言語化一般に関わる原理によって捉え直した。従来の先行研究では，心理動詞の語彙的アスペクトが〈状態〉と〈動き〉の両方に共通性を持つ点や，心理述語が主語の人称に影響を受ける点など，心理述語がアスペクト的に特殊な性質を持つことが注目されてきた。しかし，本研究の考察によって，そのような心理述語に固有な現象とされてきたものが，事態の捉え方と述語の品詞の選択という言語一般の原理によって捉えられることが明らかとなった。特に，心理形容詞と心理動詞テイル形が，モダリティとともにアスペクトの相違を要因として使い分けられるという本研究の知見は，心理述語と一般の述語との共通性を示した点で重要であると考えられる。

6.3. 日本語教育への示唆

「悲しい」と「悲しんでいる」，また「悲しい」と「悲しくなる」が同じ場面で使われることがあるなど，対応する心理形容詞と心理動詞の相違はしばしば見えにくい。そのため，これらの語がどのような違いを持ち，どう使い分けられるのかという問題は，日本語学習者にとって関心が高い問題であると考えられる。本研究はこれら類義表現の違いを示した点で日本語教育の視点からも意義が認められる。ここでは，それに加えて本研究が日本語教育の現場に示唆することを述べる。

第一に，本研究は心理動詞が属性文を形成する可能性について指摘したが，この点に日本語教師は留意する必要があると考えられる。一般に日本語学習者の産出文には，動詞のル形とテイル形を混同する誤用が多く見られる。心理動詞の場合は特にそのような誤用が叙述のタイプの違いにつながり，次のような誤解を与える文を産出してしまうことになる。

(183) わたしは国際結婚したくないです。…中略…たとえば，難しい言葉を説明する時，相手が全然わからないので，本当に<u>困っています</u>。

（ベトナム人日本語学習者の作文，下線は筆者付加）

「困っています」と言うと，今現在自分自身が感じていることを述べているように思われる。しかし，実際にはこの文は現実に感じていることではなく，国際結婚に伴う一般的な問題について述べようとしている文である。そのため，「困っています」は不適切で，「困ります」としなければならない。このようなル形とテイル形の意味の違いは意図の伝達にとって重要な情報だが，十分に指導されているとは言い難い。

そこで，本研究で属性文を形成しやすいと判断された「困る，疲れる，戸惑う，飽きる，イライラする」などの心理動詞については，ル形とテイル形で叙述のタイプが変わることに注意するように指導することが望まれる。すなわち，ル形では属性文として解釈される可能性があるが，テイル形では事象文としての解釈に限定されるということである。また，「アルバイトは疲れる」「同じ練習は飽きる」などの表現は，初級の学習者でも教室で使えるものである。たとえば，「アルバイトはどうですか」という質問に対して，初級レベルでは「大変です」「複雑で難しいです」などの形容詞文で答える答え方を教えることが多い。その際，「アルバイトは疲れます」という動詞文によっても感想を伝えられるということを教えてはどうだろうか。特定の動詞がこのような属性文を形成するということを早い段階から知っていれば，表現の幅が広がり，日本語で意図したことを伝える助けになるのではないだろうか。

第二に，本研究は構文の成立条件を客観的なテストによって示したため，日本語教師が学習者の産出文の正誤を判断する際の基準として用いることができる。たとえば，(184)は『日本語誤用辞典』（市川保子(編)(2010)）から引用した文であるが，このような形容詞の使用は，どこか不自然に感じられ，誤用と判断されやすいだろう。

(184)　夏休みになると<u>国へ帰りたい</u>ですが，試験準備をしなければならないですから，あきらめました。〈韓国〉

（市川（編）2010:295，下線は筆者付加）

しかし，「夏休みになると，嬉しい」という文は自然に感じられるため，単に

条件文の帰結部分では変化動詞を付加しなければならないとまでは言えない。そこで，どのような場合に正用として受け入れられ，どのような場合に誤用になるのかを判断し，その理由を説明することが教師に求められる。その際に本研究が示したテストが有用になるだろう。

第三に，本研究は日本語の心理動詞が動的なアスペクトを持ち，対応する形容詞とアスペクトの違いを要因として使い分けられることを示した。これは日本語母語話者にとっては当然のように思われることだが，日本語学習者にとってはそうではない。日本語では動詞によって〈動き〉として表現される心理の多くが，英語では状態動詞や形容詞で表されることが指摘されている（Grimshaw1990，坂東・松村 2001）。したがって，そのような言語を母語とする日本語学習者にとって日本語の心理動詞が動的なアスペクトを持つことは母語から類推しにくいと考えられる。心理動詞のテイル形が外面的動作の進行と同様に動的展開の一局面を表すことは，日本語教育でもっと強調して教えられてもいいのではないだろうか。

6.4. 今後の展望

最後に，今後の発展のために本研究に残された課題を述べる。また，本研究の成果を今後の研究にどのように生かしていくかという展望を述べたい。

まず，本研究は心理動詞のル形が属性解釈を受けることによって状態の表現に近付くことを論じた。確かに多くの心理動詞でこの説明が当てはまるのだが，心理動詞のル形が状態化する全ての場合に属性解釈を受けるわけではない。たとえば，寺村(1984:100)で，「風の音がする」「匂いがする」などの感覚を表す表現が状態性を持つことが指摘されている。このような場合には属性解釈ではなく，瞬間的現在の感覚を表すというモダリティ的要因が状態化に関わっていると考えられる。「イライラする」「困る」などの本研究で属性文を形成しやすいとした心理動詞も，一方で主観的性質を持っていることが指摘されている（堀川 1992，山岡 2000）。さらには，主観的意味を持つ形容詞が，主体の感情・感覚を表す場合と主題の属性を述べる場合があることとも関わりがあると考えられる。以上の問題を今後考察に加えることで，モダリティとアスペクトという

二つの対立軸の関わりをさらに明確に捉えることができると期待される。これは今後の発展的課題としたい。

次に，思考・認識を表す心理動詞のアスペクト対立についても，本研究の考察の結果を適応できないか，今後検討したい。これらの動詞は意志性において，感情・感覚を表す心理動詞とは区別される。しかし，テイル形が動的時間展開の一局面を表すというアスペクト性においては，感情・感覚を表す動詞と共通していると考えられる。したがって，「思う」と「思っている」など思考動詞のル形とテイル形の使い分けにも，モダリティに加えてアスペクト的要因が関わっているのではないかと予想される。今後はこのような問題を含めて検討することで，心理動詞のアスペクト対立の全体像を明らかにしたい。

また，第 3 章で扱った「悲しい」と「悲しんでいる」のような心理形容詞と心理動詞テイル形の相違は，「忙しい」と「忙しくしている」，あるいは「風が弱い」と「風が弱まっている」のような一般の形容詞とその派生動詞の使い分けとどこまで共通し，どのような相違点を持つかを確かめる必要がある。相違については，「忙しくする」などが意図性を持つ（眞野・影山 2009）ことや，接辞「まる」による動詞は，変化の意味を付加すること（杉岡 2002，2009）が既に知られている。このことから，心理述語のペアに比べて一般の述語では形容詞と動詞の間の意味の相違がより明確であると言える。しかし，心理述語のペアがこれらの述語対とどこまで共通しており，どこからは心理述語の特性であるかは検討の余地がある。そのような考察を加えることで，心理述語の特性ついての考察をさらに深めたい。

最後に，上で述べた問題と関連して，心理述語以外に同じ事態を異なる品詞で表し分ける現象との共通性と相違についても今後考えていきたい。たとえば，「お客さんがいらっしゃった」を「お客さんがお見えだ」と名詞化して表現する敬意表現がある。この場合の動詞表現と名詞表現にはどのような違いがあるだろうか。また，「明日 8 時に出発する」と「明日 8 時に出発だ」という「動作性名詞＋スル」と「動作性名詞＋ダ」の違いも，本研究の結論を応用して捉えることができないだろうか。本研究の結論は，話者が事態の動的時間展開を意識しなくなることで，心理形容詞と心理動詞のアスペクトが近接するというものだった。このような考え方を，上で述べた現象に応用してみることで，事態

把握と述語の品詞の対応関係についての理論的考察がより深められると期待される。以上の問題を追究していくことで，本研究をさらに発展させたい。

参考文献

―日本語文献―

荒　正子（1989）「形容詞の意味的なタイプ」，言語学研究会（編）『ことばの科学 3』，pp.147-162，むぎ書房.

市川保子（編）（2010）『日本語誤用辞典』スリーエーネットワーク.

奥田靖雄（1977）「アスペクトの研究をめぐって―金田一的段階―」『国語国文』8，pp.51-63，宮城教育大学国語国文学会.

奥田靖雄（1988）「時間の表現(1)」『教育国語』94，pp.2-17，むぎ書房.

小山敦子（1966）「「の」「が」「は」の使い分けについて―展成文法理論の日本語への適用―」『国語学』第 66 号，pp.61-84，国語学会.

影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房.

影山太郎（1996）『動詞意味論』くろしお出版.

影山太郎（2009）「序　事象の把握と言語表現」，影山太郎（編）『日英対照　形容詞・副詞の意味と構文』，pp.3-12，大修館書店.

金水　敏（1989）「「報告」についての覚書」，仁田義雄・益岡隆志（編）『日本語のモダリティ』，pp. 121-129，くろしお出版.

金水　敏（2000）　「時の表現」，『日本語文法 2　時・否定と取り立て』（工藤真由美・沼田善子との共著），pp.3-92，岩波書店.

金田一春彦（1950）「国語動詞の一分類」『言語研究』15，pp.48-63;金田一春彦（編）（1976）『日本語動詞のアスペクト』，pp.5-26，むぎ書房に再掲.

工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト』ひつじ書房.

工藤真由美（2002）「現象と本質―方言の文法と標準語の文法―」『日本語文法』2 巻 2 号，pp.46-61，日本語文法学会.

国立国語研究所（高橋太郎執筆）(1985)『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』秀英出版.

定延利之（2002）「「インタラクションの文法」に向けて―現代日本語の疑似エビデンシャル―」『京都大学言語学研究』第 21 号，pp.147-185.

定延利之（2008）『煩悩の文法』ちくま新書.

杉岡洋子（2002）「形容詞から派生する動詞の自他交替をめぐって」，伊藤たかね（編）『文法理論：レキシコンと統語』，pp.91-116，東京大学出版会.
杉岡洋子（2007）「主観的事象表現と複雑述語形成」，『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第 38 号，pp.21-43.
杉岡洋子（2009）「第 6 章　形容詞から作られた動詞」，影山太郎（編）『日英対照　形容詞・副詞の意味と構文』，pp.191-222，大修館書店.
鈴木重幸（1957）「日本語の動詞のすがた（アスペクト）について―～スルの形と～シテイルの形―」（言語学研究会報告）;金田一春彦（編）（1976）『日本語動詞のアスペクト』，pp.63-81，むぎ書房に再掲.
寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版.
寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版.
豊田豊子（1979）「発見の「と」」『日本語教育』36 号，pp.91-105，日本語教育学会.
豊田豊子（1983）「接続助詞「と」の用法と機能（Ⅴ）―因果を表す「と」―」『日本語学校論集』10 号，pp.1-24，東京外国語大学外国語学部付属日本語学校.
中右　実（1991）「中間態と自発態」『日本語学』10 号，pp.52-64，明治書院.
中右　実（1994）『認知意味論の原理』大修館書店.
西尾寅弥（1972）『形容詞の意味・用法の記述的研究』（国立国語研究所報告 44）秀英出版.
仁田義雄（1989）「述べ立てのモダリティと人称現象」『阪大日本語研究』1 号，pp.31-62，大阪大学文学部日本語学科（言語系）.
仁田義雄（2001）「命題の意味的類型についての覚え書」『日本語文法』1 巻 1 号，pp.5-23，日本語文法学会.
仁田義雄（2010）「事態の類型と未来表示」，『日本語文法』10 巻 2 号，pp.3-21，日本語文法学会.
日本語記述文法研究会（2008）『現代日本語文法 6　第 11 部　複文』くろしお出版.
坂東美智子・松村宏美（2001）「第 3 章　心理動詞と心理形容詞」，影山太郎（編）『日英対照　動詞の意味と構文』，pp.69-97，大修館書店.

樋口文彦（1996）「形容詞の分類—状態形容詞と質形容詞—」，言語学研究会(編)『ことばの科学 7』，pp.39-60，むぎ書房.
樋口文彦（2001）「形容詞の評価的な意味」，言語学研究会（編）『ことばの科学 10』，pp.43-66，むぎ書房.
藤井　正（1966）「「動詞＋ている」の意味」，金田一春彦（編）（1976）『日本語動詞のアスペクト』，pp.98-114，むぎ書房.
堀川智也（1992）「心理動詞のアスペクト」，『北海道大学言語文化紀要』第 21 号，pp.187-202.
前田直子（2009）『日本語の複文』くろしお出版.
益岡隆志（1987）『命題の文法—日本語文法序説—』くろしお出版.
益岡隆志（1997）「表現の主観性」，田窪行則（編）『視点と言語行動』pp.1-11，くろしお出版.
益岡隆志（2000）『日本語文法の諸相』くろしお出版.
益岡隆志（2004）「第 1 章　日本語の主題—叙述の類型の観点から—」，益岡隆志（編）『主題の対照』pp.3-16，くろしお出版.
益岡隆志（2008）「叙述類型論に向けて」，益岡隆志（編）『叙述類型論』pp.3-18，くろしお出版.
松瀬育子・今泉志奈子（2001）「第 7 章　中間構文」，影山太郎（編）『日英対照動詞の意味と構文』pp.184-211，大修館書店.
眞野美穂・影山太郎（2009）「第 2 章　状態と属性—形容詞類の働き」，影山太郎編『日英対照　形容詞・副詞の意味と構文』大修館書店，pp.43-75.
三原健一（2000）「日本語心理動詞の適切な扱いに向けて」，『日本語科学』8，pp.54-74，国立国語研究所.
三原健一（2004）『アスペクト解釈と統語現象』松柏社.
森山卓郎（1988）『日本語動詞述語文の研究』明治書院.
柳澤浩哉（1992）「シテイル形式の報告性」，『地域文化研究』18，pp.53-74，広島大学総合科学部.
柳澤浩哉（1994）「テイル形の非アスペクト的意味—テイル形の報告性—」，『森野宗明教授退官記念論集 言語・文学・国語教育』三省堂，pp.165-178.
八亀裕美（2008）『日本語形容詞の記述的研究—類型論的視点から—』明治書院.

山岡政紀（1998）「感情表出動詞文の分類と語彙」,『日本語日本文学』第 8 号, pp.1-17,　創価大学日本語日本文学会.

山岡政紀（2000）『日本語の述語と文機能』くろしお出版.

吉永 尚(2008)『心理動詞と動作動詞のインターフェイス』和泉書院.

—英語文献—

Carlson, Gregory N. (1980) *Reference to Kinds in English.* New York: Garland.

Dowty, D. R. (1979) *Word Meaning and Montague Grammar.* Dordrecht: D. Reidel Publishing Company.

Fagan, Sarah M.B. (1992) *The Syntax and Semantics of Middle Constructions: A Study with Special Reference to German.* Cambridge: Cambridge University Press.

Fellbaum, Christiane (1986) *On the Middle Construction in English.* Bloomington: Indiana University Linguistic Club.

Givón, Talmy (1979) *On Understanding Grammar.* NY: Academic Press.

Givón, Talmy (2001) *Syntax I: A Functional-Typological Introduction.* Amsterdam: John Benjamins.

Grimshaw, Jane (1990) *Argument Structure.* Cambridge, MA: The MIT Press.

Keyser, Samuel Jay and Thomas Roeper (1984) On the Middle and Ergative Constructions in English, *Linguistic Inquiry* 15-3, pp.381-416.

Smith, Carlota S. (1991) *The Parameter of Aspect,* Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.

Van Oosten, Jeanne (1986) *The Nature of Subjects, Topics and Agents: A Cognitive Explanation.* Bloomington: Indiana University Linguistics Club.

Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy.* Ithaca, NY: Cornell University.

資料

—文完成課題の材料—

1. 高校最後の引退試合で優勝できなくて，悲＿＿＿＿＿＿＿とき，先生から大学のスポーツ推薦の話を聞いても，乗り気になれなかった。
2. 高校最後の引退試合で優勝できなくて，悲＿＿＿＿＿＿＿ので，先生から大学のスポーツ推薦の話を聞いても，乗り気になれなかった。
3. その子は, 高校最後の引退試合で優勝できなくて, 悲＿＿＿＿＿＿＿＿＿とき，先生から大学のスポーツ推薦の話を聞いても，乗り気になれなかった。
4. その子は, 高校最後の引退試合で優勝できなくて, 悲＿＿＿＿＿＿＿＿＿ので，先生から大学のスポーツ推薦の話を聞いても，乗り気になれなかった。
5. 彼女にふられて，悲＿＿＿＿＿＿＿＿とき，友人たちに突然家に押し掛けて来られて，迷惑した。
6. 彼女にふられて，悲＿＿＿＿＿＿＿＿から，友人たちに突然家に押し掛けて来られて，迷惑した。
7. その若い男子学生は，彼女にふられて，悲＿＿＿＿＿＿とき，友人たちに突然家に押し掛けて来られて，迷惑した。
8. その若い男子学生は，彼女にふられて，悲＿＿＿＿＿＿＿から，友人たちに突然家に押し掛けて来られて，迷惑した。
9. 就職試験に失敗して，悲＿＿＿＿＿＿＿＿ところ，指導教官の先生から励ましの言葉をかけていただいて，涙が出た。
10. 就職試験に失敗して，悲＿＿＿＿＿＿＿＿ため，指導教官の先生から励ましの言葉をかけていただいて，涙が出た。
11. その大学生は，就職試験に失敗して，悲＿＿＿＿＿＿＿＿ところ，指導教官の先生から励ましの言葉をかけていただいて，涙が出た。
12. その大学生は，就職試験に失敗して，悲＿＿＿＿＿＿＿＿ため，指導教官の先生から励ましの言葉をかけていただいて，涙が出た。
13. 上司に叱られて，悲＿＿＿＿＿＿＿とき，素敵な男性と出会って，結婚を考え始めた。

14. 上司に叱られて，悲＿＿＿＿＿＿＿ので，素敵な男性と出会って，結婚を考え始めた。
15. その若い女性社員は，上司に叱られて，悲＿＿＿＿＿＿とき，素敵な男性と出会って，結婚を考え始めた。
16. その若い女性社員は，上司に叱られて，悲＿＿＿＿＿＿ので，素敵な男性と出会って，結婚を考え始めた。
17. 友人と好きな映画の話で盛り上がって，楽＿＿＿＿＿＿＿ところに，玄関のインターフォンが鳴ったが，気づかなかった。
18. 友人と好きな映画の話で盛り上がって，楽＿＿＿＿＿＿＿＿＿ため，玄関のインターフォンが鳴ったが，気づかなかった。
19. その高校生は，友人と好きな映画の話で盛り上がって，楽＿＿＿＿＿＿＿ところに，玄関のインターフォンが鳴ったが，気づかなかった。
20. その高校生は，友人と好きな映画の話で盛り上がって，楽＿＿＿＿＿＿＿ため，玄関のインターフォンが鳴ったが，気づかなかった。
21. 草野球で久しぶりに仲間たちと汗を流して，楽＿＿＿＿＿＿＿＿ところへ，妻と娘が応援に来たので，機嫌良く手を振った。
22. 草野球で久しぶりに仲間たちと汗を流して，楽＿＿＿＿＿＿＿＿から，妻と娘が応援に来たので，機嫌良く手を振った。
23. その会社員は，草野球で久しぶりに仲間たちと汗を流して，楽＿＿＿＿＿＿とところへ，妻と娘が応援に来たので，機嫌良く手を振った。
24. その会社員は，草野球で久しぶりに仲間たちと汗を流して，楽＿＿＿＿＿＿から，妻と娘が応援に来たので，機嫌良く手を振った。
25. 趣味のトールペイントに没頭して，楽＿＿＿＿＿＿＿＿とき，2 階で寝ていた息子が泣き出したが，気づかなかった。
26. 趣味のトールペイントに没頭して，楽＿＿＿＿＿＿＿＿ので，2 階で寝ていた息子が泣き出したが，気づかなかった。
27. その奥さんは，趣味のトールペイントに没頭して，楽＿＿＿＿＿＿＿＿とき，2 階で寝ていた息子が泣き出したが，気づかなかった。
28. その奥さんは，趣味のトールペイントに没頭して，楽＿＿＿＿＿＿＿＿ので，2 階で寝ていた息子が泣き出したが，気づかなかった。

29. カラオケで得意の曲を踊りながら歌って，楽＿＿＿＿＿＿＿＿ところへ，同僚にマイクを奪われて，怒った。
30. カラオケで得意の曲を踊りながら歌って，楽＿＿＿＿＿＿＿＿から，同僚にマイクを奪われて，怒った。
31. そのサラリーマンは，カラオケで得意の曲を踊りながら歌って，楽＿＿＿＿ところへ，同僚にマイクを奪われて，怒った。
32. そのサラリーマンは，カラオケで得意の曲を踊りながら歌って，楽＿＿＿＿から，同僚にマイクを奪われて，怒った。
33. 子供の教育費の負担が増えて，苦＿＿＿＿＿＿＿＿ところを，親戚にお金を貸してくれと頼まれて，困った。
34. 子供の教育費の負担が増えて，苦＿＿＿＿＿＿＿＿ため，親戚にお金を貸してくれと頼まれて，困った。
35. その父親は，子供の教育費の負担が増えて，苦＿＿＿＿＿＿ところを，親戚にお金を貸してくれと頼まれて，困った。
36. その父親は，子供の教育費の負担が増えて，苦＿＿＿＿＿＿＿＿ため，親戚にお金を貸してくれと頼まれて，困った。
37. 学校でいじめられて，苦＿＿＿＿＿＿＿＿とき，いじめっ子が転校することになって，ほっとした。
38. 学校でいじめられて，苦＿＿＿＿＿＿＿＿ので，いじめっ子が転校することになって，ほっとした。
39. その小学生は，学校でいじめられて，苦＿＿＿＿＿＿とき，いじめっ子が転校することになって，ほっとした。
40. その小学生は，学校でいじめられて，苦＿＿＿＿＿＿ので，いじめっ子が転校することになって，ほっとした。
41. 研究に行き詰って，苦＿＿＿＿＿＿ところへ，先輩にアドバイスをもらって，救われた気分になった。
42. 研究に行き詰って，苦＿＿＿＿＿＿から，先輩にアドバイスをもらって，救われた気分になった。
43. その大学院生は，研究に行き詰って，苦＿＿＿＿＿＿ところへ，先輩にアドバイスをもらって，救われた気分になった。

44. その大学院生は，研究に行き詰って，苦＿＿＿＿＿＿＿から，先輩にアドバイスをもらって，救われた気分になった。
45. 禁煙がうまくいかず，苦＿＿＿＿＿＿＿とき，禁煙セラピーのことを同僚から聞いて，試してみることにした。
46. 禁煙がうまくいかず，苦＿＿＿＿＿＿＿ので，禁煙セラピーのことを同僚から聞いて，試してみることにした。
47. その若い女性は，禁煙がうまくいかず，苦＿＿＿＿＿＿＿とき，禁煙セラピーのことを同僚から聞いて，試してみることにした。
48. その若い女性は，禁煙がうまくいかず，苦＿＿＿＿＿＿＿ので，禁煙セラピーのことを同僚から聞いて，試してみることにした。

謝辞

本研究を進めるにあたり，多くの皆様のご支援をいただきました。ここに記して謝意を表します。

まず，主査であり指導教官である酒井弘先生には，修士課程在学中から今日まで，長期にわたってご指導をいただきました。酒井先生がいらっしゃらなければ，博士論文を完成させることも，これまで研究を続けることもできませんでした。心から感謝を申し上げます。また，白川博之先生には，本論文の審査委員としてご指導いただいただけでなく，ゼミに参加させていただき，有益なアドバイスをたくさんいただきました。また，いつも温かく励ましてくださったこと，深く感謝しております。本論文の審査委員である大浜るい子先生，迫田久美子先生，町博光先生には，論述の仕方や例文の判定まで，きめの細かいご指導をいただきました。その他の日本語教育学講座の先生方にも，研究会等で貴重なご意見をいただき，ご指導をいただきました。また，総合科学研究科の吉田光演先生にも，ゼミに参加させていただき，研究のアドバイスをいただきました。

酒井ゼミの先輩で，元助教の松岡知津子さん，研究員の中石ゆうこさんには，投稿論文や学会発表の前に原稿を見ていただいたり，相談に乗っていただいたり，大変お世話になりました。また，研究員として酒井ゼミに参加していらっしゃった小野創さん，里麻奈美さんには，研究発表の仕方などを丁寧に教えていただきました。酒井ゼミの 1 年先輩である鄧瑩さん，金英周さん，ロザリンさん，同期生のバルシュさん，佐藤淳さん，龍盛艶さん，後輩の坂本杏子さんとは，ゼミや論文講読会で意見交換をすることができ，良い刺激を受けました。白川ゼミの陳昭心さん，金志姫さんにも様々なご意見をいただきました。また，控え室でいっしょに勉強した大学院生の皆さんにも多くの励ましをいただきました。その他授業で私の研究発表を聞いてくださった大学院生の皆さんに感謝を申し上げます。

最後に，これまで精神的にずっと支えになってくれた家族に心からの感謝を述べます。今まで本当にありがとう。

2011 年 3 月